の會談が終つたあとで、すぐ陸軍大臣に任命された。それは既定の事實であつたので、陛下はただ一片の儀禮としてクロパトキンに聽いたに過ぎなかつた。

クロパトキンの最後の上奏報告の際であつた。彼れは、この報告の終つたあとで罷めさせられやうとは知らないで戰爭開始に當つてとるべき必要のあつた若干の計畫と國民の輿論の一致的希望について上奏した。彼れがアレクセエフ大將の後任として總司令官に任命されたのも、この輿論上奏がだいぶ手傳つたことであらう。

その後クロパトキンが總司令官の任命をうけて皇帝の所ろへ參內した時、彼れは陛下に曾て陸軍大臣をやめる前に上奏した計畫の遂行を願つた。陛下は早速サワロフに命令するからと答へた。そのあとで、彼れが日記をつけてゐるのを知つてゐた陛下は、命令の形式を整へるため詳しいことを承知したいから、日記を提出せよと言つた。

クロパトキンはその日のうちに皇帝のところへ自分の日記を送り屆けた。彼れの日記は二冊から成つてゐた。初めの一冊には彼れの上奏した計畫が書かれてあつた。彼れと皇帝との當時の會話は後の第二冊目の方に載せられてあつた。

皇帝陛下は、クロパトキンの提議した計畫を、彼れの日誌を參照して遂行するようにサワロフに命令した。その際、陛下は第一冊目の日誌を送るかはりに間違つて第二冊目の日誌を送つてしまつた。

サワロフは陛下の命令を讀みながら日記を開いて見た。するとそこには、

『私はサワロフの任命に反對する。彼れは軍隊において重要な地位を占めたことがなく、老耄であり、またひどい怠け者である』――と書いてあつた。

サワロフの陸軍大臣時代はあまり永くはなかつた。彼は當時不遇であつたニコライ・ニコラエウィチ太公の勢力によつて任命されたのである。太公は彼れを通じて自分の手に有利な武器を握らうと計つた。ところが彼れはその方法を過まつた。彼れは自分を任命してくれた勢力の手によつて大臣をやめさせられたのであつた。

第十一章　ヘーグ軍縮會議

露墺軍備協定の提議

一八九八年の半ば頃のことであつた。旅順、大連の占領問題に關する論爭後、長いあひだ不和の關係にあつたムラヴィヨフ伯が、突然私の所ろへやつて來た。彼れはクロパトキンから提議された問題について私と協議したいといふのであつた。

クロパトキンの提議といふのはかうである。彼れが受けとつた情報によると、オースタリーは急に砲兵の擴張をはじめた。わが陸軍の砲兵力はドイツ陸軍だけに對抗する程度のものである。であるからもしオースタリーが砲兵擴張案を實行するとなると、ロシアもこれに對抗して擴張をしなければならない。ところが現在ロシアは全歩兵の銃器改良に着手してゐて、これがため莫大な支出を決定したばかりである。この上歩兵と砲兵を同時に充實することは非常に面倒なことで、陸軍大臣として殆んど不可能なことである。であるから、外務大臣はオースタリーに對し、もし彼等がこの企圖を實行するなら我々も同樣な擴張をすると言つて、その砲兵擴張案を停止するよう交渉して貰へまいかといふのであつた。

私はムラヴィヨフに言つた。

『クロパトキン將軍の提議は全く實行不可能のことだ。第一そんな交渉をしたところで、目的を達成することが出來るものでない。オースタリーは拒絶するばかりか一笑に附するだらう。また一方から言へばそんな提議をすることは全ヨーロッパに我々の弱點を廣告するやうなものである。のみならずこのやうな提議は、結局、砲兵擴張費の支出といふことになり、それがため大藏大臣が緊急な他のことに對する費用さへも得られないやうな財政難を現出させること明瞭である。私にはこんな提議は兒戯としか思へない。またヨーロッパにおける軍備擴張競爭は全世界に非常な害毒を及ぼすものである。かういふ無駄な費用をつかふことは、國民を益々無力にし、遂には生活さへも困難にさせることになる。國民がそんな狀態になることは、やがて西ヨーロッパにあるやうな社會主義の勃興をうながすもとである。それでなくとも現に我々の國でこの傾向があるではないか。私は寧ろ戰爭に優るとも劣らないほど國民を苦めてゐる軍備競爭をやめて、小にしてはヨーロッパの幸福のため、大にしては全世界の幸福のため、軍備の制限に努力することをすべての國家と國民に希望するものである』

私は以上のやうな主旨を敷衍して熱心に說いた。私の話は、ムラヴィヨフ伯に非常な感動を與へたやうに見うけられた。私の說明は別段に事新らしい問題ではなかつたが、充分な敎養のないムラヴィヨフ

には耳あたらしく響いたのかも知れない。

軍縮會議の提唱

ムラヴィヨフと會談してから數日たつて、彼れは陛下の命令によつて重要なことを協議したいから外務省へ來てくれと私に通知してきた。

この會議には私のほかに、陸軍大臣、外務次官ラムスドルフ伯、その他二三の外務省の高級官吏が參加した。ムラヴィヨフ伯は我々に說明して、彼れは將來軍備撤廢問題か、少なくとも軍備制限問題を各國に提議する必要があるといふ意見を皇帝陛下に上奏した。すると陛下はこの主旨に非常な贊意を表されたと述べた。そして、平和會議召集に關する通牒の原案を讀みあげた。

クロパトキンはこの提議に反對した。陸軍大臣といふ職務にある者としては、それが當然だつたのであらう。が、私は自分の見地から言つた。

『こんな問題や計畫を起すのは無駄であるといふ陸軍大臣の意見も一應はもつとものことである。しかし、曾て陸軍大臣が提出された、「我々はオースタリーの眞似が出來ないからオースタリーに砲兵充實を止めてくれろ」――といふ提議の方がこの提議に比べて、はるかに實行不可能で奇妙なものだと思ふ。また一方からいへば、國際間の葛藤の平和的解決手段を講ずるために問題を喚起することは、極めて望ましい考へであると思ふ。であるから私は外務大臣の企圖に全然贊意を表する者である』

一八九八年八月十二日にこの計畫は實行された。そして各國の一般的共鳴をよび起した。各國は一般的平和を鞏固にするために我々のとつた手段にたいし、わが皇帝陛下に非常な感謝の意を表した。その後、ヘーグにおいて平和會議が開かれた。この平和會議は一八九九年五月六日に開催され、五月十八日に閉會した。

第十二章　イ・エリ・ゴレムイキン侯

ムラヴィヨフ伯の慾望

一八九九年、私は酒類專賣を實施してゐる各縣下を巡視した後、クリミヤへ行つて暫らく其地で妻子と共に休養の日を送つたことがある。私がクリミヤへ轉地したのが遲かつたので、私が到着してから二・三週間するとムラヴィヨフはクリミヤから引上げてしまつた。

クリミヤに到着後四五日して、私はムラヴィヨフ伯を訪問した。すると彼れは世間話しとも懇願ともつかぬやうなことを私に言つた。

『自分のえた情報によると、皇帝陛下は、ゴレムイキン侯が自由主義の人物で、保守的理想に缺けてゐると考へてゐる。それがために彼れは内務大臣をやめることになるであらう。僕はこの間の消息をよく知つてゐる。それでその後任には僕がなりたい。これについては、セルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公が支持することになつてゐる。太公はこの件について、すでに皇帝に申上げた筈だ。もしさうなつた場合、君が邪魔をしないように賴む』

言ひ換へれば、ゴレムイキンの後任者に私がシュピャギンなぞを推薦しないように賴むといふのであつた。私はムラヴィヨフに言つた。

『私はこの話を耳にするのは今が始めてである。また自由主義的だといふ理由で、陛下がゴレムイキンを罷めさせるといふことは信じがたい。例へさうであるとしても、陛下が後任者について私に諮問することは絶體にないと確信する。曾てドゥルノウォが内務大臣をやめた時、陛下がその後任者として、プレヴェかシュピャギンかと下問された際、私がシュピャギンを推薦したことは事實である。しかし陛下はプレヴェもシュピャギンも任命しないで、ポベドノスツェフの推薦でゴレムイキンを任命したことは君も知つてるではないか』

ムラヴィヨフは、私がゴレムイキン辭職問題について何も知らないと言つたのを信用しさうもなかつた。また私としては、大臣に就任するとすつかり自由主義を放棄して、隨分保守的なことをやつたゴレムイキンが、今さら保守的でないといふ理由で罷免される意味がどうしても判らなかつた。

ゴレムイキンの學生彈壓事件

ゴレムイキンがどんなに保守的であつたかといふことは、地方行政上のことで何か問題が起つた時

いつも地方長官を支持したことや、一八九八年から九九年にかけて起つた大學生騷擾の時に彼れのとつた處置を見ればよく判るのである。ペテルブルグ大學生が騷擾を起した時、彼等は大學附近の街頭で騷いだので騎馬巡査がこれを鎮壓に向つた。その際、騎馬巡査は彼等を解散させるため何らの豫告もしないで、いきなり暴力手段に訴へて數人を虐殺した。

その後、この問題についてゴレムイキンの官舍で會議が開かれた。この會議には文部大臣ボゴレポフと私と尙ほ二三の人が列席した。ゴレムイキンとボゴレポフは、當時騎馬巡査のとつた行爲を是認するばかりか、これを稱揚するやうな口吻を洩らした。私はこれに反對を表明した。そして大學生が惡いか巡査が惡いか調査をすることが、この騷擾を鎭める唯一の途であると主張した。私はこの事件について、當時の覺書を記しておいた。それは私の記錄のうちに記載されてゐる。

結局、皇帝陛下は私の意見に同意して、事件の審理をすることになつた。ところがこの審理を委任されたのは、誰れあらう前陸軍大臣のワンノフスキー大將であつた。これには世人が一寸と驚ろかされてしまつた。

皇帝陛下は、ワンノフスキーが意志の强い決斷力のある軍人通有の峻烈さをもつ人物であることを知つて選ばれたのであらう。私はこの任命があつた時、彼れが果して適任であるかどうか疑問を抱いた。ところが、尊敬すべきワンノフスキー大將は、高潔な良心をもつてこの事件を處理したのであつた。

彼れは永い間ペテルブルグの幼年學校長を勤めた經歷があり、青年に對する仕事の經驗をもつてゐた。老人はやゝともすると青年の心理を忘れて、彼等の運命を決定したがるものである。ところがワンノフスキーはよくこの青年の心理を理解してゐた。

彼れは大部分の罪は警官にあると認め、二流どころの警察官を嚴罰した。私はこの處置を、こんな人達に向つてとらないで、彼等の長官や會議の席上で警察官の行爲を堂々と稱讃し、警官の行爲は常にかくあるべきであるといふ見解をもつてゐたゴレムイキンなぞを罰することが更らに必要であると思つた。

前にも述べたやうに、ムラヴィヨフは私より早くクリミヤを去つた。彼れは私がゴレムイキンの辭職を知りながら、これを隱してゐるものと感違ひしてゐた。彼れはきつと私がシュピャギンのことを斡旋でもするものと思ひ込んでゐたのだらう。

私はずつと遲くなつて、十月二十日にクリミヤからペテルブルグへ歸つた。シュピャギンは十九日に田舍から歸つた。そしてその日の夕方私の妻を訪づれた。私は仕事があつたので、彼れと逢つたのは彼れが妻のもとから立ち去らうとした時だつた。

私はシュピャギンに向つて、『ムラヴィヨフは陛下がダルムシュタッドから歸還されるとすぐに內務大臣

を交迭するやうなことを言つてゐたが、何かゴレムイキンについて聽き及んだことがあるか』――と問ふた。彼れは全然そんなことは知らないと答へた。

新内相シュピャギン

翌朝、私はゴレムイキンの内務大臣罷免の勅命と、その後任にシュピャギンを任命するといふ勅命を見たのである。すると偶然そこへシュピャギンがやつて來た。彼れは私に對して、『昨日うそを言つたのは誠に濟まないと思ふが、かくするより外自分として取るべき途がなかつた』ことや、『實はゴレムイキンの罷免については陛下が外國へ出發する前にきめられて自分を後任にするとのお言葉だつたからこれをお受けした』ことや、その際陛下は『命令の出るまでは何人にも一言も洩らしてはならぬと言つたので昨晩私に言へなかつた』といふことやら、彼れはこれを洩らさないため終始田舍に引つ込んでゐたことや、『陛下は自分の妻にだけは洩らすことを許された』ことなぞをいろ〳〵と辯解らしく述べてゐた。

ひそかに内務大臣候補者をもつて自任してゐた、そしてまた今度の任命を非常に不滿に思つたムラヴィヨフと彼れの後楯であつたセルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公は、私がこの任命を豫かじめ知つてゐたものと曲解し、陛下は私の意見によつてシュピャギンを任命したものと信じきつてしまつた。

この事件以來ムラヴィヨフは大藏大臣としての私に極端に反感をもち始めた。

プレヴェはまた曾てゴレムイキンが内務大臣に任命されたのは私の力である、私がゴレムイキンを援けて彼れの内務大臣任命に反對したのだ、と思ひ込んでゐた。こんな有樣で私はプレヴェ、ムラヴィヨフといふ二人の望ましくない强敵を作ることになつた。そして二人とも、前者は一八九五年に、後者は一八九九年に内務大臣になれなかつたのは、みな私のお蔭だと信じてゐた。しかし、前にも述べたやうに、それは根も葉もない事だつたのである。

政治探偵ラチコフスキー

内務大臣としてのゴレムイキンのことを語るについて、私は是非ともラチコフスキーといふ人物のことを紹介する必要がある。

ラチコフスキーは、アレクサンドル三世の時代からパリに駐在して政治秘密探偵部長をしてゐた男である。

當時、我々がだんだんフランスに近接したことと、アレクサンドル三世帝がフランスと協約を締結したことは、彼れのパリーにおける活動を著るしく擴大した。といふのはパリーでロシア皇帝に向つてテロル手段を畫策してゐたロシア革命黨員に對するフランスの態度が一變したからである。ラチコ

フスキーは非常に悧巧な人物で、またよく政治諜報の仕事を組織しうる才能をもつてゐた。彼れは私が今日までに逢つた多くの政治警察指導者のうちで最も勝れた者の一人であつた。現に彼れの後任者で彼れに匹敵する者は一人もなかつた。アゼフやガルディンゲなぞの無賴漢はいふに及ばず、ゲラシモフやコムミサロフなぞでも、才能の點では到底彼れに及ばなかつた。最もモレンゲイメだとかウルソフなぞいふ無爲にして平凡な大使がパリーに駐在したことが、ラチコフスキーをより偉大にさせたのかも知れない。が、とにかく彼れが自分の才能に任せて大使達よりもフランス官憲との接近に手腕を振つたことは事實であつた。彼れの勢力は直接に、或る時は內務大臣を經て、或る時は憲兵司令官を經て、または間接に大使を通じて隨所に現はれたものである。

私がパリーにゐた時、フランス大統領ダウベは、ラチコフスキーの探偵的天才と組織的手腕に信賴してゐることを私に話したことがある。大統領が曾てリオンにゆく必要が起つた時、大統領暗殺の噂が立つた。大統領は自分の護衛をラチコフスキーに依賴した。彼れは大統領の護衛兵よりもラチコフスキーの警察的手腕に一層の信賴をおいてゐたと語つてゐた。ラチコフスキーがいかに重要な人物であつたかはこの一事でも知ることが出來よう。

ロシア大官の收賄ぶり

一八九九年八月の末に、陛下は外國旅行に出發された。私も間もなく、前に述べた通りロシア各地の巡視に出かけた。ゴレムイキンは內務大臣の資格でこれまた外國旅行に出かけた。

ゴレムイキンの一行には有名な精神病學者バリンスキーの息子の技師バリンスキー、半分文學者で半分秘密政治探偵のやうなことをしてゐて、最後に話しの出來ないやうな家で死んだ騎兵大將の息子のエム・エム・リヤシェンコ、パリでこの一行に加はつたラチコフスキーなぞがゐた。

これ等の一行は、常に旅行を共にした。ゴレムイキンはその時まだ內務大臣であつた。この一行はイギリスに渡つて各地を視察し、いろいろの工業會社と契約を結んだ。この際にペテルブルグ郊外還狀鐵道(?)の建設に關する契約なぞも締結した。

當時有名なダチシチェフは大藏省派遣の代表者としてパリにゐた。私がここで彼れのことを「有名」なといふ理由はあとで述べる。

ダチシチェフは大藏大臣としての私に對し、ゴレムイキンはこれこれの隨員をしたがへてイギリスの各地を旅行し、イギリス工業會社とこれこれの不正な契約を結んだ。これ等の事實（彼れはこれについて證據書類を提出した）を彼れが知らないとはどうしても思へない。またゴレムイキンの隨員達はイギリス工業家からいろいろな收賄をしてゐると報告して來た。

ダチシチェフの記述によつて見ると、もしゴレムイキンがこれらの收賄に關與してゐないとしても、

これが彼れに知れない筈のないことが明らかであつた。

ここで述べておく必要があるのは、ゴレムイキンがバリーにゐる自分の部下ラチコフスキーに對して特別に慇懃な態度で接し、遂に最もいい關係を結んだといふことである。その後ゴレムイキンが總理大臣になつた時、彼れは早速ラチコフスキーを自分のもとに呼びよせ、フォンタンカに在る大臣官舍に一所に住んでゐた。

私はこのタチシチェフの報告を大藏大臣の記錄の中に收めておいた。當時の私の秘書官（もしかすると局長であつたかも知れない。そのことを私はよく記憶してゐない）はプチロフであつた。彼れはその後貴族・農民銀行の總裁になつたが、私が總理大臣を辭した時私と共にやめて現在は露亞銀行の總裁をしてゐる。

色魔外交官タチシチェフ

私がなぜタチシチェフを「有名」と言つたか、それを說明すればかうである。タチシチェフは、以前は外務省に勤めて非常に優れた外交官であつた。彼れはカトリック敎徒で、曾てノウィコフが駐墺大使であつた時、ウインで實質上の大使の役目を演じてゐたものである。

露土戰爭が勃發すると、彼れは我々の親獨政策の大々的な反對者となつた。でなくとも彼れは平常から親獨政策の反對者であつた。これがため（彼れ自らはかく信じてゐる。また多分それが眞實であらう）ビスマークの壓迫により、とうとうウイン大使館書記官の地位を去らねばならないやうになつた。彼れは職を辭すると奮つて義勇軍に投じて戰爭に行つた。そしてゲオルギー勳章を授與され、その後ロシアへ歸つて來た。

茲で言つておく必要があるのは、タチシチフが職を去つた事情である。ビスマークの陰謀だといふ彼れの主張は實際に有りうることであらう。が、また一方からいへばウインにおける彼れの行ひが自分の地位にふさはしく無かつたからだとも言へる。彼れは始終有名なオペラ女優と同棲してゐた。その他彼れは有力な外交官としてはあまり望ましくない行ひをしてゐた。遂には機密書類を外國人に賣却したといふ寃罪を負はされ、アレクサンドル三世帝も皇后もこれを信じたほどであつた。

すべてこれ等のことは、彼れをして全く常規を逸せしめたのであつた。

私はタチシチェフが非常に天才的な能力のある人物であることを知つてロンドン駐在財務官にした。彼れはプレヴェが內務大臣に就任するまで、ずつとその職にあつたが、プレヴェの就任と共に內務省に入つた。彼れはまた「ノヴォエ・ウレミヤ」紙上にいろいろな寄稿をするので有名だつた。その中で最も傑作と認められたのは「アレクサンドル二世帝の統治史」であつた。

前にも述べたやうに、ゴレムイキンがヨトロッパ旅行をおへると間もなく、十月二十日に職を免せ

られて、シュピャギンがその後釜に任命されたのである。

證據書類の行衛

當時ペテルブルグに住んでゐたゴレムイキンの妻は、彼れの罷免を知つて非常に驚ろいたさうである。それから察すると、ゴレムイキンの内務大臣罷免は全く不意うちで、彼れは少しもこれを豫期しなかつたものと見える。その後彼れは私に、恰もこのことを皇帝から豫告されたやうに言つてゐたが私は彼れの言葉を信じない。寧ろかく吹聽しなければならない何かの必要が、彼れに有つたのではないかと思はれる。

シュピャギンが内務大臣に就任後、ゴレムイキンは外國旅行を共にした腹心の者等と一緒になつて私に對する陰謀を廻らしてゐた。かう言ふことがあつた。或るときシュピャギンが私に『エム・エム・リャシチェンコを知つてゐるか』――と問ふたことがあつた。私は彼れに『よく知つてはゐるが、あの人物は寄せつけてはならない惡黨だといふ意味で知つてゐる』と答へた。すると彼れは言ひかけたことをあはてて止めてしまつた。なにか彼れと一緒にした……と言ひかけて、後から『いや決してそんなことはなかつた』と頻りに誓つてゐた。

私はシュピャギンに、ゴレムイキンがパリンスキー、リャシチェンコ、ラチコフスキーと共に旅行した經過を詳しく話してやつた。するとシュピャギンは、イギリスにおけるゴレムイキンの行動について私の受けた報告を暫らくのあひだ借して貰ひたいと言つた。私はその報告を彼れに與へた。その後、シュピャギンは私に『あの報告は御入用ですか？　もし差支へがなければ數週間だけ私の手元に置きたいから……』と言つて來た。私は彼れに、『あの報告はいま僕には必要がない。ただ記錄の中に收めておいただけで、別にあれをどうしようとも考へてゐない』と答へた。

このことがあつてから數日たつて、シュピャギンはバルマシェフといふ男に暗殺されてしまつた。このことについては尙ほ後章で述べるつもりである。

これを知つて、私はシュピャギンに渡した書類を取り戻さうと思つた。ところがその書類は特別委員會で破棄されてしまつたのである。この特別委員會の首腦者には、シュピャギンの友人だつたミルスキー侯やドゥルノヴォが任命されてゐた。私は彼等にこれこれの書類が見當らなかつたかと問ふた。すると彼等は『さういふ書類ならあつたことはあつたが、何處からシュピャギンが手に入れたか不明なのでそれを警保局長のドゥオリャンスキーに渡した』――と答へた。が、その後ドゥオリャンスキーは、これを破棄してしまつたといふ口實のもとに私に返してくれなかつた。

玆で述べておかねばならぬことは、ドゥオリャンスキーがゴレムイキンの親友であつたことである。彼等二人は、一時警保局長や憲兵司令官を勤めてゐたペトロフ將軍の妻の崇拜者であつた。二人の競

爭者が一人のペトロフ夫人に接近しながら親しい友達になつたといふ原因は、どうしても私には合點が行かないのである。

私はこの證據書類がなくなつたのを非常に惜しんだ。何故ならば、もしそれが私の手許にあつて、これを自由に處置することが出來たなら、農業補救會議でゴレムイキンのやつた陰謀の前に、これを提出することが出來たと思ふからである。殊に一九〇五年後において、また十月十七日（註）の前後において、この感を深くしたのであつた。

註・「十月十七日」といふのは、一九〇五年の革命亂に際して憲法の發布を約束する勅令の出た日である。――（監修者）

第十三章　團匪事件とロシアの極東政策

排外運動と支那政府

イギリスがロシアの企圖に倣つて威海衞を占領したことは、私が前に述べた通りである。次いでフランスは支那の南部で占領を行ひ、イタリーもまた色々な要求を提出して、支那政府に向つて讓歩を强要した。

かくしてドイツとそれを眞似たロシアの企圖は、遂にヨーロッパ各國をして、支那分割の端をひらかせたのであつた。

この狀態はいたく支那人の國民的感情を刺戟した。その結果、團匪の出現となつたのである。この運動は、はじめ南方に起つたのであるが、その後北京及び北支那一帶に波及した。

『ヨーロッパ人は支那を餌食にしてゐる。彼等は支那の國富を掠奪する者である。支那の國運を非常な危機に陷いれたのは彼等ヨーロッパ人である』――といふのがこの運動の原因であつた。

支那政府は陰に陽に團匪の味方をしてゐた。少なくとも政府はこの擾亂にたいして何等の方策も講

じなかつた。またこれを講ずる希望もなかつたのである。

擾亂が北京に及んできた時、さらにドイツ宣教師の一人が殺害された。事態はますます險惡になり遂に各國公使は彼等の重圍に陷つてしまつた。ヨーロッパ各國と日本は、この擾亂を鎮定して首魁を處罰するために共同動作を取らうといふ協定をした。私は、この事件についてはあとで詳述する機會もあるので、こゝでは單に次のことだけを述べるに止める。

團匪事變が起つたとき、陸軍大臣クロパトキンはドン地方を旅行してゐた。彼れは急遽ペテルブルグへ歸つてきて、得々としていきなり停車場から大藏省にゐた私のところへやつて來た。私は彼れに言つた。

『どうだ君、とうとう關東州占領の結果が現はれて來たね』

彼れは欣然としてこれに答へた。

『僕にとつては、この結果はむしろ望むところだ。これで滿洲占領が出來るのだから……』

私は問ふた。

『君はいつたい、どういふ風に滿洲を占領しようと言ふのだ。我々の國の縣にでもしようといふのかね？』

するとクロパトキンは答へた。

『いや、さうじやない。しかし滿洲はどうしてもプハラのやうにする必要がある』

要するに關東州占領の結果は、次ぎのやうな事件を惹き起したと言ひうるのである。

一、日本をなだめるために、朝鮮におけるロシアの勢力を絶滅してしまつた。（このことは一八九八年四月十三日の協約に記載されてゐる）

二、戴冠式當時モスクワで締結された露支秘密條約に違反した。

三、各國の支那分割を誘致した。彼等は、ロシアに旅順及關東州の占領を許した以上、自分たちが占領を行つて惡いといふ理由はないと稱して、高壓手段をもつて支那を脅威し、港灣や各種の利權を獲得しはじめた。

外相ムラヴィヨフの急死

支那におけるかうした占領が支那各地方の人心を刺戟して遂に團匪の出現となつたのである。

團匪事變は一八九八年、その出現の際はたいしたものでなかつた。が、一八九九年になると著るしく勢力を增大し、一九〇〇年ヨーロッパ諸國の鎮壓手段によつて漸やく終熄したのである。はじめ支那政府は、この擾亂にたいし何ら鎮壓の手段をとらないで、ただ平然と看過するに過ぎなかつた。しか

し遂には、むしろ彼等に援助をあたへ、自から好んで外國の武力干渉を惹き起したのである。

一九〇〇年六月八日、突然ムラヴィヨフ伯が急死した。前にも私が述べたやうに、ムラヴィヨフが極東でとつた不幸な政策の結果、私と彼れとは全く仲違ひをしてしまつた。で、二人は公けの交渉のほかに私的關係をもたなかつた。團匪の亂は支那の領土を占領したムラヴィヨフ等の干渉政策の結果であつた。私は彼れの政策が必らずかういふ不幸な結果を生むことを前から確信してゐた。恰度團匪が蜂起して、各國の公使が北京で半籠城の狀態に陷いつた一九〇〇年六月七日の晩のことであつた。午後十時ごろに、突然私のところへムラヴィヨフが訪ねてきた。最近個人的にちつとも往來してゐなかつた際だから、彼れの訪問は非常に私を驚ろかした。

當時、私はエラギン島にある宮殿附屬の建物で、供奉者の家と呼ばれてゐた家に住んでゐた。私の書齋は二階にあつた。私はそこへムラヴィヨフを案内した。すると、恰度この時、大藏省からの使者が色々な書類をもつてきた。それはすぐに閲覽して署名する必要がある書類であつた。――ムラヴィヨフは私の書齋にはいつて來るとすぐに私に言つた。

『セルゲイ・ユリエヴィチ！　我々は旅順、大連占領このかたお互ひに氣まづい間柄になつてゐた。しかし僕は今はじめて解つたよ。とうとうこんな騷ぎが起きてしまつた。實際あの時君が言つたことはほんとうだつたのだ。だが、どれもこれもみんな濟んでしまつたことで、今さらどうにもならない。今になつてはただ君に和解してくれとお願ひするばかりだ。そしていま北京に起つてゐる事變にたいして方策を講ずるため、君の援助を希望するほかはないのだ』

私は彼れに言つた。

『僕はこの事變が起きたのは當然だと思つてゐる。いや、これを期待する必要があつたとさへ思つてゐる。しかし今さらそんなことを言つても仕方がない。我々は同じ祖國にうまれ一人の皇帝のもとに働らいてゐるのだ。お互ひに協力して事に當るのは僕の義務だと思つてゐるよ』

二人の會話は十一時頃までつづいた。その際ムラヴィヨフは、

『今後は經驗ある君の意見を大いに尊重する』――と頻りに誓つてゐた。

まもなく彼れは立ちあがつた。そして別れを告げながら、私の妻の在否を問ふたから、私は客間にゐる筈だと答へた。彼れが立ち去る時、私は言つた。

『僕は用事があるからこれで失禮する』

私は書類の閲覽を濟ませなければならないので、召使が彼れを案内した。私は十二時近くまでかかつて書類の閲覽を濟ませた。そして下へ行かうと思つて階段を降りかけると、應接間からムラヴィヨフと妻の高らかな笑ひ聲が聞えてきた。ムラヴィヨフが私のところへ立ち寄つたのは、クレインミヘリ伯爵夫人のところの晩餐會の歸り途であつた。酒好きの彼れがこの晩餐會で良い酒を大いに御馳走に

なつたことは想像に難くない。

私が應接間に入らうとした時、ムラヴィヨフはまだ笑ひ續けながら出て來るところであつた。

『君の奥さんのところへ來ると、いつもこんなに愉快になつてしまふよ』

彼れはさう言ひ殘しながら待たせてあつた馬車に乘つて歸つて行つた。

私は咽喉が渴いたので、水を一杯くれるように妻に命じた。そのあとで大きなシャンペン盃（グラス）を手にとつた。私はシャンペンがあるなら一杯飲みたいと思つた。ところが一本も殘つてゐなかつた。ムラヴィヨフが最後の一滴もあまさず飲み盡してしまつたのである。――私は妻に言つた。

『ムラヴィヨフ伯は實にしあはせな人間だ。僕があんな眞似をしたら、おそらく翌朝は死んでしまふだらう。ムラヴィヨフは一と晩飲みあかしても平氣なんだからまるで鷺鳥が水を飲むやうなものだ』

翌六月八日の朝、私は早く起きた。そして、いつものやうに乘馬の散歩に出かけた。私は一時間半か二時間ばかり散歩をして歸つて來た。馬からおりると召使があはてて私の前へ飛んできて言つた。

『ムラヴィヨフ伯は、何かあなたに遺言でもされましたか？』

私はなにを言つてゐるのか、すぐには了解出來なかつた。で、彼れに反問した。

『お前は何を言つてゐるのだ？』

すると彼れは答へた。

『今朝、ムラヴィヨフ伯爵がお亡くなりになりました』

私はすぐに馬車を命じて彼れの家へ馳せつけた。ムラヴィヨフ伯は、すでに冷たい死骸を寢臺の上に横たへてゐた。家人の語るところによると彼れはその朝起き出てからコーヒーを飲まふとして食卓についた。と、俄かに腦溢血の症狀を起し、そのまゝ床の上に倒れてしまつた――とのことであつた。遺言だ何んだと騷ぎだしたのは、その後のことであつた。

新外相ラムスドルフ伯

私が上奏報告に參内した時のことである。報告がおはると、陛下は窓の方をふり向いて私に背を向けたまゝで問ふた。

『セルゲイ・ユリエヴィチ！　外務大臣の後任には誰れを任命したらよいか、君の意見を聽かしてくれ給へ』

私はいつものやうに陛下に問ふた。

『陛下は誰れか後任者について考へておいでになりますか？』

陛下は言つた。

『いや、誰れも考へてはゐない』

私は陛下に言つた。

『これは陛下がどの方面から人物を拔擢されるかによつて決まることです。外交官として經驗のある者から選任するか、他の方面から選ぶかによつて決まる問題です。もし陛下が他の方面から物色するお考へならば、私は古參大臣のうちで最も常識的な人物を拔擢して任命することをお勸め致します。さういふ人物は、或は外交問題に暗いかも知れませんが、少なくともいろいろな事件を處理するのに愼重な態度をとることが出來ます。ロバノフ・ロストフスキー侯やムラヴィヨフ伯のやうな輕卒な行爲に出ないことだけは保證することが出來ます。もしまた陛下が外交官の中から拔擢するお考へであるならば、私は大使のうちに大臣としての適任者はないと思ひます。ただ一人ラムスドルフ伯だけをお勸めすることが出來ます。彼れは、外國大使としての經驗こそありませんが、終始外務省内に勤務した經歷はあり、人物としてもまた相當すぐれた才幹をもつております』

陛下は私の推薦をうけ入れた。ラムスドルフ伯はまづ外務大臣心得となり、それから大臣に任命されたのである。私はラムスドルフ伯に向つて『なぜ旅順占領のやうな暴擧をムラヴィヨフ伯にやらせたのか、なぜこれを引き止めなかつたのか、これがために、いつ果てるか判らない現在のやうな危險な事態をひき起したではないか』――とよく難詰したものである。私の考へでは、ラムスドルフ伯はムラヴィヨフを引き止めることは知つてゐたのであらう。しかし、彼れは自分の長官と爭ふことを欲しないで傍觀的態度をとつたものと見える。

北京・天津の占領

我々はヨーロッパ各國と共に武力干涉の發頭人になつた。はじめ、イギリスと日本、それからアレクセエフ提督の率ゆるロシア艦隊は芝罘沖に現はれて砲擊をした。その後、イギリスのセイマア提督は天津に陸戰隊を上陸させ、暴徒の重圍中にあつた各國使臣を救援するために北京へ向つた。セイマアは自分の率ゆる小支隊だけの兵力では不充分だと思つた。そこでワリデルゼエ元帥の率ゆる大部隊を派遣することになつた。しかし同元帥が海路遙々ドイツから支那へやつて來る間に、支那の事變はどんどん發展して行くので、我々は別に單獨で北京派遣軍を送ることになつた。そこでもまた私とクロパトキンとの間に意見の確執が起つた。

私は、北京へ軍隊を派遣する必要はない。北京のことは各國にまかせて我々は手をふれない方がよいといふ意見であつた。そこで、クロパトキンにも陛下にもさうするやうに說得につとめた。

ところがクロパトキンはこれとは全然反對な行動をとつた。我々は北京でも、その遠征の途中でも支那人膺懲の最大な役目を演じたのである。――私は陛下に勸告した。

『吾々はこの事件に干渉する必要はありません。ロシアは滿洲を除いた支那の何處にも直接利害關係はないのです。支那と支那人を憤慨させないで滿洲の治安を維持する必要があるだけです。北京や南支那のことは、そこに利害關係のある列國に任せておけばよいのです』

結局、事件は私やラムスドルフ伯の意見とは反對に進展して、リネヴィチ將軍の率ゆるロシア軍隊は日本軍と共に北京へ進入することになつてしまつた。

かくして、我々は支那にたいする刑罰の執行者となつたのである。

我々は遂に支那を屈伏させた。西太后と若い支那皇帝は北京から逃げだし、我々は日本軍と共に北京を占領した。この占領は軍隊のやつた掠奪行爲で當時有名になつたものである。北京の宮殿なぞは一物もあまさず掠奪されたのであつた。

北京の占領後、支那人にたいしては何等の刑罰をも加へなかつたが、その代りに個人の財産や宮殿の財寶はひどく掠奪された。その際ロシア軍隊の指揮官も他國同樣この掠奪に參加したといふ風說が立つたことは遺憾である。しかもそれは風說に止まらなかつた。私はその後、北京の財務官ポコチロフから非公式の情報を受取つてその風說が事實であることを知り、非常に殘念に思つた。

北京占領後に我々のとつた處置は非常に賢明であつた。といふのは、私やラムスドルフ伯の力說によつてロシア軍隊はすぐに北京を撤退したからである。

團匪事變がこのまゝ鎭まれば私達の處置は意義ある成果を收めることになつたのであるが、不幸にして事變は滿洲にも波及してきた。はじめのうちは、若干の鐵道附屬建物の放火や、從業員が掠奪されるぐらゐであつたが、遂にはこれが次第に烈しくなつた。滿洲に擾亂が波及してくると、クロバトキンはすぐに沿海州駐屯軍を派遣しようとした。私は、始めのうちこの出兵に反對して、滿洲では小さな事件が起きたばかりで至極平穩だから軍隊を派遣する必要はない――と說得に努めた。ところがロシア軍が北京遠征を敢行すると、滿洲の住民は武裝して我々に反抗しだし、事態は容易ならぬ危險を現出した。結局私までが沿海州からの出兵を認めなければならぬ樣なことになつてしまつた。

クロバトキンはこの事件に際しても頗ぶる輕卒な行動をとつた。彼れは沿海州の兵を動かしたばかりでなく歐露からも大兵を派遣したのである。

私は、支那の現狀は大部隊を送る必要に迫られてはゐない、秩序維持のために小部隊を派遣すれば充分であることを指摘した。ところがクロバトキンは、かなりな大部隊を滿洲に移動させた。しかも實際の狀態は、滿洲におけるわが軍隊の行動が甚はだ暴慢であつたにもかゝはらず、僅か數千の軍隊を派遣すると住民はたちまち平穩に歸したのである。であるから、ヨーロッパから海路わざわざ極東に派遣された軍隊は、旅順・大連に到着すると用がなくなり、そのまゝ歸還することになつた。そしてシ

ベリア鐵道で極東へ送られた軍隊は南滿・北滿を占領して、いつかな撤退しようとしなかつた。

ロシアの滿洲二頭政治

ロシア軍が滿洲に侵入すると間もなく、支那においてロシア官權の二頭政治が始まつた。その一つは平和政策を持した鐵道行政機關（その中には國境鐵道守備隊を含んでゐた）で、彼等は永く彼地にあつた間に、支那官憲や住民といゝ關係をむすんでゐた。自分たちが正當にやりさへすれば、支那は信頼しうる同盟國にもなつてくれるといふ確信をもつてゐた。彼等は關東州占領によつて釀された誤解を拭ひさることに努力した。南北支那に利害を有する各國の當然なすべき刑罰執行者の立場をロシアが進んで買つて出で、なんら利害關係のない北京を占領した後までも平和的に南滿鐵道の建設を遂行したのであつた。

もう一つの權力は、クロパトキン配下の軍閥一派であつた。クロパトキンは、團匪事變が起つた際に得々として私に語つたやうに、『この機に乘じて滿洲を占領する必要がある』といふ思想を固く持してゐた。彼れは平和主義とは全く正反對な自己の理想を行つたのである。ロシア軍隊は支那の各地に勝手氣儘に駐屯し、恰かも占領地におけるが如く振舞つた。そしてやがて來るべきわざはひの萌芽を培つたのである。

私とラムスドルフ伯は、滿洲から速やかに軍隊を撤退し、支那との親善關係を關東州占領以前のやうに引き戻すことを度々陛下に勸告した。ロシアが勝手な眞似をしたり壓迫したりさへしなければ支那人は結局關東州占領の恨みを忘れて我々に近接して來る望みがあることを力說した。

ところがクロパトキンやその勢力下にある軍閥一派は、これとは全く反對に『違法的でも何でもかまはない、いやしくも我々が一度滿洲を占領したのは事實である。占領した以上はこれを利用しなければうそだ。この際なんでもかんでも勢力を扶植するのが我々の利益である』――と主張した。

我々の北京占領後、團匪の亂が滿洲に波及してきた際、はじめのうち支那側に少しばかり組織的軍隊らしいものがあつたことは事實である。しかしそれは間もなくロシア軍のため擊破されてしまつた。もつとも强大な團匪軍は奉天附近にあつたが、スボティチ將軍の率ゆる支隊のため擊滅されたのである。彼れはこの功によつてゲオルギー勳章を授與された。しかし、この勳章だけは戰功といふよりも彼れがクロパトキンの親友であつたことが主な原因であらう。この無力な支那軍隊が潰滅したあとでは、實際にいへば滿洲の住民は全たく平靜に歸したのであつた。ところが陸軍省は滿洲から撤退しないためにいろいろな口實を作りはじめた。この問題については當然意見が二つにわかれた。そして一年半もその確執が續いたのである。その一方は、外務大臣、大藏大臣、東支鐵道關係者、外務省の出先官憲などで、他方は陸軍大臣と滿洲にある軍閥連中であつた。

滿洲問題と皇帝の態度

陛下はこの問題に關してなんら斷乎とした決心をもたなかつた。外務大臣や大藏大臣の意見にたいして斷然たる不同意を表明しなかつたが、それと同時にクロパトキンの滿洲占領を支持するかのやうでもあつた。

しかし、この狀態は外務大臣とクロパトキンの間に起つた意見の確執から生じたのではなかつた。これは、曾て我々が朝鮮から撤退したとき、ひそかに奸策を弄する私的勢力が現はれたが、その連中によつて釀されたのである。

ベゾブラゾフ派の活躍

ベゾブラゾフといふ退職騎兵大尉がゐた。彼れは最近ロシアに現はれたウォンリャルスキー・マチュニン、騎兵大尉サアニンなぞの連中と同じやうな冒險家であつた。彼等はいづれも同種類の人間で、強ひて差別をつければ、その出身と教養がすこし違ふだけである。ところが一人ベゾブラゾフだけは正義の士だと考へられたのであつた。

ここで當然起つてくる疑問は、一體ロシアを日露戰爭へ引つぱつて行くやうな大冒險をやつて退けたベゾブラゾフといふ男はどんな人物であるか？　正義の士と言はれながらよくあの樣な大それた仕事が出來たものだ――といふことである。が、この疑問にたいしては、曾て彼れの尊敬すべき妻がはつきり答へてくれたことがある。彼女は健康がすぐれないので、始終ジュネヴに住んでゐた。したがつてベゾブラゾフも度々彼地に行つた。時には永いあひだ一緒に暮してゐたこともあつた。日露戰爭の直前に、陛下はベゾブラゾフを侍從に任命した。すると彼れは自分の妻を宮中に紹介するためジュネヴから妻を呼びよせたのである。

美人で正直な、そして教養のあるベゾブラゾフ夫人は、この有樣を見ていたく驚ろきながら言つた。

『私にはさつぱり判らない。どうしてまあ、こんな大仕事がサーシャに出來たのだらう。あの半氣違ひのやうな人間がみんなには判らないのかしら？』

ベゾブラゾフの說くところは斯うであつた。

『我々は斷じて朝鮮を放棄するわけに行かない。しかし我々は關東州占領後、日本との急激な衝突を避けるためにやむなく朝鮮を放棄したのである。少なくとも公式には一度朝鮮を放棄したのである。だから今となつては、かくれた非公式の手段で朝鮮に勢力を扶植するよりほかに途はない。それには全たく個人的な性質をおびた各種の利權を獲得しなければならない。そして實際は政府が指導者となり支援者となつて、組織的に漸次に朝鮮を占領するのである』

ベゾブラゾフはこの考へを當時何の職をも持たなかつた參議院議員ウォロンツォフ・ダシコフ伯に吹き込んだ。

ウォロンツォフ・ダシコフ伯は前からベゾブラゾフを知つてゐた。といふのは、アレクサンドル三世帝が即位のころ、伯がその近衛隊長をしてゐた時にベゾブラゾフは彼れの部下だつたからである。

ベゾブラゾフはまたこの思想をアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公にも說いた。で、この二人は彼れを陛下に紹介した。そして、假面をかぶつた私設會社をつくり、これをロシア政府の權力によつて物質的に支援指導し、漸次に朝鮮を占領する――といふ彼れの考へを極力支持したのである。

ウォロンツォフ・ダシコフ伯はその結果などを考へないで、ただ無意識にベゾブラゾフの思想に共鳴したのであらう。また太公は偉大な國家的進出に携はることによつて自分の名譽慾を滿足させようとしたのであらう。

ベゾブラゾフの計畫實行はいよいよ具體的に決定された。朝鮮における利權は獲得され、經濟調査といふ名目で、實はおもに戰略的な目的を有する調査班が派遣されることになつた。

その後、ベゾブラゾフが陛下の側近にあつて漸次勢力をえて來ると、彼れはウォロンツォフ・ダシコフ伯やアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公を遠ざけてしまつた。もつとも太公と伯の二人は、時が經つにしたがつてこの仕事が結局わざはひを招くことを知つて、むしろ好んで遠ざかつたのかも知れない。

獨舞臺になつたベゾブラゾフは、かくして思ひのまゝに活動を開始することになつたのである。

朝鮮政策と日本の不滿

この陰險な仕事はむろん日本人に全部知れわたつてしまつた。日本人はロシアは表面では朝鮮から手を引いたと見せ、裏へ廻つてやつぱり朝鮮を占領する野心があるのだ――と解した。日本人が極度に我々に反抗するやうになつたのは極めて自然の成行きと言はねばならぬ。遂には支那人と、これを支持する日本人ばかりでなく、イギリスやアメリカまでがロシア軍の滿洲撤退を要求する樣になつた。

ロシア軍隊が滿洲に侵入した時、我々は宣言書を發布した。そして『ロシアは團匪を鎭壓する力のない支那政府を援けるため軍隊を派遣したのである。支那の擾亂が鎭定すればロシア軍隊は直ちに滿洲から撤退するものである』――と公言した。

ところが團匪の亂は間もなく鎭定され、支那政府は北京へ歸つて政務を執るやうになつても、わが軍隊は依然として滿洲に居殘つてゐた。支那政府は百方手段を盡して、ロシア軍の滿洲撤退を要求した。しかし我々はいろいろな口實を作つて滿洲撤退をがえんじなかつた。かうなつては支那が、自己の利害からロシアの滿洲撤退を要求しつゝあつた日本その他の各國に接近するのは當然である。

關東州の占領と、次いでは團匪鎭壓のため支那の正當政府を援助するといふ口實で滿洲に軍隊を送

り、その後になつて撤退をしないといふこの二つの事實によつて、支那は全然ロシアを信用しなくなつてしまつた。日本の我々にたいする態度もまたこれと同じであつた。もし我々が八月十三日の日露協約を正直に遵守して、朝鮮で陰謀などをやらなかつたら、恐らく日本はもつと安心したに違ひないのである。したがつて我々にむかつて斷然たる決心も取らなかつたであらう。ところが我々は、一方では遼東半島から日本を退去させて自らこれを占領し、他方ではその代償として日本と協約を結びながら陰險な手段をもつてこれを破るやうなことをしたのである。日本が全然ロシアを信用しなくなつたのも、また當然すぎるほどの當然と言はねばならない。

ロシア軍の掠奪行爲

北京で掠奪が行はれた後のことである。北京占領の功によつてゲオルギー勳章を授けられたリネヴィチ將軍は、もとの沿海州軍團長の地位に復歸することになつた。その際、彼れは北京で掠奪した高價ないろいろの財寶を行李に入れて十個も持つて歸つたとのことである。また多くの部下も、將軍のこの行爲を眞似て民間や宮殿で掠めた財物を澤山もつて歸つた。

このことがもし私にあらかじめ判つてゐたら、稅關でその行李を全部開けさせて、彼れに侮辱を與へることが出來たのだが、殘念な事に私はこの行李持ち歸りの件を、事前に知らなかつたのである。

外務大臣ラムスドルフ伯は、北京駐在のロシア公使から、ニコライ二世戴冠式の際にロバノフ・ロストフスキー侯と李鴻章の間に締結されて批准された長い軍事協約の原文を受取つた。この協約はロシア軍隊が宮殿の掠奪をやつた時に押收したものであつた。支那皇帝と西太后は、自分の寢室の文庫にしまつておいたほどこの協約を重要視してゐたのである。恐らく北京が包圍されて西太后はじめ全皇族が狼狽して宮殿を棄てゝ北京から逃げ出した際、この協約書を持ち出す餘裕がなかつたのであらう。

ラムスドルフ伯がこの協約書を受けとつた時これをどう處置するかといふ問題が起つた。伯は早速私のところへ相談にきた。

私は彼れに言つた。

『我々は自からこの協約に違反するやうな行爲をした。しかし我々は全然この協約を放棄したのではない。我々が、まだ支那との親善を持續する希望をもつてゐるといふことを支那側に知らせるため、これは返してやる必要がある』

この協約書は直ちに支那に返還された。しかし支那はもはや、ロシアは信用できないといふ信念を飜へさうとはしなかつた。もつとも、協約書は返したが我々が依然として滿洲に頑張つてゐたからでもあらう。

第十四章　皇位繼承問題

胎内にある皇太子？

一八九九年七月に、皇太子ゲオルギー・アレクサンドロヴィチ（ニコライ二世の弟）が亡くなられ、ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公（ニコライ二世の次弟）が皇位繼承者として布告された。

私の考へでは、この布告は違法だと思つた。法律は、もし皇帝が死去されるまで皇子を持たなかつた場合には、皇位繼承の優先的權利をもつミハイル・アレクサンドロヴィチ太公がすぐに帝位に即くやうに明示してゐる。しかるにその時の皇太子擁立の布告は、この場合とは全く趣きを異にしてゐるのである。皇帝はすでに皇后をもつてゐるので、いつ皇子が生れるか判らないのである。現にその後四皇女の次ぎに今七歳になつてゐるアレクセイ・ニコラエヴィチ（一九〇五年生れ）が生れたのである。そしてミハイル・アレクサンドロヴィチ太公は皇太子の地位から普通の太公の地位に降されるやうなことになつたのである。

私が以前司法大臣をしてゐたニコライ・ワレリアノヴィチ・ムラヴィヨフから聽いたことであるが、曾て陛下がまだ皇子をもたないで四人の皇女だけしかゐなかつた時、陛下は、もし皇子が生れない場合には、第一皇女に帝位を繼承させることが出來るかどうかといふ問題を眞面目に考へたことがあつた。斷はつておくがこの問題は決して具體化したのではない。ただ内部で問題とされたに過ぎないのである。この問題に關係した者は、法相ムラヴィヨフとポベドノスツェフであつた。ポベドノスツェフはこの考へに全然反對した。彼れは、パウェル皇帝の制定した皇位繼承に關する現行法の發布以來皇位繼承權は確固不動のものになつてゐる。しかるに今かくの如き考へを起すことは、この法律を動搖させる原因になるといふ意見であつたさうである。

ニコライ帝の病氣

一九〇〇年に、私は大藏大臣の資格で、パリに開かれた萬國博覽會に參列した。私はパリから歸國すると、ペテルブルグを通過してすぐにクリミヤへ行つた。當時クリミヤには私のほかに外務大臣ラムスドルフ伯、陸軍大臣クロパトキン、ミハイル・ニコラエヴィチ太公なぞが來てゐた。宮内大臣フレデリックス男がゐたのは無論である。私はヤルタからリヴヂアの宮殿へ往く街道筋にあつた、遞信大臣の家に住んでゐた。

私がクリミヤに着くと間もなく陛下はインフルエンザに罹つたのであるが、例によつて充分な治療

をしなかつた。先帝も早期治療を怠たつて、ほんとうに治療しはじめた時はすでに手遲れになつてゐたため死期を早めたのであつた。この、病氣にたいする無關心さは、皇帝一家の特色のやうであつた。

陛下を眞面目に診斷したのは、軍醫大學教授ポポフであつた。それまで陛下を治療してゐたのは、外科醫の侍醫ギルシュで、彼れは曾ては醫學的智識があつたとしても恐らく皆んな忘れてしまつてゐるやうな老人であつた。私はこれを見兼ねて、ペテルブルグからポポフを呼び寄せたのである。ところがポポフ教授が診斷すると、陛下はチブスに罹つてゐることが判つた。

陛下のチブスは十一月一日に始まつて、二十八日に至つて漸やく危險の症狀が去り、漸次恢復に向つたのである。

皇弟ミハイル太公

陛下の病氣は私はじめ周圍の者を非常に驚ろかしたのであるが、この病氣の最中に次ぎのやうな事件が起つた。

或る日、陛下の病狀が非常に惡いと醫者から報告して來た時のことであつた。朝早く內務大臣シュピャギンから電話があつて、私にすぐ來てくれとのことであつた。

私が、彼れの住んでゐた「ホテル・ロシア」へ行つて見ると、シュピャギンは待ち兼ねてゐた。そこにはすでに外務大臣ラムスドルフ伯、宮內大臣フレデリックス男、ミハイル・ニコラエヴィチ太公などが來てゐた。私が到着すると間もなく、もし陛下に萬一の不幸があつた場合には何人を皇位繼承者とするか――といふ問題が提議された。

この問題の提議は私を非常に驚ろかした。で、私はすぐにこれに答へた。

『私の意見では、すでに一度陛下が皇弟ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公を皇位繼承者として布告した今日、この問題については一點疑惑をはさむ餘地がないではないか。もしまた、假りに陛下がこのことを布告しなかつたとしてもこの主張を變へる必要は少しもないのである。我々はただ皇位繼承に關する法律にもとづき、この法律の精神に正しくしたがつて、ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公を直ちに帝位に即かせればそれでよいのである』

他の人々は、この私の解答にたいして反駁でもなく、さればと言つて意見の表示でもないやうなことを言つた。といふのは、皇后が姙娠してゐて（恐らく宮內大臣は皇后の姙娠を知つてゐたのであらう）もし皇子が生れた時は、皇位繼承權がこの皇子にあるや否やといふことであつた。私はこれに對して言つた。

『皇位繼承に關する法律はかくの如き場合を豫想してはゐない。また豫想すべきものでもない。たとへ皇后が姙娠してゐても、その最後の結果は、どんな方法を講じても豫知されるものではない。

であるから、少なくとも法律的解釋にしたがつて、速やかにミハイル・アレクサンドロヴィチ太公が皇位に即くのが至當である。いやしくも獨立せる帝國を、場合によると數ケ月も待たなければならないやうな永い期間を、主權のない狀態におくことは全然出來ないことである。そんな非合法的狀態に國家を放置することはやがて大きな擾亂を起す原因である』

他の大臣たちは幾たびも法律書を開いたり讀んだりした後、私の意見を是認せざるを得なかつた。

すると老太公ミハイル・ニコラエヴィチは私に質問した。

『しかし、數ケ月たつて皇后が皇子を生むやうなことになつたら、その時はどうなるのか？』

私は答へた。

『この席で私が言ひ切ることが出來るのは、これに答へうる者は皇弟ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公のみである、といふ外はないのであります。もし不幸にして陛下が亡くなられ、このやうな問題が起つた場合、如何にこれを處置するかは次ぎの皇帝の資格あるミハイル・アレクサンドロヴィチ太公みづからが判斷するより外はないのであります。私は太公殿下が正しい高貴なお方であることをよく知つてゐます。もしさうするのが利益であり正しいと思はれたなら、太公はきつと皇子のために自から帝位を去られることを深く信ずるものであります』

結局、みんな私の意見に同意することになつた。そしてこの會議については非公式に皇后陛下に報告することになつた。

クロパトキンと皇后

この會議があつてから數日後のことである。クロパトキン將軍は陛下に執奏を濟ませた後（陛下は病中でも緊急事項に關しては上奏報告を受けてゐた）午餐をとるためリヴヂア宮殿からまつすぐに私の住んでゐた交通大臣の家へやつて來た。この家は宮殿とヤルタとの途中にあつたので、上奏報告をする大臣達は、宮中で午餐に居のこる時のほかは必らず歸りに立ち寄つて食事をとつたものである。クロパトキン將軍もこんな意味で立ち寄つたのである。彼れは午餐がすんで二人きりになると、私に問ふた。

『君達はシュピャギンの家で會議をしたさうだが、どんな問題を審議したのか話してくれ給へ』

私は彼れに答へた。

『シュピャギンから聽いたのだが、君もこの會議に招かれたのだらう？　君は、なにか非常に重大な問題が起つて出席できなかつたさうじやないか。僕は君が列席しなかつたのを甚はだ遺憾に思ふ』

『僕はどうしても行かれなかつたのだ』

彼れはさう言つたあとで、手をもつて自分の胸をたたいて、芝居がゝりに悲壯な態度を見せながら、

非常に大きな聲で言ひ放つた。

『僕は少なくとも皇后陛下に侮辱を與へる樣なことはしたくないのだ！』

私はクロパトキンが時々見世物小屋の役者のやうな眞似をすることをよく知つてゐた。で、別に彼れの態度に氣もとめないで言つた。

『アレクセエイ・ニコラエヴィチ！　君は、皇后に侮辱を與へないことを、君だけの特權のやうに思つてゐるのか？　だが、その權利は皆んながもつてゐるのだ。僕だつてそのうちの一人なのだよ』

幸ひにも陛下は間もなく健康を恢復したので、それ以上にこの問題を云々する者はなかつた。しかし私はヤルタを出發する際に、わざわざこの問題についてフレデリックス男を訪問した。そして我々が陛下の病中に皇位繼承問題で苦心したことと、またこの問題に關するあの樣な曖昧さを避けるため、もし陛下があらたな勅令を發布されるお考へがあるならば、その勅令は法律上決定的な形式を具備させなければ不可ないといふ私の意見を取次いでくれるように賴んでおいた。

その後ペテルブルグでポベドノスツェフ（宗務廳檢事總長）や司法大臣ムラヴィョフから聽いたところによると、彼等は皇位繼承問題に關する新らしい勅令の作成を命ぜられたさうである。恐らくそれは皇太子アレクサンドル・ニコラエヴィチの誕生によつて公布の必要もなくなり、またその法律的効力も自然に消滅したのであらう。私は、この問題についてはこれ以外に歴史的挿話を耳にしたことはなかつた。

皇后の私に對する不興

それから多くの年月を經過した一九一〇年のことである。私は、交際社會で有名なアレクサンドラ・ニコラエヴナ・ナルイシュキナ夫人をビアルリッツに訪ねたことがあつた。夫人は、アレクサンドル三世帝の侍從長ナルイシュキンの妻として人に知られてゐた。またナルイシュキンはアレクサンドル一世帝の私的同棲者であつたポーランド生れの美女ナルイシュキナ夫人の息子として世に知られてゐた。（このことは先年出版されたニコライ・ミハイロヴィチ太公の追想記に載せられてゐる）

私はナルイシュキンを親しく知つてゐた。彼れは尊敬すべき貴族であつた。たしか、八年前に可なりの高齡で世を去つた筈である。

私がナルイシュキナ夫人といろいろ語り合つてゐるうちに、ふと夫人は私に質問した。

『セルゲイ・ユリエヴィチ！　あなたは御存じかどうか知りませんが、皇后はあなたに敵意といふほどでないまでも、あまり好意をもつてゐませんね……』

私は答へた。

『さうですか？……。どうも判りかねますな。第一私は皇后に逢つたこ

とは殆んど稀れです。お話をしたことなどは恐らく今までに數へるほどしかないのですから』

ナルイシュキナ夫人はこれに答へて言つた。

『いつぞやヤルタで陛下が病氣になつたことがありますね。その時あなたは、陛下に萬一のことがあつた場合を豫想して、ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公が皇位に即くことを主張されたさうですね。皇后のあなたにたいする感情はそれから來てゐるのではありませんか？　私にはどうもさう思はれますよ』

私は言つた。

『さうでせう。いや、きつとさうです。しかし私は何もこれを强要した覺えはありませんよ。會議の席で、正直に私の意見を述べたまでです。それに列席の人達もみんな私の意見に贊成したことだし、そのうちにはニコライ一世の皇子ミハイル・ニコラエヴィチ太公もゐたのです。まさか陛下にたいする太公の忠誠を疑ふ人はありますまい。一たい私は自分の意見といふよりも現行法の正確な解釋を說明したに過ぎないのです』

その時私は始めてこの間の消息を了解することが出來た。フレデリックス男は正直で、善良な人物だつたが、智慧がなかつた。彼れは前後の思慮分別をしないで、なにか皇后に言つたのであらう。そのことがだんだん人々の間に傳はつて、遂には私がニコライ二世を嫌つてゐるなぞといふ卑說のやうな物語となつたのである。しかもこの卑說は私が職を退くと共にあらゆる機會に人々の口の端にのぼつた。善良ではあるが、病的な意思と心理をもつたニコライ二世帝やアレクサンドラ・フェオドロヴナ皇后は、おそらくこの卑說によつて私の皇帝にたいする關係や國家的仕事を解釋したことであらう。

皇族の戀愛事件

私は一九〇〇年から一九〇二年にわたつて、ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公に政治・經濟及び財政に關する講義をしたことがあつた。ヤルタで皇位繼承問題が起つたのは恰度この講義を始めてから數ヶ月後のことであつた。私の解釋方法や講義の仕方がよかつたのか、または他に何かの原因でもあつたのか、それは私には解らないが、とにかく太公は非常に熱心に私の講義を聽かれた。私は休憩の時間によくいろいろのことを太公と語り合つた。時には一緒に午餐をしたり、自動車で公園をドライヴすることなぞもあつた。私はかうしてゐる間に太公の人となりをよく知ることが出來た。

ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公は、才智や教養の點では兄に當るニコライ二世帝に劣つてゐたが、その性格はアレクサンドル三世帝そつくりであつた。私はその前にも私と非常によい關係にあつたウラヂミル・アレクサンドロヴィチ太公の請ひにより、王子アンドレイ・ウラヂミロヴィチ太公を教育しだことがあつた。

アンドレイ・ウラヂミロヴィチ太公は、一九〇二年頃からぐれだし、高貴の身分としては如何がはしい行ひをはじめた。その噂が交際社會にひろがると、人の噂をしなければ承知のできない一部の人達は、さかんにこの噂を擴めるやうになつた。

或る時、私は皇弟ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公とこの噂について話し合つたことがある。太公はアンドレイ・ウラヂミロヴィチ太公の親友であつた。私は彼れに言つた。

『近ごろ、アンドレイ・ウラヂミロヴィチ太公が惡戯を始めたさうですね。私はその終りが惡い結果にならねばよいがと心配してをります』

私はミハイル・アレクサンドロヴィチ太公がまたこんなことにならない樣に、あらかじめ警告する意味でこの話をしたのである。すると太公は私に答へた。

『セルゲイ・ユリエヴィチ！　僕にはほんとうに判らないよ。これは惡いことだ、やつてはならないことだ、と知りながらそれを犯す。どうしてそんなことが出來るだらうね……。僕は少なくも自分が惡いと意識したことなら、どんな力で强要されても動かないだけの自信がある』

ミハイル・アレクサンドロヴィチ太公は今は三十三歳になられた。最近太公がなにか戀愛に迷ひこんだといふやうな噂を聞くが、私はそれを信じたくない。若しまたそんなことがあつたとしても、それは太公の罪ではなく、二十九歳の若盛りの太公に妙齡の婦人を雇つて家庭教師にするやうな教育の仕方が惡かつたのである。

そればかりではない。數年前に太公は從妹にあたるマリア・アレクサンドロヴナ太公妃の王女、コブルスカヤに心を惹かれて結婚しようとまでした。ところが從妹であるからといふ理由で許可されなかつた。そして王女はスペインの皇族と結婚してしまつた。これは或は正しい決定であつたのかも知れない。しかし私はミハイル・アレクサンドロヴィチ太公にこの結婚が許されなかつたのを非常に殘念に思つた。

さらに遺憾なことは、この王座に近い太公達の結婚に關する主意そのものがその後になつて覆へされたことである。現に從妹の故をもつてミハイル・アレクサンドロヴィチ太公に結婚を許されなかつた王女の妹とリルル・ウラヂミロヴィチ太公との結婚は許可されてゐる。またもう一人の王女は皇后の弟にあたるダルムシュタット太公と結婚してゐるのである。さらに同じやうな例を擧げるなら、ニコライ・ニコラエヴィチ太公もまた兄弟のピョトル・ニコラエヴィチ太公の妃殿下の妹で、彼れの從妹にあたるレイフテンベルグ王家から出た王女と結婚してゐるではないか。

前にもいふ通り、私は一九〇〇年からミハイル・アレクサンドロウィチ太公に講義をはじめた。太公

は非常な好意をもつて私に親しんだ。もしかすると、この事情と、ヤルタで私が述べた皇位繼承問題に關する私の意見とを結びつけて、そこに何か卑しい不正な憶測が生じたのではなからうか？……。

私はミハイル・アレクサンドロウィチ太公を心から敬愛した。しかもそれはニコライ二世帝や皇后にたいする私の感情とは全たく比較することの出來ない別個のものである。

第十五章　文相ボゴレポフと內相シュピャギン暗殺事件

文部大臣暗殺事件

一九〇一年二月十四日、文部大臣ボゴレポフが暗殺された。この遭難は次ぎのやうな事情のもとに行はれた。

——或る面會時間のことである。彼れのところへ、曾てモスクワ大學の學生だつたカルポヴィチといふ男が訪ねてきた。ボゴレポフが出て行つて面會すると、その男はいきなりピストルで彼れの咽喉を擊つたのである。

この兇變はアナーキストの暗殺の手初めであつた。一九〇一年から一九〇五年にわたつて我々の經驗した遭難の先驅であつた。そしてまた、全ロシアが望んでゐたものを與へられないといふ理由からではなく、全然別な形式で我々が現在經驗しつゝある暗殺の先驅でもあつた。

結局、陛下はアレクサンドル・ブラゴスロウェンスキー帝以來忠良な人民が熱望してゐたものを一九〇五年十月十七日に與へたのである。

しかし現在の危機は今までのやうな原因から起つてゐるのではない。ストルイピンが、自分の個人

的な考へによつて一九〇五年の憲法を蹂躙したといふ譯ではなく、憲法を自分の政治道樂の方向に導いて、これを歪めようとするその道樂に起因してゐるのである。

ボゴレポフは極めて着實な正しい人物であつた。が、一面に極端な反動思想をもつてゐた。この彼れの反動思想が大學生を刺戟したものと思はれる。しかし私はボゴレポフのとつた行爲は合法的だと認めてゐる。一九〇一年に彼れの行つた統制法は或は反動的だつたかも知れない。しかし合法的で且つ正當なやり方だつたことは否まれない事實である。この時代の統制法を、現文部大臣カッソフの統制下にある狀態と比較してみると、十月十七日以後の思想をもつて行はれてゐる今日の學校監督法や放縱な統轄ぶりに一驚を喫する外ないのである。

しかしカッソフのやり方は、ストルイピンの放縱政策の生んだ副產物に過ぎないといふ實狀を認めたなら、こんなことに驚ろくのは野暮なことかも知れない。

ボゴレポフが負傷するとすぐに私は彼れのところへ驅けつけた。そこには尊敬すべき女性だつた彼れの妻と親友のズウェレフ（現上院議員）がゐた。ズウェレフは器量の小さな人物であつたが、惡人ではなかつた。一口にいへば、彼れは才幹も教養もない極端な保守主義者であつた。

私はベルリンから有名な外科醫ベルクマンを至急呼び寄せるように勸めた。彈丸はボゴレポフの頸を貫通してゐた。

ベルクマンは到着するとすぐにボゴレポフを診斷したあとで私のところへ來て、非常に私を安心させるやうな報告をした。不幸にしてベルクマンの豫想は的中しなかつた。彼れが歸國してから數日後の一九〇一年三月二日にボゴレポフは遂に死んだ。ボゴレポフの後任として文部大臣に任命されたのは前陸軍大臣ワンノフスキー大將であつた。彼れがその經歷上から保守主義者として有名だつたのとゴレムイキン時代に大學生騷擾の鎭壓に手腕を振つたことが、この任命の原因をなしたのであらう。

内務大臣暗殺事件

一九〇二年四月二日、貴族出身であつたドミトリイ・セルゲヴィチ・シュピャギンが暗殺された。彼れは大臣會議のあつた建物の應接室で暗殺されたのである。

大臣會議が召集されたので大臣達は次第に參集し始めた。シュピャギンも內務大臣としてこれに列席するためにやつて來た。應接室で副官の服裝をした將校が彼れに近づいて來て封書を渡さうとして手を差しのべた。シュピャギンはこの封書は誰れから來たのかと聞いた。——すると將校は答へた。

『モスクワのセルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公から來たのです』

シュピャギンは何氣なくその書狀を受けとらうとした。と、この將校は突然隱してゐたブロウニングを取りだして續けざまに數發射擊した。シュピャギンはそのまゝ床の上に倒れたがまだ意識はあつた。

傷ついた彼れは大臣會議のあつたマリンスキー宮殿の近くにあるマクシミリアン病院へ運ばれた。

ピストルの音がした時、大臣たちは急いで階段をおりて應接室へ馳せつけた。ワンノフスキーはいち早くこの將校を見て言つた。

『これはほんとうの將校じやない。將校の服を着てゐるだけだ。將校はこんな服の着方はしない。この男はたしかに軍人じやない』

私が馳けつけた時、この將校は隣室で服を脱がされてゐた。彼れは背の高い、紅い頭髪の男であつた。彼れはすぐに、ほんとうの將校ではなくアナーキストで元大學生のバルマショフといふ者であることを自白した。

私は終始シュピャギンのそばから離れなかつた。彼れは遭難後數時間で死亡した。私は心から彼れの死を悼んだ。

前にも私が述べた通り、シュピャギンは尊敬すべき人物であつた。彼れは身邊が危險であることを知つてゐたのである。ちようど彼れの死ぬ數日前に、私はシュピャギン夫妻と語り合つたことがある。その際、私は彼れに言つた。

『僕は君のやり方が、或場合あまり峻嚴すぎやしないかと思つてゐる。そんなやり方は實際において何の利益も齎らさないであらう。少なくとも社會のある階級層や平和的な人民を刺戟する恐れがあると思ふ』

すると彼れは私に答へた。

『さうだ。君のいふことはほんとうだ。しかし僕は斯うするよりほかに途がないのだ。上の方では僕のやり方でさへ、まだなま温いと言つてゐる位なんだから！……』

シュピャギンが暗殺されると、誰れを内務大臣に任命するかといふ問題が起つた。

權勢魔プレヴェ

シュピャギンの暗殺される數週間前に、私は有名な「市民（グラジダニン）」紙の主筆メシチェルスキー侯と晩餐を共にしたことがある。

シュピャギンはメシチェルスキーと親戚關係にあつた。曾て彼れは輕卒にも自分の情實から、メシチェルスキーを皇太子時代の陛下に紹介した。ところが陛下は皇帝の位に即いたその日からメシチェルスキーに非常に反感をもち、彼れの噂を聞くのさへ嫌ふやうになつた。メシチェルスキー侯は非常に阿諛のうまい人に取り込むことの上手な人物であつた。皇帝は、多分彼れが自分の心に喰ひこんでくるのを警戒したのであらう。

この晩餐會の時、食事が濟んだあとで、私とシュピャギンとメシチェルスキーの三人きりになつた。シュピャギンは現在の彼れの立場が非常に困難であることを話して、出來るなら陛下にお願ひして内務大臣を罷めたいとまで言つてゐた。そのあとで、もしさうなつたら後任者には誰れが適任であるかといふ問題が起つた時、プレヴェの名が出た。するとシュピャギンは言つた。

『プレヴェが任命される樣なことにでもなつたらそれこそ大きな不幸だ。自分は前にもプレヴェの反對者であつたが、内務大臣就任以來一しよに仕事をしてみて、彼れがどんなことをする人物だか益益よくわかつて來た。彼れが大臣にでもなつたら、恐らく自分の目的のためにばかり働らくことだらう。きつとロシアに大きな不幸をもたらすに極つてゐる』

メシチェルスキー侯は、その際シュピャギンの批評に全然同意を表してゐた。ところがシュピャギンが死ぬと彼れはすぐにプレヴェと會見した。そして、内務大臣の唯一の適任候補者はプレヴェであると、手紙で皇帝に推薦した。事實、シュピャギンが死んでから數日後に、プレヴェは内務大臣に任命されたのであつた。

プレヴェの内相任命

私は、シュピャギンを追想すると共に、陛下の性格をはつきりと説明する次ぎのやうな挿話を物語ることにしよう。

――内務大臣で請願委員會の議長を兼ねてゐたシュピャギンは平常から毎日簡單な自分の日記をつけてゐた。彼れが暗殺された時のことである。彼れの書齋へ一番さきにはいつたのは親友のペ・エヌ・ドゥルノヴォであつた。しかし彼れは書類には少しも手をふれなかつた。その後、陛下は宮殿警備司令官であつたゲッセ將軍とドゥルノヴォに、故シュピャギンの書類を整理するように命じた。この整理の際、省内關係の書類はそれぞれ公式關係者に渡され、個人的のもので公式の意味を含むものはゲッセに、全たく私的のものは故人の妻に渡すことになつた。

シュピャギン夫人は、生前夫が日記をつけてゐたことを知つてゐた。そしてまたその第一冊には請願委員會に關することが書かれてあつたこと、第二冊の日記には内務省關係のことが書かれてゐたことをよく知つてゐた。夫人はドゥルノヴォに故人の日記が何處にあるかを訊ねた。すると彼れは、ゲッセがみんな持ち去つた旨を答へた。以下記述することは、私がシュピャギン夫人及び彼女の姉聟シェレメチェフから聽いた話である。

シュピャギン夫人は夫の死後數日たつてから、兩陛下の故人にたいする配慮についてお禮のために參内した。その際、陛下は彼女に向つて『故人の日記が自分の手許にきてゐるが面白さうだから讀んでみたい。しばらくの間貸してくれまいか』――と言つた。夫人は無論これに同意した。

それから數ヶ月たつても日記は夫人の手へ戻つて來なかつた。夫人は義兄に當るシェレメチェフ伯を訪ねた。彼れは皇帝の子供の時分に學友をしたことがあるので、侍從を勤めてゐた。夫人は伯爵に向つて、當直の時に折りがあつたら故人の日記のことについて陛下に訊いてくれるように賴んだ。

それから暫らくして、シュピャギン夫人が皇后に謁見したことがあつた。夫人が御前を退出しようとすると、皇后は、皇帝が彼女に逢ひたいと言つてゐるから暫らく待つようにと言つた。まもなく皇帝は彼女の前に現はれた。そして包みを彼女に渡しながら言つた。

『故人の日記をどうも有難う。非常に面白く讀んだ』

家へ歸ると夫人は驚ろいてしまつた。といふのは、戻された包みの中には請願委員會に關することが書いてあつた日記が一冊しかなかつたからである。夫人は早速老伯爵シェレメチェフを訪ねて、どうしてこんな間違ひが起つたのか調べてくれるように賴んだ。

シェレメチェフ伯は、このことをゲッセにたづねた。すると彼れは非常にそつけなく答へた。

『シュピャギンの日記？……多分それは陛下がどうかしたのだらう……』

それから數日後、陛下はモスクワに行幸して懺悔式を行つた。そして大祭の第一日を彼地に送ることになつた。この際、宮中で大晩餐會があつた時のことである。シェレメチェフ伯の席は、ゲッセと列んでゐたが、彼れは一言も言葉を交はさなかつた。するとゲッセは彼れに言葉をかけた。

『君！　あのシュピャギンの日記のことだが、あれは實際のことをいへば、僕の手から全部陛下に渡したのだよ』

ペテルブルグへ歸つた後、陛下はシェレメチェフ伯を呼んで言つた。

『僕には、シュピャギンの日記が紛失した理由がよく判るよ。どうしてこんなことになつたか、君に判るかね？……』

シェレメチェフ伯はこれに答へて言つた。

『私はこの件についてドゥルノヴォに訊いてみました。だが、あの日記は全部ゲッセが處置したと申しました。何等この日記に利害をもたない彼れが僞はりをいふ筈はありません』

そして最後に、ゲッセ自身もたしかに二冊の日記を受け取つたことを否定してゐない旨を附け加へた。すると皇帝は言つた。

『ゲッセはシュピャギンと仲が惡かつたのだ。多分シュピャギンはその日記になにかゲッセの惡口でも書いたのだらう。で、ゲッセはそれを僕に見せまいとして、どうかしたのだらう』

それから暫らくたつて、シェレメチェフ伯は私に、あの日記は確かに皇帝自身がどうかしたのだ、と話したことがあつた。

私はシュピャギンの日記を讀んだことはなかつた。しかし夫人の話によると、彼れはこの日記に隨分

露骨なことを書いてゐたさうである。シュピャギンは正しい尊敬すべき人物であり、また堅く保守主義を持するほんとうの貴族であつた。彼れは自分の大臣生活の最後の半年間は、絶えず私に向つて皇帝が不信で陰險なことをあからさまに話しては歎息してゐた。彼れは、それについて自分の妻なぞには殆んど絶望的な口吻を洩らしてゐたさうである。

ワンノフスキーの辭職

プレヴェが大臣に任命されると、間もなくワンノフスキーは文部大臣の職を辭した。ワンノフスキーは極端な保守主義者であると共に骨の髓まで軍人堅氣が浸みこんでゐるやうな人物であつた。ところがプレヴェは到底彼れの容認しえないやうな要求をだした。しかも陛下がプレヴェを支持する傾きがあるのを見て、彼れは斷然文部大臣の職を退いたのである。

ワンノフスキーの後任として文部大臣に任命されたのは、曾てワルソウ大學の教授をしてゐたゼンゲルであつた。彼れは實社會を超越した清廉な人間であつた。プーシュキンの「エウゲニ・オネギン」を非常にうまくラテン語に飜譯しうるほど古典的な人間であつた。ゼンゲルは正しい心もちで文部大臣の職を執つたが、反動的でないため間もなく大臣を罷めるやうになつた。彼れの後任者は、陸軍大學の校長をしてゐたグラゾフ將軍であつた。

ゼンゲルは任期が短かつた關係上なんの仕事もなし得なかつたが、たゞ一つあまり感服しないことをした。といふのは、前にワルソウ大學の教授をしてゐた實驗醫科大學の校長ルキャノフを、ワルソウ當時の情實關係から文部次官に任命したことである。もつとも情實のほかに、オリデンブルグ公國王のさしがねも、この任命の一つの原因であつたかも知れない。

第十六章　プレヴェ暗殺まで

プレヴェとの關係

プレヴェは私にたいして極端な私憤を抱いてゐた。といふのは、私が二度も彼れの内務大臣就任を妨げたものと思ひこんで深くこれを根にもち、含むところがあつたからである。また、私と彼れとは國務（私は彼れが行はなかつたことだけは斷じて言はぬつもりである）に關する多くの問題についても相反するものがあつた。私の信念は、ロシア皇帝は國民を基礎として繁榮すべきものだと言ふにあつたが、プレヴェは、皇帝は貴族の上に立脚せざるべからずといふ意見であつた。

私は殆んど十年あまりも國家經濟の仕事にたづさはり、その間に國家の財政狀態を非常に輝やかしいものにした。しかし、國民經濟のためにした仕事は甚はだ少なかつた。なぜならば、官界ではこの仕事について實際的（たゞ言葉の上ばかりではなくて）に共鳴して、これを迎へてくれる者がなかつたばかりでなく、寧ろ反對行動に出る者が多かつたからであつた。その中で最も重要な役割を演じたのが、いつもプレヴェであつた。

パリコフ農民騒動

プレヴェが内務大臣に就任した際はすでに農民運動が起りはじめた時で、農民は各地に一揆を起し、土地を與へよと要求してゐた。當時パリコフ縣知事であつたオボレンスキー侯は、農民が騒擾を起したあとで、彼等にたいし大々的壓迫を加へた。彼れはみづから各農村を巡視して、自分の眼の前で農民の檢擧を行はせたものである。

プレヴェが内務大臣に就任すると、彼れはすぐにパリコフへ行つた。そして自からオボレンスキーの行爲を激勵した。オボレンスキーはこの勇敢な行爲によつて、その後フィンランド總督に榮轉し、軍事參議官に列せられたのである。

コーカサス統治の失敗

私はコーカサス政策についてもプレヴェと意見を異にした。コーカサスの統治方針はウォロンツォフ侯に始まつてゴリツィンに至るまで終始一貫してゐた。最初にはコーカサスの壓伏、次いでロシアの國家統治形式を漸次に彼地に及ぼしこれによつて彼地を完全にロシア化する――といふのがその目的であつた。

ロシア帝國内に擾亂を誘致しつゝあつた解放運動はすぐにコーカサスにも反映した。コーカサスに住んでゐたロシア人、彼地に潜入したロシア人、それからロシア内地の學校で教育をうけて歸つた土地の青年なぞは、擾亂によつてコーカサス解放運動に衝動を與へた。この擾亂を間接に誘發したのは彼地で盛んに行はれた收賄であつた。つまり――官吏の腐敗であつた。

相當に才幹もあり尊敬すべき人物でもあつたが、意志の弱かつたコーカサス總督シェレメチェフが死ぬと、皇帝はその後任にゴリツィン侯を任命した。彼れは清廉で善良な素質はもつてゐたが、頭の組織が滅茶々々であつた。自分の發案であつたか、または當時の流行語にしたがつたのかそれは判らないが兎にかくゴリツィンはコーカサスのロシア化といふプログラムを携へて彼地に赴任した。しかし、このプログラムの實施といふ段になると、彼れ一流の無茶苦茶でこれを實行した。

プレヴェがまだ内務大臣に就任しない前には、度々不結果に終つたことはあるが、とにかく各大臣達はゴリツィンを支持してゐた。そこへ、プレヴェが内務大臣として出現した。彼れは皇帝がゴリツィンに好意をもつてゐることをすぐに嗅ぎつけた。そして早速ゴリツィンの支持者となつた。

一方で壓迫すれば、他方に反撥するのが自然の理法である。擾亂は漸次に擴大して忽まち全コーカサスを風靡してしまつた。多くの人たち（これは少し誇張した言葉ではあるが）はコーカサスを新らたに征服する必要があると言ひ出した位であつた。

だが、それよりも先きにロシアを征服する必要はなかつたらうか？……。さうすればコーカサスの征服も、賢明な邊境統治もそんなに困難ではなかつたであらう。

然り、まづロシアを征服すべきであつた。だがそれは、「忠義與」をしてゐる人達の遣るやうな壓迫といふ意味ではない……。

アルメニア統治問題

ゴリツィン侯は、コーカサスに住まつてゐたあらゆる異民族に對抗する手段をとつた。彼れはあらゆる異民族を壓服しようとした。したがつてアルメニア人に最も激しい敵意を示すことになつたのは自然の成行きであつた。

この事件の起る以前に、トルコ政府は革命思想をいだく數千のトルコ・アルメニア人を國外に追放した。これ等の人々は全部コーカサスへ移住してきた。彼等が經驗ある革命家として、ロシアに歸化してゐた宗教を同じくする同族を絶えず煽動したのは無論のことであつた。ゴリツィン侯は、アルメニア人を壓迫する手段として、アルメニア人教會の財産を差押へることを思ひついた。といふのは、教會はアルメニア人の間に非常な勢力があり彼等の心臓ともいふべきものであつて、彼等の慈善事業も國民的文化もみなこの教會を中心として行はれてゐたからである。

ゴリツィンの報告に基づいて、この問題を決定するため、委員會が組織された。この委員會の議長にエ・ウェ・フリシャが任命され、委員はポベドノスツェフ、外務大臣ラムスドルフ伯、司法大臣ムラヴィョフ、シュビャギン、ゴリツィン、それから私などであつた。私は政策上からいつても、道德的に見ても許すことの出來ないこの企圖にたいし斷乎として反對した。

政策上からいへば、この方法は全アルメニア人やロシア人を憤慨させる虞れがあるばかりか外國人までも我々の敵にすることになる。また、道德的見地からみれば、アルメニア人は我々と同じキリスト教徒でしかも彼等の教會は我々の信仰する正教にもつとも近いものである――といふのが私の反對意見の主眼であつた。

ポベドノスツェフは、はじめゴリツィンの提議に政策的見地から賛成してゐたが、私がこの企圖に盛られた宗教的見地よりする欺瞞を指摘すると、忽ち私の意見に同意してしまつた。この會議はゴリツィン侯を除き、全會一致でこの企圖に反對の意を表明した。そしてこの提案は裁決なしに皇帝の手元に殘されることになつた。

プレヴェが内務大臣に就任後はじめて、ゴリツィン侯はペテルブルグへやつて來た。するとまたこの提案が問題化することになつた。彼れは今度はこの提案を大臣會議へ提出した。その際プレヴェは、彼れの支持者となつた。

陛下は、小さな問題を裁決するにも常になにか特別の方針をもつてゐたやうであつた。であるから大臣會議でも、參議院會議でも、多くの議員達はつとめて沈默を守り、ただ確然とした裁決を受けることの出來ない理由や裁決の遲延する原因をたづねて、ポベドノスツェフのいはゆる「砂遊び」をしながら、暗中模索するばかりであつた。こんな狀態だつたので、會議の席上で主として發言するのは私とプレヴェだけであつた。そしてプレヴェは私に、私はプレヴェに、常に激烈な反對をするのであつた。すべての會議員は三人をのぞいて全部私を支持した。その中には曾てコーカサス總督をしたミハイル・ニコラエヴィチ太公もゐた。かういふ風でこの提案を支持する者は僅かにプレヴェ、ゴリツィン及び文部大臣ゼンゲルの三人だけであつた。ゼンゲルがプレヴェを支持したのは、多分思ひ違ひでもしてゐたのだらう。彼れは廉直な人物であつたが、意志が弱かつた。なにしろ古典學者の中でも特別に古典的（クラシカル）な詩人であつたのだから……。

ミハイル・ニコラエヴィチ太公は陛下に向つて多數の意見によつて裁決することを懇請した。ところが陛下は反對に少數の意見を確認してしまつた。かくてこの企圖はいよいよ實行される事になつた。

この計畫の實行は、全アルメニア人を非常に困惑させた。彼等の中から激越な革命的進出が始まつた。官憲とアルメニア人との鬪爭は次いでアルメニア人と回教徒の鬪爭に變つて行つた。多くの人々は官憲が回教徒を使嗾したのだと言つてゐた。

その後、ゴリツィンは危く暗殺されやうとした。すると彼れはペテルブルグへ歸つて來て、再びコーカサスへは歸らなかつた。事態はますます惡化して、コーカサスにゐる善良な全住民は自己防衛のために悉く武裝しなければならないやうになつた。むろん一般ロシア人民も軍人もさうであつた。

曾てミハイル・ニコラエヴィチ太公の總督時代に、グルヂン隊の聯隊長を勤めたことのあるゴリツィンは、軍人でありながら何ら軍事上の配慮をしなかつた。

ゴリツィンの後任として、今日まで總督の地位にあるウォロンツォフ・ダシコフ伯が任命された。彼れは土地の人民を壓迫することを禁止して、曾てコーカサスの統治で令名を走せたウォロンツォフ侯やバリャチンスキー侯のやつたやうな、よい傳統的政策を實行した。彼れの提議によつてアルメニア教會の財産差押へは取り止めとなつた。しかし實際においてはなんの効果もなかつた。といふのは、教會の財産の多くはすでに掠奪されたあとだつたからである。コーカサスの人民は彼れを尊敬し、彼れに好意をよせるやうになつた。しかし、ロシア本國でさへ擾亂の絶間がない當時、コーカサスにおける擾亂の根を絶つことは到底むづかしいことであつた。ロシア帝國轉覆の陰謀はしばしば繰り返された。賢明な政策の實施もすでに時機が遲かつたのである。

私はシェレメチェフの後任としてゴリツィンがコーカサス總督に任命されやうとした時、極力ウォロンツォフ・ダシコフを推薦した一人である。もし當時、彼れが任命されてゐたならば、ゴリツィンのやうな無茶なことも實行しなかつたらうし、いまでもコーカサスの狀態はもつと平穩であつたらうと思ふ。

ウォロンツォフ伯は聰明ではないが、信賴するに足る手腕をもつた正しい人物であつた。ただ彼れの大きな缺點は、人物の選定を爲しえなかつたことである。そこで「忠誠なロシア人」をもつて自任してゐる人々や、保守派の新聞紙なぞが彼れの交迭を云々したことは無論である。

私とユダヤ人問題

私はユダヤ人問題についてもプレヴェと意見を異にしてゐた。

私が大臣に就任した最初のころのことである。アレクサンドル三世帝が私に問ふたことがあつた。

『君はユダヤ人を支持してゐるさうだが、それはほんとうかね？』

私は皇帝にたいして、これに即答することはちよつと困難であるから、まづ陛下に質問することを許して頂けまいかと問ふた。すると皇帝はこれを許した。で、私は言つた。

『陛下はロシアにゐる全ユダヤ人を黑海へ投げ込んでしまふことが出來ますか？　もしそれが出來ると言はれるなら、先きの陛下の質問に對し、どんな答へをしたらよいかを私はよく知つてをります。またそれが出來ないと言はれるなら、ユダヤ人問題にたいする解答はただ一つよりありませぬ。それは、ユダヤ人のために設けられてゐる差別的法律を漸次に撤廢して、彼等に生活の可能を與へ

ることです。陛下の他の臣民たちと同一の權利を彼等にも與へるよりほかには、ユダヤ人問題解決の途はありませぬ』

皇帝はこれに對してなんとも答へなかつた。しかし皇帝の私に對する好意は終始かはることがなく死ぬまで私を信任してくれた。思へば先帝の死は、ロシアのために大きな不幸の日であつた……。

私がアレクサンドル三世帝に言つたことは、ユダヤ人問題に關する私の信念であつた。だから大藏大臣に就任してからも、いやしくもユダヤ人を壓迫するやうなすべての新らしい企圖に對しては、私はいつも反對したのである。私の微力では、この非常に不公平なユダヤ人に對するすべての現行法を改正することは到底できなかつた。しかし私は主義として、これ等の法律はロシア人のためにもロシアのためにも甚だ有害なものであることを認めないわけに行かなかつた。といふのは、私は常にこの問題を、ユダヤ人の思惑がどうかうといふ見地からでなく、我々ロシア人とロシア帝國のために如何にこれを解決するのが有利であるか、といふ點から觀察してゐたからである。

ユダヤ人の權利を制限するすべての現行法は、最近十年間に、正當な立法的手續を經ないで、多くは大臣會議の決議による臨時法令として發布されてゐた。であるから、これ等の法律は常に『將來ユダヤ人に關するすべての法律は、あらためて一括して審議改正される筈である。これは暫定的のものだ』――と言つた風な欺瞞的形式のもとに適用されてゐた。しかもこの意味はいつでも廣義にのみ解釋されて、決してこれを正當に解釋する者はなかつた。また立法者たちは、爲政者として公然この問題を提案する勇氣をもつてゐなかつた。彼等は老人の寄り合ひである。これを現代的にいへば官僚の寄り集まりである。參議院などにこの問題を提出すれば、多くの者の反對に逢ふか、いはゆる砂遊びのおもちやになるのである。少なくとも新らしくユダヤ人の解放を實施しようとする大臣にとつて、至つて不愉快な「忠義」のお談義を聽かされるのが落ちであることをよく承知してゐた。であるから今日まで發布されたユダヤ人に對する法律で參議院に附議されたものは一つもなかつた。これ等の法律はことごとく大臣會議で決定されたものか、もし大臣會議で反對される虞れのあつたものは特別委員會の決定したもので、ただ單に上奏裁可を得たものばかりであつた。

最もひどい反ユダヤ人主義者は、セルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公であつた。彼れは極端な保守主義者で、また非常に偏狹な人物であつた。そのかはりに正直一徹で勇氣があつた。彼れはモスクワ總督をしてゐた。しかし自から統治してゐたのではない。その統治は、太公に迎合し太公に取り入つたのち、しつかり彼れを手の中に掌握してゐた部下が實行してゐたのである。彼れの統治の晩年に、その部下のうちで最もよくこの役目を演じたのは、有名な警視總監トレポフ將軍であつた。將軍は自分の政策によつてモスクワを革命狀態に導びいた人物である。彼れのお蔭で、ロシアの心臟であり

シアの國家統治の城壁であるモスクワは、ロシア革命の中心になつてしまつた。

曾て十月十七日以後のモスクワ總督で勇氣と正直一徹で鳴らした有名なドゥバソフ提督は、私が大臣をしてゐた時分、水兵の反亂があつたあとで度々次のやうなことを言つてゐた。

『セルゲイ太公とトレポフは、全モスクワを革命化してしまつた。今日の狀態に導びいたのはみんな彼等の仕業である』

太公がモスクワでユダヤ人に對してとつた政策は、參議院を通らないどころではなく、大臣會議さへ通過できないやうな極端なものばかりであつた。その中で若干のものは辛ふじて特別委員會を通過したものもあるが、その他の法律は全部內務大臣が直接上奏勅裁をえたものばかりであつた。といふのは、內務大臣は、太公に決定を要求されたこれ等の法律が到底大臣會議を通過する見込みはないと思つたからである。

もしアレクサンドル二世帝以後に、差別的法律を漸次に撤廢するといふ彼れの統治精神に基づいた政策が持續されてゐたならば、ユダヤ人問題はおそらく今日ロシアが經驗してゐるやうな狀態にはならなかつたであらう。ユダヤ人自身もまた呪ふべきわが革命の惡分子の一つにはならなかつたであらう。そしてまたユダヤ人問題の實際狀態も、ユダヤ人を多く抱擁してゐない他の國のやうになつたことであらう。しかしながらこの問題を根本的に解決するには十年・百年の歲月を必要とするであらう。

なぜならば、彼等の特性は漸次に徐々と同化するより外ないからである。

アレクサンドル二世帝の歿後は、漸次に差別法を撤廢するといふ對ユダヤ人政策のかはりに、反對に極端なユダヤ人壓迫法の制定が始まつた。しかもこれ等の反ユダヤ人法律は、何れも、どうにでも解釋のつくやうな頗る不明確なものであつたから、勝手氣儘な解釋をする者が續出した。その結果、これが各種の收賄の原因となつたのである。官吏といふ官吏は何れも出來るだけユダヤ人を利用し、爲しうる限りの收賄をした。或る地方では、ユダヤ人にたいし收賄的課稅の特別制度を作つたほどであつた。このやうな狀態は必然的に、反ユダヤ主義の壓迫をうける者は貧困階級のユダヤ人ばかりといふ結果を招致した。といふのは、ユダヤ人は金持ちであればあるほど自由に贈賄が出來たからである。大きなユダヤ人富豪などは、いさゝかも壓迫の痛痒を感じないばかりか、時としては反對に、地方上級官吏の間に勢力を振つて指導者のやうな立場にあることもあつた。八十年代の初めに、參議院はこのユダヤ人に對する壓迫と勝手な法律の解釋を禁止するため反對をしたことがあつた。すると內務省側は、行政權に干涉するものだと言つて、これ等の反對者にあらゆる讒謗を浴びせ、反對議員の或る者は受持部門を交迭され、もつとも頑强な反對者は議員を免じてしまひ、そのかはりに從順な新議員を任命した。で、結局參議院は反ユダヤ人法にたいし、どう考へても法理的だとは思へないやうな解釋を與へることになつた。このことは、ユダヤ人大衆——特にユダヤ人青年の極端な革命行爲を

助成する結果となつた。ロシアの諸學校もまたこれに力を藉した。

三十年前までは頗ぶる臆病であつたユダヤ人は、革命のために自己を犧牲とし、爆彈・暗殺・掠奪とあらゆる狂暴をほしいまゝにする人種に變つてしまつた。むろん、全ユダヤ人が革命家になるのは前途遼遠なことであらう。しかしながらロシア國内にある民族のうちで、革命家を出した割合をとるならば、おそらくユダヤ人の右に出る者の無いことだけは事實である。

ユダヤ人の多數は過激政黨に加擔した。自分の困難な運命を絶滅してくれる解放運動を期待しつゝ高等學府を出たユダヤ人の知識階級は悉とく平等權を約束する「自由の政黨」に走つた。この政黨はユダヤ人社會に根づよい勢力を張つた。一般ユダヤ人はまた自分の智力と資力とをもつてこの政黨をはぐゝみ育てた。

私は、ロシアや外國にゐるユダヤ人指導者に度々警告した。

『君たちは非常に危險で不正當な途を選んでゐる。これがために、ロシアにおけるユダヤ人問題をますます尖鋭化する虞れがある。君たちは正當な方法によつて運命の打開をはからなければならない。君たちはまづ忠誠なる臣民としての模範を示さなければならない。君たちはロシア皇帝の手によつてのみ運命の打開をはかることが出來るのである。君たちのスローガンは「あらゆる平等權を與へよ」と叫ぶのではなく、ただ「我々は我々のために差別的待遇をしないことを望む」——といふのでなければならぬ』

かういふ警告をしたけれども、炎々と燃えさかる自由と革命の雰圍氣のうちに「自由の政黨」——立憲民主黨の政綱に信頼してゐた彼等は、私の忠告に一顧の注意も拂はなかつた。私が賢明にして正しい方法を彼等に提言したとき、彼等はすでに平等權獲得の競技場の門前に佇んでゐたのである。

前述のやうな反ユダヤ人主義はむろん結果において非常に強い反動をよび起した。ユダヤ人に同情する者や彼等にたいして中立的態度を持してゐた者までを甚だしく激化させた。ロシアにおいて現在のやうにユダヤ人の敵を作つたことは未だ曾て一度もなかつた。また今日の如くユダヤ人問題を彼等に不利益な狀態においたことは一度もなかつたのである。この樣な狀態はユダヤ人のために不利益であるばかりでなく、ロシアのためにも決して利益ではないのである。私は、このユダヤ人問題が、惡意のない正しい人道的な解決をされない間は、ロシアが窮極まで平穩に治まらないことを確信してゐる。それと共に、一時にユダヤ人に平等權を與へることは、再び新らしい多くの擾亂をひき起して事態を尖鋭化することを私は危懼する者である。

或る程度まで特種の風習からくる永い間の歷史的因襲に反する、少なくとも好意をもたぬすべての政策はよくない。ただ漸次に解決するほか途はないのである。あらゆる性急で過激な解決法は、事物

の平衡を破る原因である。人爲的であらうとも微温的であらうとも、一時的平衡を保持させる方がいゝのである。國家は生きた機關である。であるから極端な政策を實施することは大いに愼まねばならない。

一八八二年における反ユダヤ人法の制定者イグナチェフやドゥルノヴォなどのユダヤ人問題に對する愚劣な政策は、國家的見地からみて大きな害毒を殘した。アレクサンドル三世時代の內務大臣トルストイ伯は極端な保守主義者であつたが、賢明なる彼れはかくの如き過失を犯さなかつた。彼れはイグナチェフのやつた過失を完全に矯正することは出來なかつたが、彼れの時代にはユダヤ人問題は終熄してゐたのである。彼れの歿後ドゥルノヴォは、金錢的の意味からでなく個人的に若干のユダヤ人富豪と親しかつた。それにも拘はらずふたゝび前のイグナチェフの方針を踏襲した。彼れは、先きの見えない單なる追從家に過ぎなかつた。君側をめぐる一派の人達がさういふ方針をもつてゐたので、彼れはただそれに迎合したのみである。

しかしながら、イグナチェフ內相の時代でも、ドゥルノヴォ內相の時代でも、反ユダヤ人計畫を作つたり行政的方針を樹てたりした眞の中心人物はプレヴェであつた。ユダヤ人問題に關するプレヴェについてのいろいろな物語によつても明かなやうに、彼れは自身としては何らユダヤ人に反對する理由をもつてゐなかつた。彼れは反ユダヤ人政策が正しくないことを理解するだけの才智は充分にもつてゐた。

しかし、この政策がセルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公や陛下の意志にかなつてゐることを見てとると、全力をあげてこれに迎合したのである。

ユダヤ人問題は常に虐殺を伴つた。特にそれがひどかつたのは、イグナチェフの時代であつた。イグナチェフにかはつて內務大臣になつたトルストイ伯は直ちにこれを禁止した。その後プレヴェが內務大臣に就任した。彼れは日露戰爭當時大衆の間に起つた革命思想の心理的根源を絕つ方法を探索しはじめた。そして探し當てたのがユダヤ人の虐殺であつた。であるから彼れの時代には、いたる所にこの虐殺が流行したものである、そのうちで最も殘忍野蠻な虐殺を行つたのがキシネフ事件であつた。

ニコライ二世帝の侍從武官といふ職にあつたムウシン・プウシュキン伯は、キシネフ事件の當時は、オデッサ軍管區の軍團長をしてゐた。彼れはこの虐殺の直後すぐに軍隊の行動を調査するためにキシネフへ行つた。彼れが私に話した所によると、抵抗力のないユダヤ人にたいして行はれた虐殺の原因は軍隊がそれを傍觀してゐたためである。軍隊が傍觀してゐたのは、かういふ場合法律が要求してゐる行政長官からの命令を受けなかつたからである、――と言つてゐた。彼れはまた、この殘酷な虐殺をひどく非難してゐた。そして、このやうな事件は軍隊にすこぶる惡影響を與へるであらう――と言つてゐた。プウシュキンはユダヤ人びいきであつたが、正しい人物であつた。

プレヴェの默認によつて行はれたキシネフにおけるユダヤ人虐殺は、全ユダヤ人を驅つて狂氣の如く

憤慨させ、徹底的に革命の渦中に投じさせてしまつた。

この事件は實に戰慄すべき出來ごとであつた。しかし、更に更におそるべきものは愚劣なる政策そのものである。

私はプレヴェが直接この事件をひき起させたとは斷言しない。しかし、彼れがこの反革命的反動行爲に反對でなかつただけは確かである。

キシネフにユダヤ人虐殺が行はれたあとで、あらゆる世界の文化團體の輿論は、ロシアにたいして轟々たる非難の聲を擧げた。プレヴェはユダヤ人の指導者とパリで會見することになつた。その際彼れは次ぎのやうなことを言つた。

『君たちがまづ革命運動をやめ給へ。さうすれば僕もこの虐殺をやめさせよう。またユダヤ人に對する壓迫手段も改めることにしよう』

ユダヤ人代表者達はこれに對して答へた。

『我々はこれに對して全く無力である。彼ら革命家の大部分は飢餓のため狂暴になつた青年ばかりである。我々はどうして彼等を手中に掌握することが出來よう。しかし、もしあなた方がまづユダヤ人壓迫手段を緩和し始めれば、彼等はきつと穩やかになることを我々は確信してゐる』

ところがプレヴェは、これとは全く反對なことをやり出した。彼れは自分が暗殺される前に、ロシア西部地方の各地においてユダヤ人の居住地制限令を布告した。

私とプレヴェとは、その他多くの問題についても意見の確執を來たしてゐた。であるから彼れは機會あるごとに、陛下に向つて私のことを中傷した。彼れの死後、その記錄書類の中から、恰かも私が神聖な皇帝の生命をねらふ革命家である樣なことを書いた文書が發見されたのを見ても、いかに彼れが私に對して敵意をもつてゐたか判るであらう。

プレヴェは私がロシアを革命に導びくやうな彼れの政策に同意しないことを、よく知つてゐた。また彼れは、極力內務大臣の地位を固守しようとしてゐた。これがために、あらゆる手段を弄して私を除かうと決心したのである。彼れのこの決心は、日露戰爭を誘致しつゝあつたベゾブラゾフ一派の使嗾によつて、ますます强くなつた。私が危險な冒險家の前に降服しないで早晩その職を去るだらうといふ確信をえたからである。

ズバートフ主義

內務大臣プレヴェは滔々と瀰漫する革命思想の抑壓に苦心した。しかし、彼れは、才幹と敎養をもつ一個の破廉恥な警察官に過ぎなかつた。であるから大擾亂鎭壓のために彼れの考案した對策といへば力と狡猾に立脚する警察的方法以外の何物でもなかつた。彼れは勞働運動を抑止するため、いはゆる

ズバトフ組合なるものの組織に努力した。

註・ズバトフは官製勞働組合の組織を發案したモスクワの警察部長の名である。（監修者）

彼れはこんな警察的方法によつて一般社會や學校における騷擾を除くことが出來ると考へてゐたのである。そのくせ彼れは自己の在任中を通じて、警官の垣を圍らさなければ一歩も外出しえなかつたのである。彼れが馬車に乘つて外出する時は、必らず自轉車に乘つた多數の刑事が馬車の周圍を護衛してゐたものである。しかもこの警戒ぶりは、かへつて一般の注意をひき、彼れの外出を衆人に廣告するやうなまづい手段であることに氣がつかなかつたのである。

ポーランド出身であつたプレヴェは、青年時代に自分の姓名を變へてしまつた。そして常に平然と背教者になることが出來えたのである。彼れは正教を奉じないすべての者に對し特別の敵愾心を表明した。だがそれは、彼れが惡魔よりも神を多く信仰してゐたからだとは、私には思へない。おそらくモスクワ總督セルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公に自分の信仰ぶりを見せつけるために、さうした態度をとつたのではあるまいか。その證據には內務大臣に就任すると、彼れはいち早くモスクワへ行つてセルゲイ・トロイツキー大寺院に參詣したのを見てもわかる。

「ズバトフ組合」の思想といふのは、滑稽なくらい單純なものである。一般勞働者は漸次に革命黨の中に投じつゝある。換言すれば、社會主義者やアナキストの組織中に移りつゝある。それといふのは革命家が彼等を支持するからである。勞働者に彼等の幸福を約束するやうな教義を吹き込むからである。ではこれに對抗するにはどうすればよいか？　それは極めて簡單である。彼等革命家のやる樣なことをこつちでもやればよい。つまり――官製勞働組合を作るのである。そして集會や講義やその他の手段によつて彼等の利益擁護を實行するのである。いや實行するよりもただ勞働者の利益擁護を絕叫すればそれでよいのである。革命家は現代の社會組織に反對してゐる。しかし資本主義に反對して勞働者を煽動することなどはたいした問題ではない。資本主義や生產工業が現代社會組織の基礎であらうとなからうと、そんなことは我々の關知したことではない。我々には安穩が必要なのだ。國內の治安を維持する國家警察制度を守ればよいのである。――といふのがズバトフ一派の單純な考へであつた。

ズバトフやトレポフ一派のうちには無政府主義・社會主義とは畢竟何であるか――といふやうなことを理解できる者が一人もなかつたのは勿論である。したがつて彼等はこんな方法によつて全く正反對の矛盾した目的が達せられると思つたのである。

事實、セルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公やトレポフの信任を博してゐたズバトフの思想は、かくしてモスクワに大きなセンセーションをひき起した。工場監督官は擧つてこれに反對した。私は監督

官を支持した。しかし實際にこの思想の實現を阻止することは出來なかつた。太公はなんの憚るところもなく思ふ存分のことをやつた。卑屈な屬吏根性の內務大臣ゴレムイキンが、太公に阿諛追從したのは無論のことであつた。

シュピャギンが內務大臣に就任すると、彼れはこの「ズバトフ組合」に反對した。が、結局「ズバトフ組合」はモスクワだけに實施されることになつた。シュピャギンが暗殺されるとそのあと釜にプレヴェが任命された。內務大臣就任後はじめて彼れに逢つたとき、私はこの組合の危險なことについて、彼れの注意を促がした。すると彼れは『モスクワへ行つて太公に逢つた上でなんとか決めよう。君のいふ通りズバトフの思想は愚劣で有害な試みである』——と言つてゐた。

ズバトフ主義の危險

ところが、ズバトフは突如、警保局の首腦者となつて現はれた。そして自分の手で自由に操縱の出來る保安部を組織した。かくて警保局の機密は全部彼れの掌中に握られることになつた。如何にプレヴェがズバトフを重用してゐたかは、次の一事でもわからう。

私が大藏大臣をやめる三ケ月ほど前のことである。なにかの折に、私はプレヴェに向つて訊いたことがあつた。

『君はこの夏仕事をしなければなるまい』

すると彼は答へた。

『いや、暫らく田舍へでも行つて休養しようと思つてゐる』

私は彼れに言つた。

『ロプウヒンが何かの用事で外國へ行くさうじやないか。君はそんな呑氣なことをしては居られまいと思ふが……』

すると、彼れは答へた。

『いや、現在保安警察の事務は一切ズバトフが一人でやつてゐるのだ。彼れに任せておけば安心なものだ』

ズバトフは私が彼れの勞働組合政策に反對してゐることをよく知つてゐた。で、一度も私を訪ねて來たことはない。したがつて私は一遍も彼れと逢つたことはなかつた。

ところが、丁度私が大藏大臣をやめる半歲ほど前の一九〇三年七月初旬のことである。彼れは突然私を訪ねて來た。私が面會してみると、彼れは密偵からえたロシアの現狀を詳はしく報告するのであつた。

『現在全ロシアは暴風の中にあるやうなものです。今となつては警察力で革命を抑止することは到

底不可能です。また、プレヴェの政策は革命をますます内攻させるばかりで、結局大きな危機を作つてゐる様なものです』

そして彼れは最後に云つた。

『私はこれまで數回プレヴェの生命を救つてゐます。しかし結局あの人は暗殺されるでせう』

彼れの詳はしい告を報聽いたあとで、私は彼れに言つた。

『君は何故それを僕に報告したのだ。プレヴェに報告するのが君の役目じやないか』

すると彼れは答へた。

『プレヴェは自分の方針を堅く保持して動きません。あの人は、恐らくその政策を改めないでせう。いや、改めることが出來ないのです』

私は結論として言つた。

『僕は近いうちにプレヴェの所へゆく必要があるから、その時に君がいま僕に話したことをよく傳へておかう。しかし、君のため惡い結果になるといけないから、僕は、君とこゝで面會したことは言はないつもりだ。が、君の言つたことだけはそれとなく傳へることにしよう』

その後私の聽いたところによると、ズバトフはメシチェルスキー侯を訪問して、私に報告したと同じやうな話しをしたさうである。その際に、彼れは、私にプレヴェの暗黑政治を阻止するよう盡力することを賴んだが、私はそれを拒絕した旨を話した。するとメシチェルスキーはプレヴェのところへ行つてすべてのことを話した揚句、ズバトフが私を訪問したことまで喋舌つてしまつた。

このことは、ズバトフが免職される充分な理由となつた。彼れは、免職されたばかりでなく、ウラヂミル市へ追放されてしまつた。

その後、數週間を經てから、黑海の各港で、波止場勞働者の總罷業が起つた（ズバトフの手で組織された勞働組合はオデッサにあつた。これを組織したのは警保局の密偵哲學博士シャエヴィチであつた）。

當時、船舶局長をしてゐたのはアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公であつた。太公は港務局に命じて罷業の原因を調査させた。すると驚ろいたことにはこの罷業はペテルブルグからの命令で政府の密偵がやつた仕事であることがわかつた。しかも彼等を訊問してみると更に驚くべき事實を發見したのであつた。

當時、私は工場監督官からすでに報告を受けてゐた。それによると、この罷業はズバトフ組合の罷業委員會の煽動によつたことが明白であつた。プレヴェは遂に自分の派遣した密偵（その中の主要人物のうちにはミンスク市出身のユダヤ女がゐた）を檢擧して召還するやうな破目に陷いつてしまつた。

アレクサンドル・ミハイロヴィチ太公は、船舶局がこの組合の組織者は工場監督官であると指摘したのを信じて、その說明を求めるため私の所へやつて來た。私は、工場監督官のよこした報告を「ズバ

トフ組合」の仕業であるといふ證據書類と一括して太公に渡してやつた。

私は陛下に「ズバトフ組合」とは何であるかを知らせるため、詳はしくこの經過を報告した。そしてこの思想の有害な點を指摘した。これは私が大藏大臣を罷める數週間前のことであつた。陛下は靜かに私の報告を聽いてゐたが、一言もいはなかつた。陛下はプレヴェとセルゲイ・アレクサンドロヴィチ太公は全然ズバトフを信頼してゐる。だから、ウイッテの言つたことは信じられない、とあとで言つたさうである。數日を經て私は大臣を罷免された。

次の日に私は、大臣會議議長の就任を祝する旨の電報を寄せられたアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公を訪問した。すると太公は私に語つた。

『昨晩陛下は僕に向つて、やつぱりウイッテの言ふことがほんとうだつた。罷業を起させたり、勞働組合を作つたのはズバトフであつたらしい。しかしウイッテはプレヴェがこのことを全部知つてゐたと言つたがそれだけは間違ひだ。プレヴェはなにも知らずにゐて、今はじめて氣がついたのだ。それでズバトフを罷免したのである——と言つてゐたよ』

プレヴェ暗殺と私

私は次第にロシアで高まりつゝあつた當時の革命的思潮は、きつと一九〇五年十月十七日に起つたやうな兇變や大きな轉換をひき起すだらうと思つてゐた。また、プレヴェは自分のやつてゐる政策によつて、きつと生命を落すやうなことになるだらうと信じてゐた。なぜならば、茲に千人の者がゐて高官を暗殺するため生命を投げ出して懸つたとすれば、或る時間だけは或はその兇手から逃れられるかも知れないが、結局一年も經たないうちに必らず暗殺されるに決つてゐるからである。私はプレヴェが暗殺される數ケ月前に彼れを訪問したことがある。その時の用件はなんでも參議院で彼の表明した事項について說明を求める必要があつたためだと記憶してゐる。プレヴェは、私が彼れの地位をねらつてゐるものと思つてゐた。で、この危懼を彼れの頭から除くために私は說明した。

『僕が君と所見を異にしてゐるのは事實だ。しかしそれは大きな國家的問題についての話しである。その外に僕は君に反對する何らの理由をもつてゐない。僕が內務大臣の椅子をねらつてゐるなどと君が思つてゐるなら、それは大きな誤解だ。現在の狀態で內務大臣になることは僕として最も愚劣なことである。僕はそんな愚なことはしない。第一いままで僕に內務大臣になれと勸めた者は一人もないではないか』

私は更に言葉をついで言つた。

『君のとつてゐる現在の政策は國家のためにも君自身のためにも極めて有害なことだ。君はこの政策のお蔭で近い將來にすべての國家的活動を中止せざるをえない樣なことになるかも知れない。と

いふのは、いくら君がもがいても暗殺團の手から逃れることは出來ないと僕は思ふからだ』

彼れは私の言葉を聽いて重苦しく感じたのであらう、これに對してなんとも答へなかつた。

この私の忠告がたいした効力がなかつたのは無論である。こゝで言つて置く必要があることは、ペテルブルグ官界には、お互ひに人の中傷や誹謗をして果敢ない泡沫のやうな一時的利益を攫まうと焦せる人々が多かつたことである。しかも多くの人は（皇帝もその中の一人であつた）この佯言をたやすく信用したのである。

プレヴェは自分が目的としてゐた内務大臣の椅子を隨分永いあひだ保持してゐた。彼れは、いやしくも内務大臣の後任になりさうな才幹をもつた人物は片端しからこれを取除くことに努めた。

私は七月に、ドイツのビュロー内閣と新通商條約を締結するためベルリンへ行つた。七月十六日には私はベルリンにゐた。てうど大通りを歩きながらロシア大使館に立ち寄ると、十五日の晩プレヴェがザゾノフといふ男に暗殺されたといふ情報が來てゐた。

ペテルブルグへ歸つたのち、私は次ぎのやうなプレヴェ暗殺事件の詳細を知ることが出來た。

プレヴェは參内するため上奏報告をもつてバルチック停車場へ行かうとした。彼れは例によつて、自轉車に乘つた護衛に圍まれながら馬車を走らせた。と、不意にサゾノフは彼れの馬車の下をめがけて爆彈を投げつけた。これがためにプレヴェは即死、馭者は重傷を負ふた。彼れの持つてゐた書類入りの鞄はなんの損害もなく殘つてゐた。そのあとで、彼れの友人であつたドゥルノヴォがこれを持つて參内し、上奏報告の際その中を調べた。すると一通の手紙が出てきた。その手紙はドイツの或る町に住んでゐるキシンゲナとかいふ密偵のユダヤ女から來たものであつた。そしてその中には、爆彈をもつて皇帝を襲擊する革命計畫が準備されてゐること。その計畫には恰も私（ウイッテ）が大きな關係をもつてゐること、などが書かれてあつた。私はその後、この手紙はプレヴェが彼女に命じて書かせたものであることを明らかに知つた。

惟ふに、プレヴェの計畫は、まづ私が皇帝暗殺を目的とする革命襲擊に關係してゐることを書いた手紙を自分の密偵から報告させ、彼れが仕組んだことでないやうに見せかけてこれを皇帝の手許に差出し、自分はこれを陛下に秘することが到底できないと言つたやうな口實を述べるつもりでゐたのであらう。無論この際に彼れは、この手紙は陛下に秘するわけにはゆかないが、さりとてこの手紙を信用する者ではない。これは多分虚僞の報告であらう。――などと附け加へたに違ひない。しかしこの手紙の目的は明らかである。私に對する陛下の反感を成るべく大きくしようといふのが目的だつたのである。

第十七章　伊藤侯との交渉と私の極東視察

伊藤侯の露都訪問

一九〇一年十一月十五日、日本の伊藤侯がロシアへやつて來た。彼れは日本のみでなく世界的にも相當名を知られた政治家であつた。また事實において大政治家と稱すべき人物であつた。彼れがロシアへ來た目的は、日露の平和關係を將來に確保するためにそれまで兩國の間に開始されてまだ決定を見るに至らなかつた交渉を、圓滿に解決するためであつた。日本が懸案解決の基調として提出したのは、ロシアが朝鮮を全部日本の勢力下におくことを承諾する場合には、日本はロシアの關東州占領並に東支鐵道の支線を大連灣まで延長することを默認する。但しこの場合ロシアは滿洲に現存するロシア軍隊のうち眞に鐵道守備にあたるものだけを殘して、他は一切撤退し、且つ滿洲の門戸開放を約束せよ、といふにあつた。

ペテルブルグでは伊藤侯をあまり好遇しなかつた。彼れは陛下にも謁見し、外務大臣を訪問し、來客としての禮儀を盡したが、どこでも格別な厚遇をうけた樣子はなかつた。彼れは私が非常に熱心な親日論者であることを知つてゐた。それ故に、私とは數回往復して、時局について腹藏のない意見の交換をした。それは、彼れも私も共に日露間の懸案をいま速やかに解決しなければ極東の擾亂は免かれないし、その結果は豫斷しがたいのを知つてゐたからである。

伊藤侯がロシアとの協定を急いだには、もう一つ有力な原因があつた。そのころイギリス駐在の日本公使とイギリス政府との間に或る交渉が進行中であつた。それは日本に不利益なものではないにしても、日露間の親交を增進する意味のものでないことを彼れは推測してゐた。彼れはその成立に先んじてロシアとの懸案を解決しておいて、少なくも日英條約に別の方向を與へる方が、世界の平和により多く寄與するものだと考へたのである。

甚はだ遺憾なことには、我々はいかにも鈍感であつた。伊藤侯の提議に對して我々は決定的な回答をあたへることに躊躇した。外務大臣は關係諸大臣――陸海兩大臣及び私を集めて意見を求めた。私はむろん日本とは速かに圓滿の妥協をすることを主張した。他の大臣たちは寧ろ伊藤侯の提議を反駁するやうな傾向があつた。それに伊藤侯の提案は宮中であまり同情をえなかつたらしい。結局彼れの提案にたいしてロシア側から別の對案を提示することになつた。が、それは肝心な點において日本の提議を否認するものであつた。しかもこの案が作られたときは、伊藤侯は我々の遲々たる態度にしびれを切らしてベルリンへ去つたあとであつた。そこでこのロシア側の對案は同地へ回送されたが、彼れはこれに對してなんの回答も與へなかつた。また實際、與へることが出來なかつたであらう。とい

ふのは、日露の親交を増進するために、折角彼れが努力して作成した正當な提案がロシアから冷遇されたので、彼れはこのうへ日英交渉の進行を妨げる理由のないことを看取したからである。果して日露が極東で衝突する場合にはイギリスは日本を支持するといふ意味の日英條約は間もなく成立した。これが遂に悲しむべき日露戰爭を誘起する原動力となつたのである。

この頃には、ロシアを驅つてあの極東冒險政策を敢てせしめたベゾブラゾフ一派の勢力は漸やく宮廷内にその根を張つてゐたに違ひない。されば伊藤侯の提案にたいして明らかに拒絶こそしないが、日本の決して承諾しえないやうな對案を出したのである。惟ふにベゾブラゾフ一派の極東における冒險計畫は、一九〇一・二年ごろにすでに餘ほど進行してゐたのであらう。

内務大臣シュピャギンは職掌がら色々な秘密を知つてゐた。そして一再ならず私に向つて言つた。

『一體ベゾブラゾフとか、ウォンリャルスキーとか、またアバザとかいふ連中は何者であらう？　どうも不思議に宮中に勢力を有つてゐるやうだが、僕は彼等一派のすることが將來國家に爲ひする樣なことがなければよいがと心配してゐる』

露獨兩帝の海上交歡

一九〇二年の夏、レヴァル沖で海軍大演習が行はれて、陛下もこれに親臨された。その時、六月中にドイツ皇帝が來訪した。ドイツ皇帝は別れて歸國するに當り、彼れでなければ出來ないやうな挿話を殘して行つた。兩帝がすでに訣別して、ドイツの快艇が、やゝ遠ざからうとする時、こんな場合にいつもする樣に艦上から信號を以て挨拶をした。それは左の樣なものであつた。

『太西洋の提督は謹んで太平洋の提督に敬意を表す』

これを言ひかへれば僕は太西洋を征伏するか又はこれを主宰する位置を獲得することに鋭意する、同時に君が太平洋を主宰する位置を獲得することに努力せんことを勸告し、且つこれを支援することを約束する――といふ意味になる。

私が前に言つたやうに、ウイルヘルム二世帝はロシアが極東で多事なことは、つまり彼れがヨーロッパで自由に行動する機會を與へるものだと考へてゐた。だからロシアを東方に向はせようといふ意味なのである。この信號は實に彼れ獨特の芝居氣を發揮したものに他ならない。が、果してその結果であるか、または他に原因があるかは判らないが、この時以來――特に一九〇三年に入つて後は、陛下が極東總督にあたへる命令その他には、陛下が太平洋で主動的地位を占める希望を秘めてゐる意味がだんだん露骨になつて來たことは爭はれない事實である。

私の極東視察旅行

一九〇二年九月中旬、陛下はクリミヤへ轉地した。これと前後して私は極東へのの旅にのぼつた。旅順・大連・ウラヂウォストクの各地に至り、本國から遠くはなれた各地における統治ぶりを視察した。そして私は自分の心が暗くなるのを禁じえないものがあつた。

私は歸來たゞちに自分の視察したところを詳細に記錄し、わが極東經營のはなはだ不規律になつてゐる情況を指摘し、報告書として陛下に提示した。その報告書の中で、この不規律を矯正し、滿洲からロシア軍隊を撤退し、民心を安定し、速やかに日本と妥協する道を講じなければ、將來いかなる禍亂を招くかも知れないと說いた。私は當時、口頭や書面をもつて私が陛下に上奏したことをこゝに再錄することは控へる。要するに當時私の意見が採用されてゐたならば、むろん日露戰爭は起らなかつたであらう。したがつてあの多難の結果を招來することもなかつたであらうと確信する。

日露開戰は不可避か

『日本は多年汲々として開戰の準備をとゝのへてゐたのである。だから、我々の態度の如何にかゝはらず、彼れは何らかの口實のもとに必らずロシアに挑戰したであらう』――とは我々のよく聞く所であるが、これは決して當をえたものではない。もし我々が支那との協約を忠實に遵守し、朝鮮に對して十九世紀の世界に不似合な冒險（それはこの冒險の創作者ベゾブラゾフの名によつてベゾブラゾフ事件とも稱せらるべきものだ）を行はなかつたならば、また我々が伊藤侯の誠意ある提議に傾聽し、栗野日本公使が開戰の間際に提議した協定案に同意する雅量があつたならば、日露兩國の間に戰火をまじへることは避けえたであらうと信ずる。

日本が戰爭の準備を整へてゐたから、この戰爭は結局避けがたかつた、といふ說の無稽なことは次ぎの一例をみても容易に納得のゆくことである。

私が大學を出て以來、交通省の一鐵道局長として西部に在任した時でも、また大藏大臣の要職に在つた時でも、更にその後現在の大臣會議の議長の職についてからでも、たへず耳にしたのは、近い將來にはドイツとの開戰を見るであらうといふ噂であつた。最近二十年のあひだ鐵道省方面でも、大藏省でも、また陸軍當局でも、常に西部における開戰を目標として、事務をとつて來たのであつた。ドイツでもこれと同じく我々との開戰を目標として準備し、今もなほ準備しつゝあることは明らかな事實である。日本といよいよ開戰となるまでは、我々はこの戰爭の起ることを信じないでゐた。いつも挑戰的な行動を敢てしながらも、尙ほ且つこの方面には何の準備もしないでゐた。軍事當局の不斷の努力はドイツとの戰爭にのみ集中されてゐたのである。

こんな工合で、開戰數ヶ月前にもロシアの軍事當局は、まだ日本との戰爭は有りえないものだと考へてゐた。これに反してドイツとの開戰は避けることの出來ないものだと考へてゐた。ドイツに對す

る總司令官はニコライ・ニコラエヴィチ太公、オースタリ軍に對する總司令官は陸軍大臣クロパトキンとまで内定して居たのである。しかしドイツとは今日にいたるも開戰の氣色はない。もし我々が不合理な挑戰的な態度に出ずに、誠實に行動するならば、將來なほ永く戰禍を避けることが出來るであらう。これを見ても、國家が戰爭の準備を整へてゐるといふ事實が、必らずしも開戰の動機を促進するものではない。もし政治に當る者が賢明な政策をとり、兒戲に類する愚劣な行動に出でないならば、むしろ戰禍を未然に防止する保證となるのである。

私は極東から陛下の行在所であつたリワヂヤへ直行して、極く簡單に自分の所見を奏上した。陛下は詳しく私に問ふこともなく、書面をもつて報告するように命じた。

この時は、もうベゾブラゾフがアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公を通じて宮中に喰ひいり、陛下の寵遇をえてゐたのである。私が陛下に謁見して極東視察の所見を述べたとき、陛下があまりこれを聞くのを喜ばない態度を示されたのは、恐らくそのためであつたらうと思ふ。といふのは、陛下がもしベゾブラゾフの意見に心を動かして居たとしたならば、それと正反對な私の意見を聽くのを喜こばないのは當然であつたからである。

アレクサンドル太公

私がリワヂヤに滯在中に、もう一つ宮中の風向きを物がたる事實があつた。それは新らたに商船・港務廳の設置が發表され、アレクサンドル・ミハイロヴィチ太公がその長官に任命されたことである。

アレクサンドル太公の父君ミハイル・ニコラエヴィチ太公は國民の親愛をえてゐた温厚な人であつたに反し、その母君であるオリガ太公妃は、國民の間に極めて不人氣であつた。彼の女はバーデン王國の五女に生れ、艶麗で小才があり、小策を弄することを好む陰謀家であつた。アレクサンドル太公は母に似た子であつた。容貌が端麗で、他人の顔色を讀む事が上手で、小利口で、無教育で、自惚れがつよくて、しかも陰險で、我々の仲間としてみれば取るに足らない愚劣な小人であつた。が、アレクサンドル三世帝の長女クセニヤ内親王が、いさゝか婚期を逸してゐたのと、またアレクサンドル太公を愛してゐたので、陛下は太公を好いてはゐなかつたが、遂に婚嫁を許されることになつた。アレクサンドル三世帝の死ぬ一年前に、結婚式が行はれた。クセニヤ内親王は、當時の皇太子ニコライにとつてもつとも仲の好い愛妹であつた。そこで、皇太子は間もなくアレクサンドル太公を特に親愛するやうになつた。しかし先帝在世の間は太公も何ら小策を弄する餘地はなかつた。平穩無事の皇族としての生活を送つてゐた。が、間もなくニコライ二世の治世になると共に、生來の陰謀癖は擡頭しないではゐなかつた。そして徐々にその鋒鋩をあらはして來た。

アレクサンドル太公は海軍出身であつたが、規定の乘艦年數を完了してゐなかつた。そのために、

陛下の後援があるにもかゝはらず、望みどほりに一躍海軍將官として最高の地位を占めるのは困難であつた。海軍大臣チハチェフ、また特に太公の陰謀癖を知る海軍大將アレクセイ太公は容易に彼の希望を容れないで、まづ乘艦年數を完了することを要求した。そこで太公は漸やく海軍當局に反感をもつ樣になつた。

怪物カジー大尉

てうどその時、太公はもつとも適當な相談相手を見出いだしたので、ますます暗中飛躍を逞しくする樣になつた。それはカジーといふ元海軍大尉である。彼れは當時盛んであつた海運貿易會社に勤務してゐる間に、これも當時會社の重役であつたチハチェフ（現在の海軍大臣）と權勢を爭つて失敗し、その後イギリスへ渡つて永いあひだ海事を研究してゐた。元來才氣の多い彼れが永く國外にうづもれてゐる道理はない。ロシアへ歸つて一と花咲かせるために奔走してゐるうちに太公に見いだされて、その參謀格になつた。そして色々と海軍省の急所を衝くやうな海軍省改造案を立てては太公を通じて陛下の前に提示した。陛下も非常にこれに動かされた。陛下は實際においてアレクサンドル太公及びカジーに好意を寄せてゐた。しかし當時はまだ即位後まもない時で、皇太后の勢力が相當に强かつた。そして皇太后は先帝の愛弟であつたアレクセイ太公を常に信賴し、同太公はまた、海軍大臣チハチェフを支持してゐた。したがつて陛下も容易にどちらへも加擔する態度を示さなかつた。私が第三者として公平に判斷すれば、艦隊編制に關するカジーの意見はチハチェフのそれに比して、たしかに正鵠をえたものであつた。そのため海軍問題については、アレクサンドル太公及びカジー一派の方が、アレクセイ太公や海相チハチェフの一派よりも優者であつた。しかし人格の點においては、前者は後者よりも遙かに低劣であつた。カジーは野心家でこそあるが、多才多能で、場合によつては大に役に立つ人材であつた。しかしアレクサンドル太公は殆んどいふに足らない人物であつた。

こんな風に、ニコライ二世即位の直後アレクセイ太公（チハチェフ）派とアレクサンドル太公（カジー派）の間には激烈な暗鬪が始まつてゐた。その最初の衝突は、リバウ軍港築造問題となつて現はれたのである。

陛下は曾て私に向つて『先帝の遺志を奉じて、ムルマン軍港築造の事を遂行する意志である』——と言はれたことがあつた。ところがその後數ケ月を過ぎると、突然先帝の遺訓によつてリバウ港を築造して其軍港を「アレクサンドル三世港」と命名する旨の勅令が發せられた。その結果として莫大な資金が支出されたことは言ふまでもない。そして今日では、戰時にはこの港をいかに處置すべきかといふことが至難の問題となつてゐるのである。專門家たちの意見では、この軍港は廢棄してしまふのが最上の策であるといふに一致してゐる。だから最近ドゥバソフ將軍がムルマン視察に出かけたのは、更

にムルマンにも軍港築造の内意があるためだと言はれてゐる。「アレクサンドル三世軍港」の築造令が發せられた當時、陛下はこの勅令はコンスタンチン太公に强要されたのだと不平を漏らしたと傳へられてゐる。その當時は私も大に陛下の不平に同情した。また不平の理由もわかる樣な氣がしてゐた。しかし、その後十年を過經した今日になつて往時を回顧してみると、陛下のかうした不平は甚はだ不思議なものであることを悟つた。

陛下は何かの文書に署名しても、あとになつてその事が意に適はなくなると、必らず『あれは强要されて署名したのだ』――と、自分の口からいふか、または宮中の寄生蟲どもにさういふ噂を流布させる。そして罪は强要した者にあるといふ樣に吹聽するのが、殆んど常であることを知つた。十月十七日の詔勅の如きも『それはウイッテの强要によつて發せられたのだ』――と皇后をはじめ宮中の小人どもが公然と吹聽してゐるのである。それに就てはあとで尙ほ詳しく語るであらう。

アレクサンドル三世港築造のことについて、陛下が海軍首腦者の所爲に平らかでないことを知つたアレクサンドル太公の一派が、これを看過する筈がない。直ちに全力をあげて陰謀をめぐらした事はいふまでもない。太公はカジーをしてこれに反對する案を作らせて、陛下に示した。陛下はまたこれを參考案としてアレクセイ太公に手交した。そこで火の手は燃えあがつた。アレクセイ太公はこの案を海軍當局の所爲を批判するものだとして、海軍の一將校であるアレクサンドル・ミハイロヴィチ太公の退職を要求した。もし陛下をして思ふまゝに振舞はしめたならば、この事件はアレクサンドル太公とカジー一派の勝利に歸したかも知れない。しかし、この時は陛下はまだ皇太后の意向を憚つたのでその後戴冠式の頃に至つてチハチェフの免職をみるに止まつた。そして、その後任には、やはりアレクセイ太公の推擧によつてトゥイルコフが海軍大臣に任命されただけで、海軍部內には別に何の變動も見ることなしに結局した。つまり、この時の暗鬪はチハチェフ一人を犧牲にして、アレクセイ太公の勝利に歸した。アレクサンドル太公は海軍參議官の職を退くことになつた。が、一方アレクセイ太公もこの時以來、大に悟る所があつたらしい。その後は極端に從順になり、何事も皇帝の意志の如くに行動することに決心した。その後ベゾブラゾフ一派が跳梁して不幸な日露戰爭を誘起するに至つた時も、別に身分相當の進言をしないでしまつた。私に對しても、或る時次ぎのやうに忠告したほどである。

『君もあまり露骨に議論をしない方がいゝ。陛下はどうせ自分の思つた樣にしかしないのだから』

アレクサンドル太公の方も丁度この時分から、海軍方面に有力な運動をすることが出來なくなつてしまつた。といふのは、彼れの運動の原動力であつたカジーが突然死んでしまつたからである。カジーを失なつた太公がすでに海軍問題について何らの建策をする能力もない者となつてしまつたのは當然である。

かういふ事物の推移によつて、もうこの先き海軍方面で立身する道が閉鎖されたことを知つたアレ

クサンドル太公は、止むなく他の方面に向つて權勢の途を求めることを考へた。しかし彼れの知識は海軍の制服によつて示すほかに方法がないので、自然商船事業に着眼することになつたのである。

當時、海軍省の管轄に屬してゐた「義勇艦隊」は、アレクサンドル三世帝がポベドノスツェフの建策を容れて、海軍を補助する目的で創設したものである。それがいまや盛んに發展の途上に向つたので、太公はこれを海軍省から引きはなして、自分の事業とすることを計畫した。が、アレクセイ太公の反對にあつて、成功しなかつた。そこで今度は大藏省の管轄にある商船局に着眼した。太公はこの商船局を擴張して、各省と同格にし、その長官を大臣の位置にまで進めて、自からこれにあたる目論見を立て、自分の同意者を經て私の贊成を求めてきた。私は贊否を表示する前に陛下に奏上して、意嚮を伺つた。すると陛下は夙くにそのことを知つてゐたらしく、關係各方面から委員を召集して、大藏省内に商船事業に關する委員會を設置するように慫慂した。その委員會の決議にしたがつて、閣議を經て商船・商港調査會を設置し、アレクサンドル太公がその議長に任命されて事務を開始することになつた。

太公を取りまく惡人

いよいよ事務を開始すると、太公の周圍には甚はだ信用のできない色々な暗い人物が群集して、問題を横道へ引ぱつてゆく虞れがあつた。そのために豫ねて陛下の愛妹の夫である太公の意見を尊重したく考へてゐた委員中にさへ反對者をだすことが往々あつた。私にしても、太公の主張した案にはどうしても贊成することの出來ない場合が重なつた。かくして太公の私にたいする感情が自然に惡化して行くのは、これもまた止むをえない成行きだと思ふより仕方がなかつた。そのうちに妙な行違ひが起つてしまつた。

港務局の制度について太公の意圖に追隨する一部の委員は、港務局を全然地方長官の手から引き離して、獨立の機關とする案を可決してしまつた。私はこんな案に對してはもとより決裁を與へなかつた。するとこの時クリミヤに滯在中であつた太公は、私に電報して、もし私がこの案に決裁を與へないならば自分は辭職する、と言つてきた。その上に同調査會はとかく異論が多くて自分はその議長であることを迷惑に感じてゐるとつけ加へた。私はその電報を陛下に示した。同時にその案の或る個條はどうしても認可し難いものであることを說明した。陛下も全然私に同意であつた。

『太公がもし議長であることを欲しないならば罷めるがいゝ』

と回答するように命令した。しかし、私は陛下の言葉をそのまゝ言ひ送ることを差控へて、太公の進退に關する點には言及しなかつた。たゞ簡單に認可し難い旨を言ひ送つて、その後まもなく極東の旅へ出立した。私が極東から歸つてリヴヂヤ（クリミヤ）の離宮へ報告に行つた時には、アレクサンドル

太公は尙ほ同地に滯在してゐた。

私が陛下に謁見したとき、陛下は何氣なくたづねた。

『港務局の工事については、不正なことが屢々行はれてゐると告げた者があるが、それは事實であるか？』

そこで私は答へた。

『私はまださういふ事實を認めた事はありませんが、工事請負人が急に富をなしたことは聞き及んでをります。これによつて考へると、請負人と契約を結ぶとき、工事費を過大に見積る弊があるのではないかと思はれます』

謁見が終ると陪食を仰せつけられた。同席者は常侍の側近者のほかには、私とオデッサ軍管區司令官ムシン・プシュキン伯だけであつた。食事が終つて一同が外椽に立ちいでたとき、陛下は私の傍へ近よつて非常に親し氣に、

『時に君は商船・商港廳設立の事をどう思ふか？』

とたづねた。私は答へた。

『商船・商港の事務は、現在では大藏省商務局の一課で取扱つてゐますが、それは聊さか擴張する必要があるでせう。しかしこの事務を一般商務から分離するのは決して當をえたものでありません。況んやこれだけの仕事に獨立した一省を設ける必要は決してありません』

すると陛下は、

『いや、一省を設けるとは言はない。たゞ獨立の官廳をおくと言つたまでだ』

と言つた。そこで私は押し返へして、

『獨立官廳の總裁が大臣と同格である以上、それは名義だけのことであつて、今日わが國にさういふ官廳を設けるのなら、商船問題より尙ほ緊急なものが少なくありません。例へば勞働省とか、工務省とか……』

と言ふと、陛下は、

『君はさう思ふか』

と言つた。そこで私は、

『たゞ思ふばかりではありません。さう確信してをります』

とはつきり答へた。

すると、陛下は『さうか』と言つたきり、そのまゝ他に歩を移してしまつた。しばらくすると、ムシン・プシュキン伯が私の側へ來て言つた。

『君はいま、陛下に何か不快な事を申し上げはしなかつたか？』

そこで私は先刻からのことを話すと、伯は言つた。

『さうか、陛下が君の側を去られたときの容子があまり不快さうであつたので、心配したよ。また野心家の太公が何かたくらんだのだらう。困つたものだ』

その翌日、私はペテルブルグへ歸ることになつてゐたので、暇乞ひのため參内すると、陛下は非常に氣嫌よく私を迎へて色々と親切な言葉で語られた。もつとも政治については何の話もなかつた。

ところが私がペテルブルグの家へ歸つて書齋へはいると間もなく、クリミヤから來たと言つて宮内省の官吏が陛下の親書をもつて來た。私は驚ろいた。自分はいまクリミヤから歸着したばかりであるし、出發前に謁見したばかりであるのに、何の急用が出來たのかと、直ぐ開封してみた。するとそれは商船・商港廳を設置し、アレクサンドル太公を同廳の總裁に任命し大臣と同格の待遇をあたへる旨の勅令であつた。これはいづれも閣議を經ない純然たる獨裁的命令であつた。

アレクサンドル太公の總裁ぶりは、まづアバザ將軍の拔擢にはじまつた。アバザ將軍は呪ふべき日露戰爭の發頭人中の巨頭であるベゾブラゾフの從弟で、極東冒險の選手であつた。これら兩人を陛下にすゝめて非常な勢力を振はしめたのは太公である。だから太公はこの戰役については、實に元兇の罪を負ふべきである。

要職についたアレクサンドル太公は就職の最初から他省の管掌する政務に容喙して憚る所がなかつた，問題が大藏省に關するかぎり私は彼の干渉を容捨なく刎ねつけた。だから彼は間もなく私や私の部下にたいして最も激烈な反感をもち、中傷をするやうになつた。

それでは太公は自分の本職の方面で何事をなしたかといへば、弊害と不正事件の續出の他には見るべき成績を擧げえなかつたこと勿論である。

造船所不正事件

私が大藏大臣であつた當時、國民銀行の主管者であつたロトシュテインが銀行の業務を紊亂した。そこで私は嚴しくこれを譴責したことがあつた。そのロトシュテインが、私が大臣會議の議長に轉任したときに突然私を訪問して、さきに銀行を危地に陷いれた罪を謝し、今日これを恢復したことを報告に來たと言つた。私がどうして恢復し得たかと問ふと、彼れは次ぎのやうに答へた。

『元來銀行の營業狀態を惡くしたのには勿論さまざまの原因がありました。その主たる原因は自分が過度の自信によつて不當貸出しをした點にあるのは事實であります。その中でもリガのランゲ造船所に對する貸出は、銀行にとつて最大の病源でありました。たゞ幸ひなことには今度商船・商港廳でこの造船所を買收する議が成立して、これを相當以上の價格で賣り付けることが出來たので、銀行を救濟することが出來たのです』

このランゲ造船所は、その後私の大臣會議議長時代に、更に一度問題になつたものである。日露戰爭が始まると間もなく、補助艦製造の資金を募るために義捐金募集の委員會が設置されて、皇弟ミハイル太公を總裁に、アレクサンドル太公を副總裁に推戴することになつた。しかし實權は後者にあつた。前者は單に飾り物であつたことは言ふまでもない。そこで盛んにランゲ造船所に註文があたへられたが、造船所が相當の資金をもたないために募集した義捐金や港灣收入のうちから多額の融通をした。ところが戰爭が終つて、決算の時がきても、遂に精算がつかなかつた。そのため當時の商務大臣チミリャゼフの提議によつて、事件を大臣會議で調査することになつた。その會議の席で海軍大臣ビリョフは『ランゲ造船所は實用にならない。そこで建造した艦船もまた不完全極まるものだ』――と斷言した。前のロトシュテインの話しと、今また海軍大臣の批判を聞いた私は、そこに何にか不正の伏在することを豫想して、この事件の調査を拒絶した。すると事件は參議院で調査することになつた。が私はその會議にも出席しなかつた。すると參議院議長ソリスキーはその理由を質すために私のところを訪問した。私はソリスキーに事情を話し、『アレクサンドル太公自身はもちろん潔白であらうがその周圍に群集する小人どもに誤まられてあまり金錢の支出を放漫にした結果、こんな失態を招いたのではないか』――と言つた。ソリスキーは頻りにうなづいて言つた。

『太公は自分のところへ來て、何とかして失態の暴露しないやうにして呉れと涙を流して賴んだ』

ロシアの皇女を外國の皇族のところへ婚嫁させることはどうも面白くないといふ說は私もしばしば聞くところであつた。それにも相當の理由のあることは認めるが、皇女と太公との結婚もなかなか考へものである。クセニヤ內親王とアレクサンドル太公の結婚は、その一例である。もつともすべての太公が、アレクサンドル太公と同しだと言へないことは勿論であるが……。

第十八章　ベゾブラゾフの專横と私の辭職

奸臣は奸臣と結ぶ

一九〇三年七月三十日、極東統監府を設けてアレクセエフを統監に任命することが發表された。このことは各大臣の知らない間に決定されて突然に發表されたのである。

一九〇二・三年の間にベゾブラゾフ一派の陰謀は着々進展した。內務大臣プレヴェがこれに加擔したために、陛下は外務大臣や私が反對し、また陸軍大臣クロパトキンも多少の反對をしたにも拘はらず、この連中の說を傾聽する樣になつた。ベゾブラゾフ一味の勢力が增大するにしたがつて、極東問題に關する會議が頻繁に開かれるやうになつた。その度每にもつとも猛烈な決定的な言葉をもつて、極東における冒險的行動が遂にロシアと皇室を危地に導びくものであることを指摘したのは私であつた。陛下はしばしば私をなだめて、反對論を撤回しないまでも、切めては語氣や態度を穩やかにして、あまり激烈な口調を愼ませることに努力した。この點については、私は自分が陛下の前をも顧みず時として臣下にあるまじき激越な態度を示したことを深くお詫びする。しかし陛下の慰諭も私の信念を動かすに足らなかつた。私は終始一貫猛烈に反對することを止めなかつたのである。

一九〇三年の五月六日以前においても、私は陛下が次第にベゾブラゾフ一派の危險な計畫に心を傾けるのをみて、深憂に堪えなかつた。當時陛下に最も親密な關係をもつ者はメシチェルスキー侯なのを知つてゐたから、或る日同侯を訪ふてくはしく所見を述べ、彼れをして現在陛下をうごかしてゐる政見が甚はだ危險な理由を陛下に說くように依賴した。

メシチェルスキー侯は私のいふ所を諒解し、これに同意して直ちに陛下に書翰をおくつて諫言した。陛下はすぐ返書をあたへたが、その內容や語氣によつても、侯爵がいかに陛下に親近してゐたかゞ窺はれる。陛下は彼れに向つて、その憶測が當をえたものでないことを說明したのち『何事も五月六日には分明する。それによつて僕の取る方針を知るがいゝ』——と言つた。メシチェルスキー侯は、私に『五月六日とは何だらう。君には何にか心當りはないか』——と問ふた。しかし私もこれについては何ら思ひ合せることがなかつた。二人は『どうも解らない』——を連發するのみであつた。

遂に五月六日がやつて來た。この日、ベゾブラゾフは陛下の常侍顧問官に親任された。彼れの身分としては、これは實に殊遇でもあるし、時節が意味の深いものでもあつた。同時に彼れの一味であるウォガク少將も特別のお思召をもつて陛下の侍從武官に拔擢された。

極東統監府の設置とアレクセエフが統監に任命されたことは、私も外務大臣もまた他の各大臣（內務大臣プレヴェを除く）も當日の朝刊新聞を見て初めて知つたのである。私はそれまで私とベゾブラゾ

フに對してアレクセエフが取つてきた態度を考へてみた。そしていま陛下を動かす勢力がベゾブラゾフの方に傾いたのを察知して、彼れがその前に匍匐した心情を推察した。何れにしても極東統監府の設置は、對極東政策で私が敗北者となつたことを示すものであつた。またその結果、日本との開戰は遂に避けられないものとなつたことを豫報するものであつた。そこで私はこの日をもつて極東問題にクロス・マークをつけてしまつた。

ベゾブラゾフの訪問

八月の初め、陛下は數日間の豫定で、プスコフ地方の大演習に臨むことゝなつた。その出發に先だつて、或る日ベゾブラゾフが突然私を訪問した。私はその時までにベゾブラゾフとはほんの二三回逢つたばかりで、その交際は互ひに訪問する程度までは進んでゐなかつた。したがつて、この訪問は私にとつては眞に意外であつた。彼れの訪問が彼れ自身の發意であるかまたは上からの命令であるかは別として、何とかして私を彼れ等の新方針に合流させることは出來まいかと最後の試みに來たのであることは推察できた。

彼れは私に向つて、近いうちに、陛下がプロチフ鐵工場に行き同工場で建造中の水雷艇を御覽になる豫定であることを話し、私にもその日同鐵工所へ行つて陛下をお迎へしてはどうかと勸めた。こゝで一寸とプチロフ工場のことを記しておく。

同工場は現在では中央銀行の管理下にある。それはこの工場が收支償はないために、莫大の債權をもつ中央銀行が止むをえず營業を代行することになつたのである。その工場の理事にアリベルトといふ者がゐた。彼れはいつの頃からかベゾブラゾフの一味に投じて大藏省を出しぬいて「商業議員」といふ名儀を獲得して、工場内の勢力家となつた。ところが或る日私のところへ來て、ベゾブラゾフ一派の意圖か空想的なことを指摘して嘲笑した。そこで私は『それなら、どうして君はその一派にはいつたのだ』と、詰問した。すると彼は平然として『閣下、魚は水の深い所に集まるといふことを御存じないのですか？』と答へたことがある。

そこで、私はベゾブラゾフに言つた。

『私は國家の重臣であるから、陛下のお思召であれば何處へでも出向いて陛下を奉迎する列に參加しなければならぬことは承知してゐる。もしも相當の筋合から陛下が何日の何時にプチロフ工場に行かれるといふ公式の通知をうければ、直ちにこれに參向するであらう。が、さういふ通知をうけなければ、自分の發意や君の勸告でそこへ出向くことはしないであらう』

あとで聞いた所によると、その日陛下は、ベゾブラゾフが言つたやうにプチロフ工場へ行つて、そこで中央銀行の總裁プレスケに謁見をあたへたさうである。

不正貸出し事件

極東政策で、私があまりに執拗に親日主義を固執して讓らなかつたので、遂に陛下と私の間に溝渠を生じた。ところへ、また色々な些事が附隨して、ますますこの溝渠を深くして行く傾向になつた。それは實に止むを得ないことであつた。その例をあげれば、當時陛下の護衛兵の長官メインドルフ少將に關する事件などもその一つであつた。その當時ペテブルグにザヴォイコといふ男が現はれて、貴族銀行かまたは農民銀行から資金を引き出すことに奔走してゐた。しかし大藏省の當局は彼れをあまり眞面目に相手にしなかつた。したがつて彼は資金調達の目的を達しえなかつた。すると今度は內務大臣プレヴェにすがつて初志を貫徹しようとした。その一手段として彼れは、貴族銀行とか農民銀行とかいふ或る一定階級の便利や安定を主とする銀行は普通の營利銀行と目的を異にするのだから、大藏大臣の監督下におくより內務大臣の手に移すのが至當だ、といふプレヴェの銀行移管論を敷衍した案を作つて、メインドルフ少將の手を經て陛下に提示した。ザヴォイコはまた、同少將夫妻が金に困つてゐるのを知つて、或る有利な土地を周旋した。しかしこれを買ひ取るには普通銀行で融通する以上に巨額の金を要するのであつた。そこで六月の或る日にこのメインドルフは突然私を訪問して、陛下の命令と稱して中央銀行から彼れに二十五萬ルーブルを融通するように取計らつて貰ひたいと賴んだ。私は彼れに向つて次ぎのやうにこれを拒絕した。

『陛下の命令を大臣に傳へるには、常侍顧問官か、または侍從武官がこれを取次ぐ制度になつてゐる。だから、貴下から傳へられたのでは、たとへ陛下の命令でもこれを履行することは出來ない。しかもその金が貴下の使用するものであつて見れば、尙ほさら取計らひ難い』

二三日たつと陛下から親書が來て、メインドルフに中央銀行から二十五萬ルーブルの金を融通するようにといふ命令があつた。この貸出しは銀行の制度には反する點があつたが、陛下の裁可濟みのものである以上異議をとなへるべきでない。だから、すぐさま貸出の手續きをした。最初私が拒絕した時、陛下も皇后も『ウイッテはこのごろ增長して勅命さへも素直には承引しない』——と不滿の意をもらしたと言ふことをあとになつて聞いた。

八月中旬の或る夜、陛下から親書が來て、明日定例報告に參內するとき中央銀行總裁プレスケを同伴せよとの命令があつた。この命令は、實際をいふと私には甚はだ解しがたいものであつた。しかしよく考へて見ると、この頃の政界の雲行では、私はこのまゝ大藏大臣の職に止まることは出來ない。何故なれば、もしこのまゝこの職に止まれば日本と開戰（それはまた必然の勢ひであつた）の場合、それから生ずる結果にたいして全責任を負はねばならぬ事になるからである。もし他の各大臣が『それは陛下のお思召であつたから』——と辯解の辭を見いだしうるとしても、私にはそんな辯解は許さ

れない。ロシアの人々は、今日では私の强情なことをよく知つてゐる。私の卒直で頑固な性質を知りぬいて居る。だから私がもし『戰爭を避けるために最善の努力をしたが、今となつてはどうも仕方のないことだから、私は必要の前には止むをえず意を曲げて職に留まつてゐる』――と言つても、それは何人も信じないであらうこと明白である。

であるから、もし陛下の極東に對して新方針をとるといふ決心が事實確定したのであるならば、私はこのうへ留任すべきではなく、陛下もまたこれをそのまゝに置かるべきでない。大藏大臣のやうな時局に重大な關係をもつ職に反對意見をもつ者が在任することは、政策遂行上に一致を缺く原因となり、目的の達成にこれほど有害なことはないからである。陛下がもし私の退職を望まれるなら、私にはすこしも異議はない。

それにしても私は、私にプレスケを同伴せよと命ぜられた意味がわからない。假りに私の後任に彼れを任命する考へだとして見ると、そこにまた疑問が起る。何故なればプレスケは今日まで曾て陛下の知遇をえた者ではない。先日陛下がプチロフ工場へ行つたとき初めて、それも非公式に、偶然的に謁見を與へられたに過ぎないからである。

私は翌朝プレスケをよんで、同車して參内した。途中で彼れは私に自分が呼ばれた用向を訊ねたが私はむろん彼れに明答を與へることが出來なかつた。たゞ想像として何にか重要な職に任命されるのであらうと答へておいた。

皇帝から敬遠さる

宮中に到着して、まづプレスケを應接室に待たせ、私は執奏のために陛下の書齋へはいつた。執奏はいつものとほり一時間ばかりで終つた。その間に私は差向きの要務の外にいろいろと將來の計畫を述べた。また近く陛下が外遊の途に上られるので、その間に酒類專賣が實行されてゐる各地方を巡視する許しを請ふた。陛下は愉快さうに私の言葉を聽き、特に巡視については『さういふ重要な問題について君が親しく實況を視察することは極めて意義のあることだ』――と言つて許された。

そこで要件を終つて退出しようとすると、陛下は何となく憂鬱な態度で『プレスケをつれて來たか？』とたづね、プレスケの人物について私の意見を問はれた。私が、多年彼れを信用してきた關係上、その人格と手腕を稱讃したのは勿論である。すると陛下は私に向つて言つた。

『それでは君は御苦勞だが大臣委員會議長の職に就いてくれないか。さうしてプレスケを君の後任として大藏大臣に採用しようと思ふのだが……』

私はこのあまりに突然の陛下の決定に驚いて一寸と返辭を躊躇してゐると、陛下はさらに語をついで言つた。

『ウイッテ君！　君はこの任命に不服ではあるまいね。　大臣委員會議長の職は帝國最高の地位であつて、君の多年の勞に酬ゐるにはこのほかに途がないのだから……』

それで、私は次のやうに答へた。

『たゞ今の御任命が、陛下の私にたいする御不信任の結果でさへないならば、よろこんでお請けいたします。唯だ自分としては、より繁劇の職にある方が御奉公甲斐があると考へるのではありますが……』

それからプレスケに陛下のお召しを傳へて退出した。その時、皇太后から陪食の招きをうけた。皇太后は皇帝の意向を知つてゐたと見へ、私にたいして色々と慰諭の言葉を賜はつた。

私が大臣委員會議長といふ閑職に敬遠された理由は、日本との開戰を必然的に誘致した極東新政策にたえず反對したゝめであることは、何人も首肯するであらう。そこで當然おこる問題は、今まで極東問題ではいつも私と意見を同じくした外務大臣ラムスドルフ伯が依然としてその地位に留まつてゐることである。しかし、それは私と彼れとの性格の相違にもよるし、また物の言ひ方の相違にもよるのである。二人の出處進退について或る先輩は次ぎのやうな面白いことを言つた。

『或る家庭で、一男一女をもつ父が子供たちからみて父らしくないと考へられる樣なことをした。——たとへばすでに老境に入つた父が舊妻と別れてあらたに若い妻を迎へようとしたとする。子供たちはいづれもそれが父のためによくないと思つて、これを諫止しようとする。こゝまでは二人の子供の考へに相違はない。が、いよいよ諫止することになると二人の態度には非常にちがつた點が見へる。生來短氣で卒直な息子は父の室にはいると直ぐに開き直つて「どうもお父さん、つまらぬことをお考へなすつて困るじやありませんか。これは、どうしても止めて下さい。そんなことをなさつては、あなたのためにも惡るいし、家族一同も困るし、またあなたの體面を傷つけるではありませんか」と正面から攻擊的に詰めよる。父は宥めるつもりで「まあいゝさ。こんなことは子供の口出しすることじやないから、默つてゐるものだ」と言つたが、息子はますます言ひつのる。議論のはてしがない。父親はとうとう腹を立て、家長の權力をふりまはして、息子を追ひ出してしまふ。これに比べるとおとなしい娘の態度は全然ちがつてゐる。彼の女は父の室にはいると、まづ父の側に腰をおろして充分に親愛の情をみせてから、「ねえお父さん。あなたは私がどれほどお父さんを大切に思つてゐるか御存じでせう。それがお判りになつてゐるなら、今度のことはやめて下さいね。それがいゝことだか、惡いことだか、そんなことは知りませんが、兎に角お父さんのおためにいゝことではないさうですから……」とやさしく言はれると、父親は非常に閉口する。そこで「よしよしお前のいふことはよく判つた。だが、そんなことは子供の口出しすることでないから、それ

よりお前はこれからお化粧をして待つてゐるがいゝ。晩にはお父さんが芝居へ伴れて行つてやるから」と言つてお茶をにごす。ウイッテとラムスドルフの行き方は、丁度これに似てゐる』

さう言つて、その先輩は笑つたさうである。或はそんなものかも知れない。

私の轉任が發表されると、外務省でも次官オボレンスキー侯その他の幹部がラムスドルフ伯に『伯もこの際辭表を出すのが當然である』――と勸告したが、伯はこれに同意しなかつた。さうして伯は或る日私を訪ふて、その思ふところを打明けて言つた。

『私はこの問題については、まづ第一に、わが皇帝陛下は獨裁君主であるか、獨裁君主でないかと言ふことを考へねばならないと思ふ。私は獨裁君主であると考へてゐる。何事についても一度は自分の意見を具申するが、その採否は一に陛下にある。だから、それから先きは唯だ陛下の意志を成るべく完全に履行するのが我々の責任であると思ふ』

これは一面たしかに立派な理論だ。唯ださうするにはまづ何よりも圓滿な性格の持主であることを必要とする。ところがその性格こそ私に最も缺けてゐるものであることを遺憾とする。

新藏相プレスケ

陛下がどうして私の後任にプレスケを選んだかは、私の遂に知りえなかつた所である。惟ふにこれはベゾブラゾフ一派の推薦が有力な原因をなしたのであらう。そしてまたこの一派が彼れを推薦した理由は、彼れが外觀上きはめて柔和なのに目をつけ、これを新たに要職に就かせておけば甚はだ與みしやすいと考へたのであらう。さうだとすれば、彼等はやがて失望する時がくるであらう。プレスケは一見非常に柔和ではあるが、なかなか几帳面で、高潔な人物であるから、彼等の不當な要求には容易に應諾しないであらう。もしさうした目的のためならば、彼れ等は寧ろココフツォフを擇ぶべきであつたらう。ココフツォフはプレスケにくらべて强情な人物ではあるが、多年官界の游泳に慣れてゐる。彼れは、勢力の在るところを見るに敏捷であり、決して潮流に逆行するやうな不利な言動をする者ではないからである。

プレスケ任命の當時ココフツォフはパリーにゐた。彼れはこの任命を知つて、非常に憤慨したさうである。それは大藏大臣の後任としては、自分に優先權のあることを確信してゐたからである。またそれは彼れとしては極めて當然なことであつた。

私はこゝで、陛下にたいする德義上の責任として、一寸と述べておかねばならぬ事がある。

遼東半島を占領したのちロシアは朝鮮でどういふ政策を取らねばならぬかの問題について、各大臣の意見が一致してゐた間は、陛下の態度にはあまり動搖はなかつた。一方でウォロンツォフ・ダシコフ伯や、アレクサンドル太公や、また最もお氣に入りのベゾブラゾフ等が色々の進言をしたにかゝはらず

また心のうちで時々動搖はあつたかも知れぬが、結局においては、よく責任ある大臣たちの意見を容れたのである。しかしその後プレヴェが內務大臣の職に就き、明らかにベゾブラゾフ一派の冒險政策を援助するやうになると、始めてベゾブラゾフ一派やアレクセエフ太公の進言に動かされる樣になつたのである。それでは何故プレヴェがベゾブラゾフ一派に加擔してこんな迷路にふみ入つたかといへばそれは極めて單純な彼れの權勢慾が禍ひしたのである。彼れが權勢慾をほしいまゝにするのに最も妨げとなつたのは外務・大藏の兩大臣であつた。そこで、彼れはこれを排斥する手段として、兩大臣の反對側の冒險政策を支持した。そして自分が內務大臣として手にいれる獨特の材料を利用して陛下を惑はしたのである。

その一年前に私とベゾブラゾフの意見が衝突した時、いづれを取るべきかを宮中で激しく論議した問題があつた。――これは後になつて宮殿警衞長官であつたゲッセ少將の傳へた所であるが、當時陛下の興味はベゾブラゾフの意見の方に傾いてゐた。しかし、それを採用するとなれば、今まで反對して來た私が極力これを妨げるのは明瞭であつた。したがつて彼れの意見を採用する場合には、私を退けねばならぬ。もし陛下が單に人にたいする愛憎によつて問題を決するならば、陛下がより多く愛してゐたのはベゾブラゾフで、私はむしろ幾らか忌憚される理由をもつてゐた。しかしこの時は、陛下は尙ほ私を重んじて、遂にベゾブラゾフを退けた。そして、彼はジュネーヴへ去つてしまつたのである。

その後一年をすぎて、私が極東視察に出かけた不在中に陛下がリヴヂヤ離宮に滯在してゐる機會にその近くのヤルタにゐたアレクサンドル太公の推薦でベゾブラゾフは再び勢力を恢復した。さらに私を敵視するプレヴェが內務大臣として入閣したので、彼れはその支援をえて宿望を貫徹した。つまり――極東事件から引きつゞいて、更に日本との戰爭を誘起したのはベゾブラゾフとその一派である。これを阻止して禍根を除くことを妨げたのは、アレクサンドル太公である。またこれに力を藉して災禍を完成せしめたのは內務大臣プレヴェである。

私はこゝで、この問題をこれ以上に記述することを避ける。もし私の死後になつて、當時の顚末を知らうと欲する後世の人は、私の記錄文書のうちに詳細な記事を求めることが出來るであらう。

藏相としての私の業績

私の大藏大臣在職中に、ロシアの歲計收支は極めて堅實になつた。歲出に不足を生じたことはないのみか、每年收入は支出よりも莫大な超過を示すにいたつた。國庫はいつも數億の剩餘金をもつてゐた。私が財政上にかくまで好成績を擧げえたのは陛下が財政については深く私を信用して、何の顚慮するところもなく私の思ふところを敢行させたお蔭である。私は、この點については深く陛下に感謝する者である。

私が常に支途の自由な巨額の資金を國庫に有つてゐたことはよく非難の的となつた。多くの論者、中にも新聞界ではこれを非難した。そして『これを生産事業に支出すべきである。どんな國でもこんなに巨額の剩餘金を蓄積死藏するといふ愚策を行ふものはない』と言つて、いつも財政狀態のとゝのつた英・佛・獨の諸國を例にひいて私のすることを攻擊した。

しかし私はこれ等の意見に一度も賛成したことはない。また今日でも尙ほさうである。私はロシアは財政上特種の狀況におかれた國であつて、この國では國庫に相當に巨額の自由資金を保有せねばならぬと信ずる者である。

私は、反對者の多くはロシアの實情について眞の觀察を缺いてゐるのではないかと思ふ。そして常に次ぎのやうに反駁した。

『諸君は色々な點から尙ほ充分に深い研究を要すると思ふ。まづ第一にロシアは他に類例のない借金國であることを思はねばならぬ。英・佛・獨のうちいづれの國がロシアのやうに巨額の債務を負ふてゐるか。これは勿論ロシアの國運上の一大弱點である。すでに國が債務國である以上、常に相當の國庫準備金を用意して、一朝恐慌がおこつてもロシアの債券や貨幣の減價を調節する準備を必要とするのは當然ではないか。

『ロシアの不幸は今日まで尙ほ農業本位の國である點である。しかもその農業が極めて幼稚な狀態にあることである。國民生活の源泉である穀作の豊凶は、全たく天候に支配されてゐる。適當な時節に二三回の潤雨があれば國民の生活は安定するが、夏季に數週間の旱魃がつゞくと忽ち飢饉が起るのである。この方面でも英・佛・獨の諸國とは全たく異つた事情にある。ロシアでは常に相當額の資金を蓄積して凶作に備へねばならぬ。これは爲政者が考ふるべきことではないか』

さらに私をして常に現金の蓄積を考慮させた別個の原因がある。それはニコライ二世帝の即位の當時から絶えず私をおびやかしてゐる戰禍にたいする恐怖感である。私は常に、何時かはどの方面かで戰爭が突發することを恐れてゐた。この恐怖感は、おもふに次ぎのやうな二つの事情があつたゝめであらう。

その一は――陛下の周圍にある人々、特にクロパトキン將軍を頭目とする軍閥は、やゝもすれば陛下にすゝめて戰爭に訴へる以外には解決の出來ないやうな國際關係を釀成する傾向があつたことである。他のもう一つは――陛下が心の中に秘めてゐる覇氣であつた。私は決してニコライ二世帝を好戰の君主だとは言はない。しかし彼れは決してその外貌のやうに温和一方の人ではない。可なり熾烈な名譽慾の所有者である。それに加へてその周圍には前述のやうな軍閥のほかに、種々雜多な小人どもが群集して、陛下の自負心を煽るやうな進言をしてゐた。その中には『いま世界に大ロシア皇帝に向つて戰ひを宣するほどの勇氣ある者があるとは思はれないから、もしロシアの態度さへ强硬であれば、

陛下の欲するところは、戰禍を見ずに必らず達成されるであらう』――と極言する者さへ少なくなかつた。こんな實況を常に見聞する私が、必らず近いうちに流血の慘禍を見ないでは濟むまいといふ恐れを抱いたのは決して無理ではあるまい。

實際、私は自分の現金蓄積主義によつて、退職の日までに約三億八千萬ルーブルを貯はへ得たのである。日本との開戰後數ヶ月を支へ、もつて有利な條件で外債を募りえたのは、國庫に現存した資金のお蔭であつた。

私は大藏大臣在職中に、可なり巨額の公債を募集した。が、それは高利公債の借換・鐵道公債・または幣制改革に要する準備金のためで、いづれも金融または財政上に有効な働きをしたものであつた。この方面では私は常に陛下の厚い信任と支持とをえたことを特筆する。

ロシアの鐵道網も私の在職中に異常な發展をとげた。一八七〇年代の末、トルコとの戰爭の後、ロシアの鐵道工事はしばらく中止されてゐた。私は就職後直ちにその復興に着手し、異常の速力をもつて進展せしめた。これについても當時は私があまりに擴張を急ぐといふ非難をした者があつた。しかし今ではどうであらう。何人も私の建設した鐵道の有効さを疑がふ者はない。近年ではまたまた鐵道は盛んに擴張されてゐるではないか。

外資輸入と祖國主義

ロシアの工業も私の在職中に非常な發展をとげた。これは私が秩序たゞしく保護政策をおこなひ、外資の輸入を助長してわが工業の開發を促進した結果である。そして、ロシアの工業はこの時をもつて漸く堅實な基礎の上におかれることになつたのである。私は從前でも今でも同じやうにロシアを開發するための外資の輸入には同意する者である。ロシア人の一部には單に偏狹な「祖國主義」の見地から外資の輸入を排斥する風がある。それ等の人々が外資の輸入を排斥するのはいつでもそれが直接に自分の關係する工場か又は事業の發展に役立つ場合か、またはそれによつて成立した會社に自分たちが相當有利な地位を占めうる見込みのある時に限るのである。

また次ぎのやうな例も少なくない。――カムチャトカや他の露領アジアの各地には、砂金鑛區や金鑛の有望なのが少くない。外人又はロシア人の會社中には、これ等の金の採取や精練の特許をえることを熱望してゐるものが少くない。これに對していつも例の「祖國主義」の愛國者たちが「ロシアの富源は必らずロシア人の資金（それは今も昔も甚だ豐富でない）で開發されねばならぬ」――と言つて反對するのが例である。この旗印を高く掲げる「祖國主義」者の一人に退職大佐ウォンリャルリ・ヤルスキーといふ生粹のロシア人があつた。彼れは常に『ロシアの富源はロシア人またはロシアの資金に

よつて開發せられねばならぬ』――と高唱することによつて熱烈な愛國者としての名聲を博してゐた。この人物がいつしか宮中に喰ひ入つて、陛下の口添をえて、チュコット半島の砂金鑛を借區する特權をえた。さうして二三ヶ月後にはその借區は外國人に讓渡されて、ウォンリャルリ・ヤルスキーは莫大な不當利得をつかんだ、こんな例は枚擧に遑のないほどである。

陛下はいつも外國人や外國の資本でロシアの富源開發のため會社を設立しようとする私と、その計畫に反對する者に好意をよせる傾向があつた。しかし實をいふと何人もロシアの企業にたいする外資の參加に反對するのではなかつた。彼等は、例の世間見ずの單純さから、その外資が事業に經驗もなく金錢の收支に放漫なロシア人によつて勝手に使用されることを望んだのである。この傾向は一面においては多くロシア人大工業家が、他人が外資を利用して事業を擴張し自分たちの競爭者となることを恐れたゝめである。また他面では、自分の固有財產を蕩盡してしまつて、俄かに商工業者の仲間いりをした連中の間に多く見る所のものであつた。さうしてこの種の人々は多くはロシア貴族の出身者であつた。

私は一再ならずロシアの商工業を發展させるために外資を輸入することは主義として望ましいことであり、また奬勵すべきことであると言つた。そしてこの問題を提さげて陛下の前で討議したこともあつた。私に對して正面から「否」と言ひうる者は殆んどなかつた。それはこの問題を理論的に反駁するほどの素養をもつ者がなかつたからであらう。しかし、陛下は何人の意見によるのか判らないが兎にかく私の意見を喜ばない樣子であつた。それは恐らく陛下が金融狀態の推移や金融問題に通曉してゐない結果、外資を輸入することは畢竟ロシアを外國人の勢力下に提供する樣なものだと思つてゐるためらしかつた。

私の同僚や金融界の先輩たちで外資輸入の有害說を是認するほどの者が殆んどなかつたのは勿論である。しかし、それが宮中であまり好感をもつて迎へられないのを知つてゐるために斷乎としてこれを主張する者もなかつたのである。だから、私は在職中に外資の輸入を主張しつゞけ、また可なり巨額の外資を輸入したが、それは主として私一個の力をもつて遂行したものであつた。

工場監督機關の設置

私が大藏省（それは同時に商務省でもあつた）の事務として管掌したものゝうち、工場監督機關の組織と運用に關するものは陛下の支持をえることの出來ないもの丶一つであつた。工場監督機關は前にブンゲが大藏大臣であつた時代に設置されたものである。しかし、常に猜疑の眼をもつて見られてゐた。それはこの機關は資本家の利益に反對して勞働者の利益のみを擁護するものであると考へられたからである。當時においてもまた現在でも決してそんなものではないのである。

工場監督機關は、設置の當時も今も變ることがない。勞働者および工場主の利益に對しては極めて公平な客觀的な態度をとるものである。たゞ必要な場合――つまり工場主または資本家が不當に勞力の搾取をする場合にだけ勞働者を支持するのである。しかしロシアの工場主や資本家には貴族出身の者が多く、勞働者にくらべると上流社會に緣故を有つ者が多い。そこで彼れ等は、この機關はたゞ勞働者の自由と我儘を支持する極端な自由主義的な制度であると吹聽して廻はつたのである。

十九世紀の末から二十世紀の初頭において、勞働者の間における不穩の機運が強くなつた。ロシアの勞働者の間にも外國の勞働者社會を風靡した社會主義思想がようやく濃厚になつて來た。外國では思想的に動搖してきた勞働者を安心させるために、いろいろ根本的な方策が研究され、その是認されたものは立法手續を經て法律として發布された。勞働保險法、勞働時間の規定、勞働組合法、勞働者醫療法や勞働者救濟法などがそれである。これ等の法律や方策は到るところで實行されてゐる。ビスマーク侯のやうな有名な保守的政治家でさへ、遂にその實施をせねばならぬ勢ひとなつて來たのである。そこでロシアでも、同樣の法律の施行を要求する聲が、勞働者の間のみでなく他の階級、――例へば、知識階級とか自由主義者の間に次第に高唱されるやうになつた。

しかし、かういふ政策は、反動派の人々からは猛烈な反對をうけた。その一例は私が曾て勞働者の負傷して不具となつた者や遭難者に報償することに關する法律案を參議院に提出した時の狀態でも判る。これを通過させるために私は異常の努力をしたがその議決された法律案は全く骨拔きとなつた。外國で行はれてゐるこの種の案とは全然ちがつたものとなつてしまつた。こんな狀態が、いつかはロシアにおける勞働者と工場との關係を極端に惡化し、尙ほ勞働者間に社會主義――時には革命思想を含む極端な思想を傳播する動機となつたのは眞に止むをえないことである。

實業教育の發展策

私は、自分の在職中に商務局の實業教育に關する事務を擴張して、實業教育の發展を圖りたい希望をもつてゐた。そこで、文部省からアナプロといふ男を採用してその方面の主任とした。アナプロは技術家出身である。そして前に私が管理してゐた國立工業學校の校長で、その時代から私の信用した人物であつた。私はまづこの目的を達成するために實業教育令を規定した。そして參議院の可決をえたので漸く實業學校網を全國に普及する素地を作ることが出來た。

かくて漸く實業教育を普及する方法が定まつたので、私はさらに高等な教育機關を設けたい希望をもつた。それは高等工業學校といふ樣な形式でもいゝ。が、その學制は專門學校風でなく、大學制によつて科目は各部門にわけても學生は相互的接觸によつて一般人間として必要な知識を共通的に修養しうる樣にしたいと思つた。私は部下と研究して、ペテルブルグ工業學院（それは今日首府にある高

等教育機關中相當の地位を占めてゐる）の學制をつくつた。この學院は、經濟部と工業部にわかれ、後者はさらに器械・造船及び化學の各科に分れたものであつた。この學院の學制を參議院に提出した。ところが、議論がなかなかやかましくなつて、それが通過するまでには可なりの努力を要した。それでも漸やく可決されたので、私は專心その建設に努力して、建築設備の方面においては決して他に遜色のないものを造りあげた。大藏大臣としての私は、費用を調達する點で他の人よりも多くの便利を有つてゐたからであらう。この學院の創設には隨分多くの困難があつた。それにもかゝはらず、これに打勝つて豫定以上に完全なものを造りあげえたのは、當時まだ陛下の私にたいする信任も厚かつたし、私はまた參議院方面でも相當に勢力をもつてゐたからである。

いよいよ學院長を選定しなければならない時が來た。が、これも隨分困難な仕事であつた。さきにこの學校の建設が決定すると『ウイッテは他人が要求する場合には、なにかと理窟を言つて金を出さない癖に、自分の思ひ立つたことは何でも仕遂げる』――と言つて非難したものである。だが、今度はまた言つた。

『ウイッテはあんな學校を立てて、わざわざ騷擾の種を蒔くのだ。いま我國では大學が足りないのではない。多すぎて困る位だ。大學生といへば騷擾の種で我々はその始末に困つてゐるではないか。それだのに、今また鼻の先きへ騷ぎの種を拵らへるなどいふことがあるものか』

これは驚ろくべき愚論だが、しかし案外有力であつた。こんな情勢であつたので私は決して物議の種にならないやうな人物を學院長に選定しなければならぬ立場に立つた。可なり苦心した末、漸やくガガリン侯を迎へることにした。この人ならば、家柄といひ人格といひ實に完全なもので、何人の不安も招くやうなことはなかつた。私はその後この學校と殆んど同様な工業學院を、ワルソウとキエフにも創立することが出來たのを非常に滿足に思つてゐる。

第十九章　上層社會の一般的空氣

大臣會議々長の仕事

大臣委員會議長の職はどう見ても閑職である。大臣會議そのものも一九〇五年十月十七日の改革後には廢止された。我國には一九〇五年十月十七日以前には、政務を統一する中心機關(內閣)がなかつたと言はねばならぬ。大臣委員會は最高の行政機關ではあつたが政府の統一といふことにはあまり効力のあるものではなかつた。大臣委員會に提出される問題の多くは行政上の雜件であつた。それは法律上の明文を缺くか、または法律の規定が明瞭でない問題や、重要な法律案で參議院方面から强硬な反對をうける虞れのあるやうな問題であつた。そんなわけで、ユダヤ人、ポーランド人、アルメニヤ人その他の異民族の權利に制限を加へるもの、いろいろな警察取締に關するもの、皇室から特典を與へられるもの、その他種々の臨時的な法令が、この會議の議事に上る主なるものであつた。この會議の列席者は各大臣またはその代理者、參議院各部の代表者、さらに特に勅令によつてこの會議に列せられる者などであつた。また會議の際に重きをなすのは、てうどその時分に陛下の寵遇をえてゐる人物で、他の多くは默々としてゐるのを例とした。私が大臣委員會議長であつた時代の有力者といへばまづトルストイ伯(當時の內務大臣)とドゥルノヴォであつた。ドゥルノヴォはあまり智慧者ではなかつたが世渡り上手な小才のある人物であつた。またプレヴェは秘密警察の代表者で敏腕な事務家であり、幾らか法律にも通じてゐた。彼れは深い學識もない日和見家であつたが、なかなか奸智に長けた、敏捷な、官海游泳の呼吸を充分に呑み込んでゐた。一口にいへば——利口な役に立つ、しかし政治的良心の缺けた人物であつた。ポベドノスツェフは、學識修養ともに群を拔いてゐた、利己的慾望の少ない高潔な政治家的人物であつた。しかし同時に虛無的な傾向をもつてゐて、消極的で、批判的で、一切の建設事業の敵であつた。彼は改革の意義を解さない譯ではないが、その批判的な、消極的な天性はこれに對して非常な危惧をいだく癖があつた。實際においては彼は警察的秩序の崇拜者であつた。そのため宗務廳檢事總長の職にあつた彼れは、正敎會內に極端な警察制度を勵行するにいたつた。前にロリス・メリコフの發議で成案され、アレクサンドル二世帝の末期からアレクサンドル三世治世の初頭にかけて實施の豫定であつたロシア最初の憲法案が無慘な最期を遂げたのは、實に彼の保守思想が累をなしたのであつた。これは彼の大罪である。もし當時の立憲思想が彼れの障害をうけずに進展してゐたならば、ロシアの歷史は必らず別の途をたどつたであらう。そして現在のやうな下劣な、無謀な革命や、無政府狀態を見ることなしに經過したであらう。

陸軍大臣ワンノフスキーも大臣會議における有力者の一人であつた。彼れは善人ではあつたが軍人

氣質で、多少の常識はあつたが、要するに學識の淺い頑迷な人物であつた。

會議には時としては識者が勢力を現はし優れた意見が出ないでもなかつた。しかし、それは或る豫定の決議を強ひられない場合に限ることで、極めて稀有のことであつた。私は大臣委員會議長としては、多くの先輩がとつた例にならつた。なんでも六ケしい問題は成るべく參議院へ回附するか、或は當該大臣をして直接陛下に執奏する道を取らせることにした。そして自分の意思に反する、いやな決議に關係することを免かれるように用心した。一般に大臣委員會議長が自から陛下に上奏する機會はきはめて少かつた。多くは會議の書記官長が取扱ふことになつてゐた。それに當時私は或る意味において陛下の不興を蒙つてゐる者であつたから、その在職中に陛下に謁見を請ふやうな機會は殆んどなかつたと言つてもいゝ程である。

私のパリー訪問

私が大藏大臣の職を退いたのは一九〇三年の八月であつた。それから數日すぎると、陛下は海路外國にゆき、皇后の兄弟の許（ヘッセン・ダルムシュタット）に客となつてゐた。私も幾日かの後に出發して、まづベルリンへ行き、次いでパリーへ赴いた。パリーでは私は成るべく客を避けた。特に政府側の人とは逢はないように注意してゐた。といふのは、この時私はすでに日本と開戰の避けられないことを確信してゐたので、人と談話する際に見えすいた嘘をいふのが不快であつた。それかと言つて本音を吐くやうなことがあつては尚ほさら大變だと思つたからである。パリーで私が一番驚ろいたのは、フランス政府の戰爭にたいする樂觀的態度である。特に外相デルカッセの、戰爭は決して起らないものと確信してゐる態度と、これに唱和してゐる新聞紙の多いことであつた。

當時デルカッセは人に向つて戰爭は決して起りえないと斷言し、これについては非常に確實な情報を握つてゐると言つてゐた。それは後になつて明瞭になつたことだが、彼の言つた確實な情報といふのは、當時の駐佛ロシア大使ウルソフが『極東で戰爭の起るやうなことはありえない』――と言つたのを基礎としたものであつた。外相であるデルカッセが當時北京や東京から、何ら正確な情報をえてゐなかつたといふことは、當時のフランスが極東に於ていかに外交情報の設備を缺いてゐたかを暴露したものである。私はパリーへ來てこの情勢をみて、自分が何にか言ひすぎてはならないと思つて、何人とも出逢はないようにした。そして匆々にウインへ向けて出發してしまつた。

パリーでは、私はロスチャイルド家の長老であるアルフォンソ男爵としばしば會見した。彼はこの時すでに七十歳の老人であつた。しかし政治的にも一般的にも識見の卓越した人物であつた。私は彼れを尊敬してゐたので親密に交はつてゐた。彼れはナポレオン三世の親友であつて、第二帝國時代の勢力家は何れも彼れの友人であつた。彼れは共和政治の下にゐても別に不快を感じてゐる氣色もなか

つた。しかし心の中では帝制を讃美してゐた。彼れは見聞の廣い讀書家であつた。

ロスチャイルド一家の中でも彼れは傑出した人物であつた。その兄弟や、從兄弟や、子供や甥たちはいづれも善良な、社交的な人々ではあつたが、格別に卓越した人物は見當らなかつた。尙ほ年少な者のうちには將來を期待される人物もおそらく多かつたことであらうが、それ等は當時まだ表面にあらはれてはゐなかつた。老男爵の息子エドワードも非常に親愛すべき青年であつた。しかし事務的才幹において父の後繼者たりうるかどうか疑問であつた。

アルフォンソ男爵は、よく話題を極東の事情に向けた。しかし私はいつもこれを避けるようにしてゐた。彼はまたしばしば次のやうなことを言つた。

『近頃ロシアの宮廷に不思議な神秘說が行はれてゐるといふ風說を聞くが、それは甚はだ憂ふべき徵候である。一たい一國の統治者の宮廷に不思議な神秘說が流行したり、奇怪な似而非聖人や、似而非行者などが跋扈することは、必らずその國に大事變がおこる前兆であることは歷史の示すところである』

彼れはさう言つて歷史上の事實によつてこれを證明した色々な文獻を私に貸してくれたりした。或るとき私は『なぜ貴下は幾度も反覆してその話をするのか』――と質問した。すると彼れは私に答へて次ぎのやうに言つた。

『近頃ロシアの皇室についてフランスで奇妙な風說が行はれてゐる。それはフランスの一醫師フイリップ（リオン生れの者）といふ人物がロシアの兩陛下や一部の太公及び太公妃たちの信用をえて。これ等の人々にたいし大きな勢力をもつてゐると言ふことである』

それから更に男爵はいろいろ巷說として傳はるものを擧げた末につけ加へた。

『この風說もおそらくすべての風說のやうに誇張されたものには相違あるまいが、この似而非醫師フイリップがロシアの兩陛下に近づき、兩陛下が彼れを聖人扱ひして尊敬され、また彼れが兩陛下の心の中に何等かの勢力をもつてゐることは事實らしい』

我々が尊敬する皇室について、遠いフランスでさへこんな忌はしい風說が盛んに傳へられてゐるのを知つては、ロシア人として悲歎しないではゐられなかつた。フイリップのことは、私はペテルブルグでもいろいろ聞きおよんだことがある。だからこゝで極く簡單にその正確なもの――或は正確に近いと思はれるものを記述しておく。

妖醫フイリップ

フイリップは何處でも正式な敎育をうけた人物ではない。彼れは、初めフランスのリオン市附近にささやかな生活をしてゐた。ところが、その娘が近所の名もない醫師に嫁した時分から、いろいろな魔

術的な方法で病人を治療しはじめた。すると、往々こんな場合にあるやうに彼れの治療が奇蹟的に成功することがあつたり、また彼れの豫言が的中することがあつたりした。彼れをよく知る者は、彼れはなかなか才智にたけた人物であつて、また意思の弱いものや神經衰弱患者などには不思議な神秘力をもつてゐると言つた。しかし、彼れの治療も豫言も常に的中するといふわけでないので、彼れに對して詐欺の告訴をする者も少なくなかつた。そこで警察は彼れに治療することを禁じたりまた告發したりしたこともあつた。それでも彼れは巧みに自分の信者（多くは祖國主義者の中にあつた）を結合して講社のやうなものを作りあげた。當時ロシア駐在武官としてバリーにゐた參謀大佐ムラヴィョフ・アムルスキーもその信者の一人であつた。彼れは極端な變態的人物であつて、非常に共和政治を憎んだ。そこで何か事を構へてフランスとの間に事端を惹き起さうと虛實さまざまな情報を送つて、兩國の國交を惡化することに努めた。かういふ厄介な人物であつたので、私などは最も彼れを警戒した一人であつた。このムラヴィョフ一派の者は、『フイリップは人間の子ではなく、天から降臨した者であるから、或る時がくればまた昇天するのだ』――と言ひふらしてゐた。このフイリップとバリーで知り合ひになり、彼れの奇怪な言行に眩惑されて、ロシアへ土產話としたのが、ピョトル・ニコラエヴィチ太公妃（モンテ・ネグロの第一王女）か、レイフテンベルグ公妃（モンテ・ネグロの第二王女）かであつた。あゝ、この黑山國（モンテ・ネグロ）の王女たちはたつた二人の取るに足らぬ女性であつたが、それがロシアの皇室に禍ひしたことは如何に大きかつたであらう……。この女性たちの醜劣な言行を書き立てたならば、どんな大冊な書物になるか知れない。ロシアの人達は、永くこの二人の女性を忘れぬであらう。そして呪詛することであらう。

二人の黑山國王女

この二人の女性は、共にモンテ・ネグロ王ニコライの娘であつて、幼ない頃からスモリヌイ女學院に托して教育されたのである。彼女等が卒業して學校をでた時は、てうどアレクサンドル三世帝がドイツとの古い傳統的協約を打ち切つて、しかもフランスとの同盟はまだ結ばれない頃であつた。或る日のニコライ王招宴の席で、アレクサンドル三世帝が、『我が唯一の友であるニコライ王の健康を祝す』――といふ有名な乾杯の辭を述べたのもこの頃のことである。アレクサンドル三世がこの言葉を發したのは、それが必らずしもニコライ王を親愛する意味からばかりではない。廣く世界に向つて『我は同盟國をもたず、またこれを有つを必要としない』――といふ示威の意を表するためであつたことは言ふまでもない。しかしかく呼びかけられたニコライ王が、この好機を逸せず、かねて信賴する大國の君主の好意を迎へようと熱心に努力したのは寧ろ當然のことであつた。またアレクサンドル三世帝としては、南部スラブ民族中、常にロシアに敬意を表して來た、そして非常に武士氣質に富んでゐる

モンテ・ネグロ人の君主であるニコライ王にたいして、特殊の親愛を感じてゐたことも自然であつた。こんな時代に露都の學校を卒業した小國の二王女にたいして陛下が愛憐の情をもつたのも自然の成行きであつた。また陛下が愛憐の情をもつといふ一事で、ロシアの太公中にこの王女たちを娶つてもよいと希望する者が出て來たのも自然の成行きであつた。

その頃、いろいろな太公の數は群羊のやうに殖えてゐた。そこでまづ第一に名乘り出たのがニコライ・ニコラエヴィチ太公（これは今のニコライ・ニコラエヴィチ太公の父君で露土戰爭に總司令官となつた人）の末子ピョトル・ニコラエヴィチ太公であつた。これは黑山國の第一王女を娶つた。そして、第二王女はレイフテンベルグ公ユーリーの夫人となつた。これで黑山國の王女たち二人の身も定まり、アレクサンドル三世帝も彼女たちの父にたいする好意を果したわけである。もし帝の治世が尙ほ永く續いたならば、何ごとも起らなかつたであらう。が、幾許もなくアレクサンドル三世帝は死んで、ニコライ二世帝の治世となつた。そして、ヘッセン・ダルムシュタットの公女アリサを皇后として迎へることになつたので事態はやゝ面倒になつた。

皇太后や多くの太公妃たちが、心を盡して若い新皇后を歡迎したのは言ふまでもない。しかし『自分は大ロシアの皇后である』――といふ尊大な氣を多分にもつてゐた皇后には、それも尙ほ物足らぬところがあつたかも知れぬ。その邊にぬけ目のない二人の黑山國王女たち（今ではロシアの太公妃であり、公妃である）新皇后の意を迎へることに日も尙ほ足らないといふ風であつた。

或るとき皇后は胃腸を損して、病床についたことがあつた。機會をつかむことに寸時も注意を怠らなかつた二人の王女は、直ちに宮中に伺候して、侍女たちを押しのけて皇后の左右に近侍し、一切のことを自身に引き受けて忠實に看護をつくした。遠く他國に嫁したばかりで周圍の人々に親しみをもたぬ皇后は心から彼女等の行屆いた介抱を感謝した。それ以來彼女たちは皇后の側を去ることのない親友となり、次第に宮中で勢力をえるやうになつた。それでも皇帝が、皇太后や老臣たちの手前を憚つて、何ごとも控へ目にしてゐた間はまだ無事であつた。しかし月日の經過すると共に陛下の心にもだんだん緩みが出て、意のまゝに行動するやうになつてからは、彼女等の勢力は皇后を通して漸く外部にも現はれるやうになつて來た。

彼女等の慾望はまづ金錢を攫まうとする方面にあらはれて來たので、彼女等と私との間に小衝突が起つた。或るときレイフテンベルグ公妃である黑山國第二王女は私に暮し向きの不如意を訴へて助力を求めた。尤もそのことは皇后を通して陛下に請願して內諾をうけてゐると附け加へた。それは今後レイフテンベルグ公家の歲費を十五萬ルーブル增額することであつた。私は勿論これに承諾を與へなかつた。この問題はその後勅令によつて宮內省の費用を年額十五萬ルーブル增額し、それを宮內省からレイフテンベルグ家に支出することになつて結末がついた。

一方ピョトル・ニコラエヴィチ太公家では、執事が投機に手を出して大穴を明けたといふので、私に中央銀行から貸出し方を取計ふやうに依頼して來た。私はそれは銀行の制度が許さないと言つて拒絶した。するとこれも勅令で宮内省から御料地の收入を割いて援助されることになつて結末がついた。しかし太公妃である黑山國第一王女が私の無愛想を許すことが出來なかつたのは勿論である。

黑山國王の無心

しかし、彼女等の心情には同情すべき點がないではなかつた。彼女等は父王にたいしては非常な孝女であつた。自分たちが幸ひにして大ロシアの皇族の妃となつたので小國の君主で財政的に非常な苦痛を感じてゐる父王に援助する義務を痛感してゐた。彼女等は百方努力してその義務を果すことを怠らなかつた。そこで最近に書き卸ろされた狂言は次の如きものである。

『モンテ・ネグロ國が、君民ともにロシアの味方であることは今さら何の疑もない事實である。將來ロシアとドイツの間に戰爭の起つた場合にこの國がロシアの側に立つことも既定の事實である。モンテ・ネグロ人が勇敢であつて、役に立つ軍人であることは、何人も首肯する所である。しかし機を逸せずにロシアに役立たせるには、一定數の常備軍を建設する必要がある。そこで常備軍建設の費用をロシアから援助して貰ひたい』

陛下は彼等の希望を容れて、毎年一定額を支出することを命令した。今日陸軍省の豫算中にこの費目をおいて、毎年百萬ルーブル以上を同國に支出することになつてゐる。しかしそれが渡されてから如何に費されるかは、ロシアでは何人も知らないのである。ニコライ王は時々ロシア皇帝に書を送つて、常備軍の編制に努力してゐることや、ドイツ皇帝の言動を批判し、ひいてはロシアとドイツ間の戰爭の遂に免かれない情勢にあることを指摘した。そして自分の報恩の期が近いことを述べて、陛下の意を迎へることに努めてゐた。しかし人間の食慾は次第に進むものである。一九〇一年であつたか二年であつたか、ニコライ王は突然ペテルブルグへやつて來た。すると間もなく黑山國第二王女が私に面會を求めて、彼女の父が陛下に援助を請ふて、陛下も承諾したから、やがて陛下から私に何等かの命令があるであらう。その時には宜しく頼む――と言ふのであつた。

私が『一體その援助とはどういふ種類のものですか？』と問ふたのに對して彼女は『それは父がトルコから毎年ロシアに支拂ふ年額約三百萬ルーブルの償金を父に讓つて頂きたいと言ふことです。陛下もすでに内諾されたので、父は感謝して歸國した』――と言ふのであつた。私は『それは一寸行はれ難いことだと思ふ』――と答へておいた。

その直後、私が陛下に謁見したとき陛下は次のやうに言つた。

『最近モンテ・ネグロのニコライ王がやつて來てロシアからモンテ・ネグロに財政上の援助をして貰

ひたいといふ話があつた。僕はいかに普通の親交以上に密接な關係のある國とはいへ、外國である所のモンテ・ネグロに、ロシア國民の納める金で援助することは行はれ難いと言つた。さうするとニコライ王は彼れ自身もそんな國民の納める金額のうちから援助をうけることは出來がたいと思ふからロシアの金でなく他國の金で補助して貰ひたい。つまりトルコから毎年ロシアに支拂ふ償金を自分の方に廻はして貰ひたいと言ふことである』

私はこれを聽いて到底男子には思ひつくことも出來ない馬鹿々々しい提議であるのに驚ろいた。そこで陛下に答へた。

『モンテ・ネグロ王の要求する所は根本的に誤つてゐると思ひます。ロシアがトルコから受け取る償金が國民の負擔外のものであると考へられるのは如何にも不審であります。トルコがロシアに償金を支拂ふのは、さきに兩國が戰爭したときにロシア國民が多くの軍費を負擔したその幾分を賠償する意味であります。したがつてこれが國民の負擔でないといふ理由はありません。のみならずトルコからの償金はすでに法律によつて歳入に計上してあります。その使途については會計檢査院の承認をうける必要があります。それが突然豫算面から消滅すれば物議を招きます。尚ほ歳入の中からそれを取り去れば、それだけの不足を生じ、この不足はさらに國民の負擔を增して補塡しなければなりません。要するに豫算に累を及ぼす問題であります。モンテ・ネグロ王の今度の要求は、單に金額の點からいつても過大であると存じます』

すると陛下は言つた。

『どうも仕方がない……。僕はもう承諾してしまつたのだから……』

これはいつも陛下が私の意見を抑へて自分の意を通さうとする時に用ひられる常套語である。しかしこの場合は、これで引下がるには問題があまりに重大であるので、私は更に押し返して言つた。

『すでにモンテ・ネグロ王自身もロシアの金で援助されるのを不穩當だと認めて、ロシアの金でないトルコの償金の移讓を請求されたのであります。しかしそれが王の誤解であつて、トルコの償金もやはりロシア國民の金であることが明らかになればこの要求も自然と根據を失ふことになると思ひます』

これには陛下も同意して、ニコライ王に交渉して善後策を講ずることを私と外務大臣に委托された。私は外務大臣と協議して色々ニコライ王に交渉したが、結局陸軍省の豫算に幾十萬ルーブルかを增して王への補助を增額する他はなかつた。その後、私が黑山國第二王女に逢つたら、彼女は憤然として

『今度のことは決して忘れはしない……。おぼえてゐるがいゝ』——と言つた。

それ以來この二人の女性が如何に誇張して私を皇后の前に中傷したかは想像にあまりある。

未來のセルビヤ國王

この二人の王女の姉はピョトル・カラ・ゲオルギエヴィチ公（現在のセルビヤ王で當時は單なる亡命王族であつた）の夫人となつてゐた。その關係から、彼女等は當時のセルビヤ國王アレクサンドルにたいし絶えず何らかの陰謀をめぐらしてゐるといふ風説があつた。現に或る年、ニコライ二世帝がクリミヤのヤルタに滯在したとき、當時セルビヤ國王であつたアレクサンドル王が、皇帝を訪問したいと許しを求めてきた。これにたいし左程の理由もなく拒絶されたことがある。これはたしかに彼女等の策動の結果だと言はれてゐる。

このピョトル公には私も訪問をうけたことがある。擧措應對の調つた、人柄のよい紳士であつた。ただその時にはいかにも貧相であつて、これが數年後に一國の王となる人とは夢想もされなかつた。尤もその時の要件があまり彼れをして快活な態度を持たせる性質のものでなかつたからかも知れない。彼れの要求は、ルーマニヤ國内に有つてゐる土地を擔保に金融して貰ひたいといふのであつた。それは國庫からはもちろん中央銀行からも貸出しえない事情にあつたので、私としては拒絶する他はなかつた。しかし陛下の特別の好意で他の銀行から融通することになつた。

その後セルビヤのアレクサンドル王が暗殺されたので、この人は王族の長者として王位に即いたのであつた。彼れは亡命王族としてヨーロッパ各地、――特にフランスに永く住んで自然に學ぶところがあつたものと見へ、立憲國の君主として決して非難する點のない良君主となつた。

皇室の神秘主義

話題はまたフイリップの上に戻る。彼れは二人の黒山國王女を經て、最初はニコライ・ニコラエヴィチ太公系の諸太公家に、次ぎにはそれを基礎として兩陛下の寵遇をうける樣になつた。それ以來時々ロシアへやつて來て、數ケ月間秘密に宮中に滯在して兩陛下に接近し、色々と道話や神秘的治療を行つたりしてゐた。その時には太公や太公妃の數人が陪席するのが常であつた。彼れは或る時ピョトル・ニコラエヴィチ太公邸で、クロンシュタットの老僧ヨワンと會見したことがある。たしかその席でサロワの老僧セラフィムに聖者の尊號を陛下から贈られるよう盡力する相談をまとめたらしい。それについてポベドノスツェフは次のやうな話をしたことがあつた。

『或る日僕は兩陛下から突然陪食によばれた。それが如何にも突然に感ぜられたのは、僕は現帝や先帝の師傅であつたにもかゝはらず、近ごろ甚はだ疎遠にされてゐたからである。お召をうけたのは唯だ僕一人であつた。僕は兩陛下と三人きりで食卓についたが、その時陛下からサロワの老僧セラフィムに最近のセラフィム祭日に聖者の尊號を贈る意のある話があつて、その勅旨の起草方を依頼

された』

その時ポベドノスツェフは、聖者號をあたへることは宗務上では非常に重大な問題であつて、宗務廳でその人物の性格、經歷、生活、行狀から衆人歸依の狀態までを詳細に調査した上、それが聖者として一點の疑ひもない時に、始めて決定すべきものであると述べた。すると側から皇后陛下が『だが、君主は萬能ではないか』――と口添へをした。この皇后の「君主萬能」論は私も色々な場合に幾度となく聞かされたものである。しかし皇帝は彼の言ふところに同意して、尊號のことは何の決定するところもなく彼れはそのまゝ宮中から引きさがつた。するとその晩すぐに彼のところへ陛下の親書がとどいた。

『僕は聖者號を突如として與へるべきでないといふ君の意見に同感である。しかし來年のセラフィム祭の當日には必らずセラフィム僧正に聖者號をあたへるつもりである』

この問題は、實際そのとほりに行はれた。

兩陛下は或るとき聖僧の遺骸開現の祭典に臨んだ。その際にいろいろ不思議な奇蹟が傳へられてゐる。皇后が或る晩入浴してゐた際に『ロシアは四人の皇女の後に皇太子をもつであらう』――といふ聖僧の暗示をあたへられたといふのもこの時のことであつた。そしてこれが實現したので、兩陛下の聖僧にたいする信仰は動かすことの出來ないものとなつてしまつた。そして陛下の書齋にはセラフィム僧正の大肖像が掲げられるやうになつた。宗務廳の檢事總長オボレンスキー侯が或る日陛下に謁見した際、近ごろ迷信があまりに勢ひをえて來たことを奏上した。陛下は次のやうに斷言した。

『だがセラフィム僧正の聖行や奇蹟については僕は動かすことの出來ない證據をもつてゐるから、何人も僕の信仰を搖がすことは出來ない』

兩陛下はサロワに數日を過ごしたことがある。この滯在中に陛下に接近してその寵遇をうけるやうになつた人物が二人あつた。一人は內務大臣プレヴェで、他の一人はその地方の知事ラウニツである。不思議なことはこの二人とも後に暗殺されて非業の死をとげた。私は暗殺といふやうな殘酷な所業を極端に排斥する。

しかしこの二人の死については多少の感慨なきをえないのを悲しむ。この二人はあまりに無主義・無節操であつた。あまりに權勢にあこがれて權謀を弄しすぎた人々であつた。

「黑百人組」運動の勃興

またこの頃から陛下の寵遇をうけた人物にプチャチン大佐があつた。彼れは陛下の內命をうけて、宮廷と例の「黑百人組」といふ自稱愛國黨（これはプリシュケヴィチ、グリングムート、ユゼフォヴィチなどの政治ゴロの團體である）との間に秘密傳令の任に當つてゐた。また熱狂的なセラフィム信者であ

つた。彼れは日露戰役の最中、よく人に向つて、

『世の中には無理解な人間も多いものである。しかも相當に教養もあり身分もある人物でありながら、この戰爭でロシアが負けるなどいふ恐れを抱いてゐる者があるのは驚ろくべきことだ。彼等は媾和談判は東京で開かれるといふセラフィム僧正の豫言を知らないのだ』

と放言して得意になつてゐたさうである。彼れは對馬海戰のあとでもまだ平氣で同じやうなことを言ひ廻つてゐた。

註・「黑百人組」の首領プリシュケヴィチは後にラスプーチン殺しの首謀者となつた。――（監修者）

私は今までにロシアで革命や無政府狀態をひき起したことに大きな役割をもつ「黑百人組」の運動については後段で記述するであらう。然しこゝでちよつと述べておきたいのは、この黨派は將來ロシアに無政府狀態を招來することに更に大きな役割を持つであらうことである。何故ならば彼等の一味は陛下が心の中では深く愛撫してゐた徒輩であるし、また皇后（あゝ、ロシアの不幸であるところの皇后）に至つては一圖に彼等をたよりとしてゐるからである。彼等はいかにも愛國の至誠に燃えてゐるやうに叫んでゐる。その點は別に非議すべきではない。しかし彼等の愛國心は何としてもあまりに自然發生的で、たゞたゞ狂熱の奔流するに委せたものである。そこには少しも理智と高潔な品性をもつて調和されたところがない。その指導者の多くは政界の無賴漢である。その思想性情ともに醜劣で、すこしも眞面目な政治思想をもたない。その一切の努力は低劣な慾望を煽動することにのみ向けられたものであつた。この一派は、力づよい「双頭の鷲」の羽翼の下に庇護されてゐる時は、その威力を背景として策動し、おそろしい暴虐を行ひ、怖るべき脅威を示すことができるが、實際の結果をみれば、その行動はすべて消極的・破壞的ですこしも積極的・建設的なものはない。この一派は虛僞と中傷と欺瞞によつて養はれた、粗暴な、虛無的な愛國心の表現たるにすぎない。訓練のない・怯懦な・絶望的な徒黨であつて、その內容には決して勇敢な・高遠な・建設的氣分はない。それは烏合の群盲と政界の無賴漢を頭目とする集團である。そして、これに陰然たる助勢をするのは、宮廷緣故の連中や教養の足りない貴族等である。彼等はまた『我々が民衆のために存在するのではなくて、民衆が我々のために存在するのである』――といふ標語を第一義として宮廷の食卓の殘滓（と言つても數百萬ルーブルに値ひする）に寄生する貴族中の退化的分子である。氣の毒な皇帝はかういふ徒黨に信賴してロシアの皇室の威嚴を復興することが出來るものと妄信してゐるのである。あゝ、薄倖な皇帝陛下！　陛下をしてこの多難の道を辿らせるのは、皇后の勢力があまりにも彼れの上に加はつた結果に他ならない。

私がこゝでこんな感想を述べるのは、最近（一九〇七年六月三日）に陛下が「ロシア國民同盟」の會頭ドゥブロヴィンに送つた醜陋きはまる電報を見て、その結果のいかに怖るべきかを感じたためである。この電報と、これに關聯する第二期國會解散の詔勅とは、ともに我が獨裁君主の政治思想がいか

に變態的・不具的であり、その精神がいかに病的であるかを暴露したものである。

政治探偵長ラチコフスキー

話はまたフイリップの上にもどる。黒山國王女の二人のうちのどちらかが、バリーに滯在してゐたとき、當時同地に滯在して我が秘密警察の仕事を管掌してゐたラチコフスキーを呼んで、フイリップのために醫師免狀の下附と開業許可をフランス政府に交渉することを依頼した。ラチコフスキーは王女の考への甚はだ淺墓なことを指摘し、フイリップといふ人物のとるに足らぬことを嘲笑した。そこで王女は心中非常に怒つたので、ラチコフスキーは圖らずも宮中に大敵をこしらへてしまつた。しかし剛直で眞面目なシュピャギンが内務大臣であつた間は、彼れの地位にも異狀はなかつた。ところがシュピャギンが暗殺されてプレヴェが後任者となると、ラチコフスキーは直ちに免職されてしまつた。

ニコライ太公の迷信

フイリップは、本國のフランスでは遂に醫師の免狀をうけることが出來なかつた。そこで、ロシアでクロパトキンが陸軍大臣であつた時代に、制規外の取計らひで陸軍醫學校から醫學博士の稱號を與へられ、同時に勅任官に任ぜられた。その後フイリップは、晝夜となくますます頻繁に宮中へ出入するやうになつた。皇后は特に彼れを信仰すること深く、したがつて彼れは皇后を通して皇帝をも動かす勢力をもつやうになつた。

その後、フイリップは幾年ならずして、日本との戰爭が終らないうちに死んだ。彼れを崇拜する一團の人々は、彼れは天からこの地上に派遣された使命を完ふしたから天に歸つたのだと言ひふらした。彼れをもつとも深く信仰したのはニコライ・ニコラエヴィチ太公である。この人は非常な迷信家で、常人をしてその精神狀態を疑はしめるほどであつた。

私が大藏大臣であつた時代には、祝祭日には必らず名刺を送られた。その後、私が陛下の不興をうけて大臣委員會の議長に敬遠された時代に、彼れの弟であるピョトル太公の家で何か私の妻の身上について惡評を捏造して嘲笑したといふことを聞いた。總じてロシアばかりでなく廣く各國を見渡しても政治家のうちで私ほどいろいろな惡い風說を立てられた者は少かつたであらう。しかしそれが私自身に關するかぎり、私は、從來も今日もそれを氣に止めたこともない。が、それが妻の一身に關してであつて見れば捨ておくことは出來ない。そこで舊來の好誼もあることだから、まづニコライ・ニコラエヴィチ太公を訪問して、彼れの弟君の家で私の妻に關してこれ〳〵の虛僞の風說を傳へてゐることを私が聞き込んだまゝに話し、注意を與へられんことを請ふた。太公は『そんなことについて何も知るところはないが、何か聞くことがあつたら必らず注意を與へる』と約束した。それから餘談に移り、

いろいろ話してゐるうちに、太公は陛下のことについて、言葉を改めて私に言つた。

『ねえセルゲイ・ユリエヴィチ！　いつたい皇帝陛下は人間であるかどうか、君の思ふところをはつきり聽かしてくれたまへ』

私はこれに對して次のやうに答へた。

『陛下は私の君主であつて、私は終身その忠僕であります。それは神や自然から我々に奉戴すべく與へられた獨裁の君主であることには一點の疑ひもありません。しかしあの方もまた一般の人間とおなじくそれぞれの性格をもつ一個の人間であります』

すると太公はそれを否定するやうに言つた。

『いや、ところが僕は皇帝を人間とは考へないのだ。それは神でもなければ人でもない、或る中間的な存在だと思つてゐる』

私は答へやうがないので、間もなく暇を告げて歸つた。一たいニコライ・ニコラエヴィチ太公は多くの缺點をもつた人であつた。私はこの人を有爲の材とは思はない。しかし眞面目で、別に惡意のある人ではない。皇帝にたいしては盲目的に從順であるし、軍事については相當の才能を有つ人だと考へてゐる。

彼れは今日まで可なり多くロシアに禍ひしたし、將來も同じであらう。しかし全然國のためになつたことが無いでもない。私が日本との媾和談判のために渡米する途次バリーに在つたころ、我が皇帝とウイルヘルム二世帝の間に、全然外務大臣を出しぬいて、ビオルク島で條約が締結された。それはロシアのために將來おそるべき害毒をもたらすやうな秘密條約である。太公が私を助けてこれを破棄することに努力したことは彼れの功勞中のもつとも顯著なものであらう。ウイルヘルム二世帝は最初我々を日本との戰爭に引き入れて、ロシアを大不幸の淵に突き落しておきながら、いま我々がポーツマスで深傷ながらも漸やく死地から脫しようとするのを見て、さらに我々の頸に繩を捲きつけようとしたのである。

私に密偵をつける

私がバリーに滯在中のことである。或る日ロシア警察の密偵長であるマヌイロフが來訪して言つた。

『あなたを絶えず尾行してゐる探偵は私の部下の者でもなく、またそのことは私の關知するところでもないから、どうか怒らないで頂きたい』

すると間もなくフランスの警察からも私に尾行してゐるロシアの探偵のあることを內報してきた。それがプレヴェの指圖であることはマヌイロフも暗に言明してゐた。そこで、私は歸國すると早速プレヴェに逢つて私の護衛を心配してくれた彼の親切を謝した。すると彼れは、少しもそんなことを知らな

いやうに辯解をしてゐた。しかし彼れが私に對して大きな牙をとがらしてゐたことは當然である。それまで私は常に彼れを危險視してゐた。それを秘したことはない。そのことは公私の文書のうちに書かれてあるから、内務大臣となつた時は隨分多くの私の彼れに對する批評を見たことであらう。したがつて彼れが私に敵意を燃やしたことは當然である。

陛下は極東の危機を知らず

私のバリー滯在がすでに餘日のない頃であつた。ダルムシュタットから、宮内大臣フレデリックス男爵が來訪して同地に在る陛下は非常に元氣で愉快な日を送つてゐると話した。私が當時風雲急になつてゐた日本との交渉はどんな程度に進行したであらうかと問ふたのに對して彼れは次のやうに答へた。

『ダルムシュタットには外務大臣ラムスドルフ伯も隨行してゐるが、極東問題に關する一切の問題は彼れを通さずに陛下と極東統監アレクセエフとの間で處理されてゐるから何人もその詳細を知らない』

私が『それは甚はだ危險ではないか』――と言ふと、彼れはかう答へた。

『僕もさう思つたので陛下へもその意味を言上し、またラムスドルフ伯にも注意を促がした。その結果、伯は陛下に謁見して、自分の職責に關して奏請する所があつた。その後は極東問題に關する電報の寫しを彼れに交付することになりはしたが、伯の手に入るものは電報の全部ではないやうである』

その後、ラムスドルフ伯がその當時のことについて私に話つたところを要約する。

『陛下は、極東問題については一切アレクセエフに一任した。アレクセエフが全責任を負ふて一切の處理に任じてゐる。しかし今後は陛下と彼れとの往復電報は外務大臣にも廻付すると言つた。

『陛下はまた、最近アレクセエフから、日本との談判は、日本が甚はだ傲慢な態度をとつてロシアの提議に從はうとしないから、結局武力を用ひなければ解決の見込みがないと言つて來てゐる。しかし僕は戰爭を欲しない。だからよくその意を明らかにした回答案を作れと命じた。そこで今度だけは一切開戰を誘起するやうな手段を避ける訓令をしたが、前途は全く不明である。

『陛下が戰爭を欲しないといふことが、その眞意であることは疑ひない。しかも一方ベゾブラゾフ一派の冒險家の進言によつて、陛下が「ロシアは相手に向つて希望條件を强要しうるのである。日支兩國がロシアの要求に服從を拒む態度を示すのは、我々が彼等に對してあまりに遠慮勝ちの態度を示したためである。彼等をしてロシアに屈服して命令を聽かせる手段は威壓のほかはない。彼等にたいしては讓歩は一切禁物である。もし萬一の場合、讓歩することがあるとしても、それが彼等の主張を容れた意味であつてはならない。それは一にロシア皇帝陛下の恩惠であることを彼等に

感銘させねばならない」といふことを確信してゐるのは事實である。

『要するに陛下の意中は「我々は戰爭を欲しない。そして彼等も戰爭を敢へてするものでない。つまり戰爭はありえない」といふのである』

陛下がダルムシュタットに滯在中に、ウイルヘルム帝は『日本は猛烈に開戰の準備をしてゐる』といふ情報を接受したと、陛下に通報した。陛下はこれに對して極めて平然として回答した。

『戰爭はありえない。何故なれば、僕が戰爭を欲しないから――』

その頃ドイツ外務省は日露開戰の避けがたい事情について極東から非常に戒心すべき情報をえた。ベルリンへ到達した情報は次ぎの如くである。

『日本の開戰準備は非常な熱度をもつて進行中である。ロシアが尙は從來の態度を持續するなら、日本は開戰のほかに道がないと決心してゐる。日本が遂に戰意を決した原因の一は、今まで唯一な、しかし有力な非戰論者であつたウイッテが辭職を餘儀なくされたためだと思はれる』

西境の戰備に熱中す

實際この當時のロシアは、戰爭準備といふ點では極東よりも寧ろ西部國境の方面のために忙殺されてゐたのである。西部方面では日々今にも何事か起るであらうといふ豫感に惱まされ、早くも西部戰線における統帥者の人選が緊急問題とされてゐた。さうして、對ドイツ軍の總司令にニコライ・ニコラエヴィチ太公、對オースタリー軍の總司令に陸軍大臣クロパトキン將軍が任命されるであらうといふことは、既定の事實とされてゐた。これ等の太公や將軍の間には、この戰爭問題についてそろそろ意見の衝突をみるといふ事態を生じてゐた。例へば、ニコライ太公が、戰爭準備の一として某々鐵道に支線を急設するのを必要だとすれば、現陸軍大臣クロパトキン將軍の同意をえなければならない。そこで將軍がすべてに對して同意を與へれば何事もないが、多くの場合に太公と將軍の意見は一致しなかつた。そのために議論が起つた。私は一再ならずクロパトキン將軍から太公の軍事的才能を否定するやうな意見を聞かされた。ニコライ・ニコラエヴィチ太公を評して强情な突飛な、さうして理智の缺けた人物だと言つたクロパトキンに同意しなければならぬのを遺憾とする。

要するに我々は西部國境で開戰の避けがたいのを信ずるあまり、極東にたいしては何ら言ふに足るほどの戰爭準備をしなかつたことは事實である。

駐日公使ローゼン男

その當時、日本に駐在してゐたロシア公使はローゼン男爵であつた。彼れは後に私が媾和談判に渡米した頃は駐米大使であつて、私の次席全權となつた人である。ローゼン男は正直な思慮のある人物

であつた。しかしそのやり方は多少ドイツ臭味を帶びてゐた。彼はしばしば情報を送つて、日本の輿論が沸騰してゐる情況を知らせた。そして鴨綠江におけるロシアの二重政策を放棄して、朝鮮に關しては速かに日本と妥協することを勸告した。しかし彼れは滿洲だけはどうしてもロシアの手に收めねばならぬと言つて、ドイツ人らしい頑强さをもつてこれを主張した。

しかし、滿洲を領有することは實際には出來さうにもなかつた。もし東支鐵道とその後欺瞞的に占領した旅順港を含む關東州をロシアの手に收め得るならば、極東におけるロシアの政策は大成功と認めなければならぬ。ロシアが滿洲を領有するといへば、日本は勿論、アメリカもイギリスも、また第一に支那にしても、これを承認する筈がない。したがつて滿洲は領有しよう、戰爭は避けようと言ふほど矛盾した議論はない。かういふ意見を持つてゐるローゼン男は、日本とのこの難局を解決するためには最も不適當な人物と言はねばならぬ。いはんやその人が、たゞ狡智一方ですこしも政治家的氣魄と素質を有たないアレクセエフの指導の下にあつては誠に心細いことである。

犧牲者ラムスドルフ伯

陛下の周圍にある寄生虫どもは、政治上の失敗ある毎に、その一味の狂犬どもを嗾しかける目標として犧牲者をきめておくのを必要とする。十月十七日の改革以後に、その犧牲とされたのは私であつた。そして陛下の默認のもとに嗾しかけられた群犬は、盛んに私に吠えついた。しかし、私はこの群犬を蹴ちらかす自信をもつてゐる。また歷史は正しい批判を下すであらうと信じてゐる。

日露戰爭はロシアにとつて實に無意義な、愚劣な、それ故にきはめて不幸な結果に終つた。例の寄生虫どもは、そろそろラムスドルフ伯を犧牲の羊にするために全力を盡した。陛下は勿論これに加擔はしなかつたらうが、あの醜穢な宮廷内の寄生虫どものすることを、見てみぬ振りをしてゐたことはたしかである。非常に遺憾なことではあるが、これが王者としての陛下の性格の一端である。父アレクサンドル三世帝はどんな場合にもこんな行爲はしなかつたであらう。王者の資質をもたない君主は國家に幸福を與へえない。アレクサンドル三世帝は極めて單純な人であつたが王者の資質を具へてゐた。それ故にロシアに十三年間の安寧をあたへた。ウイルヘルム一世帝はアレクサンドル三世とくらべて別に賢明であつた譯ではないが、王者の資質は充分にそなへてゐた。それ故に大帝の名をえたのである。

陰險と虛僞、默々として諾否を明言しえない習性、公約を遂行する勇氣の缺如、怯懦な樂天主義、等はいづれも君主のためには悲しむべき性格である。

後世何人かこの記述を讀む人のあることを思へば、私はこゝでラムスドルフ伯について、一言述べ

る義務を感ずるのである。伯は高潔な人格者であつた。才能もあり、勤勉である。四十年間外務省に勤續していつも時の大臣の片腕となつた事務練達の士であつた。彼れは偉人型の傑士ではなかつた。しかし忠實な能吏であつた。その言動が誠實であり優雅であるために外交團の人々からも尊敬されてゐた。日露戰爭の第一歩をなした旅順占領とその當然の結果である東支鐵道支線の建設は彼れの先輩であり、當時の外務大臣であつたムラヴィヨフ伯の仕事であつた。ムラヴィヨフ伯は敢へて惡人といふほどの人物ではなかつたが、しかし決して賢明な政治家でなかつた。彼れはいはゞ淺慮の凡人に過ぎない。しかし兩陛下、特に皇后は彼れの輕妙卑俗な諧謔をよろこんで寵遇した。彼れが極東事件を惹き起したのも決して深謀遠慮の結果ではない。たゞ陛下の意思に迎合したに過ぎないのである。陛下が極東問題にたいして意外に强硬な態度を取つたのは、周圍の惡人や奸臣どもの誘惑によること勿論である。しかしこの誘惑をしりぞけ得なかつたのは、若さのためであらうし、また日本人に對する憎惡からでもあらう。この憎惡はまだ陛下が皇太子時代に日本内地を巡遊した際、狂暴な一人の日本人が彼れを要擊して負傷させ若き日の樂しい旅路の終末に一抹の暗影を投げた事實によるらしい。尙はその上に表面は温和な陛下の心中に燃えてゐた功名心の發露であつたことは、疑ひのない事實であらう。であるから、たとへ日本との戰爭は避けえたとしても、その場合には必らずトルコか、インド方面で事を起すことになつたであらう。ロシアはニコライ二世の治世において必らず流血の慘禍を免かれなかつたであらう。

戴冠式擧行後、陛下が外遊を終つて歸國したのは前外務大臣ロバノフ侯が死んで間もない頃であつた。トルコ領の小アジアに騷擾が起つた。當時トルコ駐在のロシア大使であつたネリドフはこの機を利用してトルコにロシアの勢力を伸ばす策を立て、危ふく露土間に戰爭をひき起さうとした。この問題について開かれた御前會議で、衆議は勢力伸張說に傾いたが、私は斷乎として反對した。しかし、陛下の意向はむしろ開戰說に傾いてゐたので、私の反對說は遂に葬られる危機に迫つた。幸ひに皇族中の長老ウラヂミル・アレクサンドロヴィチ太公と二代の皇帝につかへた老臣ボベドノスツェフの諫止が功を奏して事なきをえたのである。

外務大臣の職に就いた後のラムスドルフ伯はよく眞面目に、賢明に、平和政策を遂行した。極東問題については終始私と同意見であつた。ロシアが關東州を占領して以來、しだいに惡化した露支や日露の關係をよく緩和彌縫して無事をはかり、特に日本との關係では戰爭を避けることに努力した。しかし、彼れの勢力は尙ほ甚はだ微弱であつた。また陛下に對する態度も樞要な地位を占める大臣としては重味が缺けてゐた。日本との戰爭については彼れは終始一貫して私と同意見であつた。彼のいふ所は私のいふ所であるほどに一致してゐた。たゞ彼れは極めて微温的に言ひあらはし、私は斷乎として時には激越な句調を用ひてさへ論爭したといふ差があるのみである。結局陛下は、私が決して意を曲

げて陛下の意見に從はないと觀念した。そして私を大藏大臣の要職においては自分の意思遂行の邪魔であると考へるやうになつた。そこで私を最高の、しかし無用の閑職に敬遠した。が、ムラスドルフ伯に對しては、彼は反對を言明するが、それはどこまでも言明であつて決して終りまで自說を主張するのでなく、陛下の意圖の遂行を妨害するものでないと見て、そのまゝ外務大臣の椅子に留められたものと見るべきであらう。

日本との戰爭が非常な不幸に終結し、十月十七日の事態が發生した。そして遂に第一期國會の召集を見るに至つた。私はもはや政務を執ることの困難なのを察した。また寄生虫どもの手に弄されるのに堪えないと考へたので、遂に意を決して職を辭してしまつた。私の辭職が許可されると間もなくラムスドルフ伯も免職された。そこで、私は宮內大臣のフレデリックス男その他に伯の免職の理由をただした。これに對して彼等は甚はだ卑しい調子で『戰爭があんな狀態で終つて見ると誰れか罪人を出して國民に申譯をしなければならんからね……』と答へた。

やがて或る方面から群犬の吠聲がきこえて來た。何としても氣の毒なのは、人の善い品性の高いラムスドルフ伯である。もし彼れに失策があるとすれば、それは開戰に先だつて辭職しなかつたことである。この場合、彼れの進退が開戰を左右することは勿論ない。しかし、さうすれば色々な讒誣中傷のためにその名聲を傷つけられることは無かつたであらう。

大臣の辭職と君臣の道

君主の反省を求める手段として大臣の辭職がいかなる影響を有つであらうか？　これについては、私はニコライ二世の治世に八年間大臣として在職した間に、いろいろな矛盾した非難や攻擊を聞かされた。その二三の例を擧げて見よう。或る人は言つた。

『あの事件もあなたがもうすこし强硬に主張したなら、あんな始末にはなら無かつたと思ふが……』

私はこれに答へた。

『しかし仕方がないではないか。私の意見は用ひられなかつたのだから……』

彼れは押し返して言つた。

『そんな場合には、あなたは直ちに職を辭するのが當然ではないか。もし大臣がいつもさういふ態度を取るならば、陛下も反省して大臣たちの意見を尊重する樣になるに極まつてゐるではないか』

またこんなことを言ふ人もあつた。

『いま戰爭を目前に控へて、あなたが大藏大臣の要職を去るといふことは許さるべきでない。眞に愛國の誠意がある者は、そんな行動をすべきでない』

そこで私は答へた。

『そんなことを言つたつて仕方がない。私が去つたのでなく、私を追ひ出したのだから……』

するとまたその人は更に言つた。

『あなたを追ひ出したといふのは、それはあなたがあまり强硬に自說を主張して、激烈に論爭したからではないか。あなたさへもつと穩やかにして、陛下の意見に從順でありさへすれば、追ひ出される樣なことはありえない』

またこんなこともあつた。

『第一期國會が開かれるといふ間際になつて、あなたが大臣會議の職を投げ出すなどいふことは殆んど犯罪行爲ともいふべきではないか。あなたさへあの職に留まつてゐたら、事態は圓滿におさまつて、あんな色々な不祥事は起らなかつたであらう』

私はその人に答へた。

『だが私の意見が用ひられない以上、私はその職に留まることは出來ないではないか。また留まつたところで、なんの役にも立たない。結局は追ひ出されることになるではないか』

彼はさらに追究して言つた。

『追ひ出すかどうかは疑問ではないか。だがあなたは、非常に頑固に辭職を言ひ張つたさうだ。それでは陛下があなたに降參する他はない樣になる。それはあんまり亂暴ではないか』

また次のやうに言ふ人もあつた。

『あなたは會議のとき、陛下に對してあまり激烈な調子で議論される樣子だが、あれは甚はだよろしくない。それにあなたの議論はどうもあまり徹底してゐない。それだから陛下はあなたに同意しないで、他の道を取られるのだ』

これではどこに眞の道があるのだか判らない。まさに適從するところを知らずである。しかし、たつた一つ私がたしかに知つてゐることがある。それは、私が大藏大臣をやめた時のことである。退職に關する一切の手續が完了したので、側近の者が陛下の前に出て（皇后も同席であつたさうだ）その旨を言上すると、陛下はたゞ『ウフッ』と鼻で笑はれたといふ事である。

皇帝の伊國訪問事件

陛下がダルムシュタット滯在の頃、イタリー皇帝ヴィクトル・エムマヌエル陛下を訪問するといふ問題がおこつた。それは、陛下はこの時すでに各國の元首を訪問したが、イタリーだけが殘つてゐたからである。

ところが當時ロシアに漲つてゐた騷擾氣分――いはゆる地下的革命運動は、イタリーへ相當に反響してゐた。ロシアの官憲、特にプレヴェ一味の徒が、革命黨にあたへた壓抑手段はイタリーの左翼社會

黨の間に非常な反感を呼び起してゐた。そこで、新聞がロシア皇帝のイタリー訪問を傳へると、新聞紙の大多數は筆を揃へて、ロシア皇帝を「暴君」と名づけ、イタリー訪問に反對の聲を揚げた。この氣分は非常な速力でイタリー全國に瀰漫した。

ローマではあらゆる新聞紙が一齊に、もしロシア皇帝が來たら一大示威運動が起るだらうと報じた。

また當時は外國に亡命してゐたロシアの革命黨が隱然勢力をえてゐた情態であつた。したがつてもしこの連中が陛下のローマ滯在を奇貨として何か不逞の行動を計畫するかも知れぬといふ恐れを懷かした。他の一方では、イタリー皇帝ヴィクトル、エムマヌエル陛下はロシア皇帝の訪問を非常に歡迎し現在民間にある示威的な言說は單に一種の空さはぎにすぎないと親書を送つて力說し、ロシア皇帝の身上についてはイタリー皇帝が全責任を負ふてその安全を保證するとまで言つたのである。こゝで陛下もその側近者も大に進退に惑はざるを得なくなつた。それから急に內務省警保局長ロプヒンをローマに派遣して實情を視察させた。同人の齎らした報告は、全體において重大な危險があると思はれないが示威的な街頭行列くらゐの不快を見ることは免かれまいといふ事であつた。しかし百方考慮の末、陛下のイタリー訪問は一時中止することに決した。それはイタリー皇帝をして侮辱を感ぜしめない譯には行かなかつた。イタリー皇帝は、こんな行違ひを生じたのは當時のローマ駐在ロシア大使ネリドフの斡旋よろしきをえず、自分とロシア皇帝の間に立つて、表裏の傳達をしたものと考へ、遂に同大使の更迭を要求するに至つた。そこで同大使は、パリー駐在のウルソフと任地を交換することになつた。

ニコライ帝の親友？

最近二十餘年間、軍人でもなくまた官吏でもないのに、政界で大きな勢力を有つてゐた人物にメシチェルスキー侯があつた。彼れは非常に聰明な、多智多才な、しかも無主義、無節操な、目的のためには手段を選まない人であつた。

彼れの勢力の根元は、彼れが青年時代からニコライ二世帝と極めて親密であり、陛下が互ひに親しく「お前」といふ言葉を使つて交はつた人は皇族のほかには彼れ一人であると言はれた程であつた。

しかし、皇帝もさすがに彼れの人物の危險性を知つてゐた。そこで、即位直後の數年間は彼れを近づけることを避けてゐた。ところが、彼れの手段を選まぬ努力はいつか奏功して、皇帝の無二の相談相手に成つてしまつた。特に彼れが發行する新聞「グラジダニン」を皇室擁護の機關紙とした以來、彼れの陛下にたいする勢力は實に隆々たるものであつた。要路の大官たちの中にも彼れの鼻息を窺ふ者が少なくなかつた。

內務大臣シュピャギンが暗殺されて、その後任者としてプレヴェを選定するに際し、表面の推薦者はむ

ろんセルゲイ太公であつたが、裏面で皇帝を動かしたのは實にこのメシチェルスキー侯であつた。その緣故でプレヴェが權力をとるや、侯爵の彼れに對する要求も增長し、さすがのプレヴェもいさゝか持てあました。侯爵の要求を全部は滿足させなくなると共に、この二人の間に疎隔を生じたのは止むを得ない事であつた。

プレヴェが暗殺されると、侯爵は死屍に鞭うつ態度で故人の行爲を惡罵嘲笑した。それは如何にも侯爵らしい行爲であつた。しかし、これが彼の敵にとつて攻擊の好材料となつたのは止むをえない成り行きであらう。

プレヴェの死後スウヤトポルク・ミルスキー侯が內務大臣になると共に彼れはメシチェルスキー侯の人となりや彼れが宮中に勢力をもつてゐるのを危險だと見て、皇帝に直諫した。その結果、メシチェルスキー侯は宮中への出入を止められて、彼れもいまでは不遇を嘆く一人となつた。彼れはこの情勢に屈服してしまふやうな人物ではないから、いづれ機をみて捲土重來を策することであらう。しかし、ここに注目すべきことは近ごろ陛下の周圍を繞つて、その寵遇をえて來た「黑百人組」の首領プリシュケヴィチ、ドゥブロヴィン一派の人々のあることである。陰謀・虛僞・阿諛のあらゆる手段を用ひて、皇帝の意を迎合する手腕において侯爵に勝るとも劣らない彼等と侯爵との關係はどうなるであらう？　競爭か妥協か、いづれにせよ國家と皇室のためには百害あつて一利なき徒輩である。

露獨兩帝の交情

バリーからの歸途、私はベルリンでウイルヘルム二世帝の親近者の一人メンデルソン・バルトルヂに逢つた。その時彼れは次のやうなことを言つた。

『ウイルヘルム二世帝は、ニコライ二世帝が隨分永いあひだドイツ領內のダルムシュタットに滯在しながら、一向會見の希望を表さないのを不審に思つてゐる』

これは、ウイルヘルム帝がロシア皇后の兄君であるダルムシュタット公をあまり厚遇してゐないのに原因してゐることは私にはよく判つてゐる。しかしその儘にしておくことは露獨兩國の國交上にもよくないことである。そこで、私はドイツ首相ビュロー侯に、早く兩帝會見の機會を作ることを依賴した。

間もなく兩帝はポツダムで會見されたが、あとでウイルヘルム帝が側近者に語つたところによると彼れは陛下が會見中に政治談を避けるやうな態度を示し、特に極東問題には一言もふれなかつたのを甚はだ意外としてゐたといふことである。惟ふに陛下も今までのウイルヘルム帝の指導ぶりには漸やく警戒の念を起したのであらう。

陛下は歸國の途次、ポーランドで數週間を過ごすことになつたので、ラムスドルフ伯は先きに歸つ

てきた。伯はその時もなほ極東問題を平和に解決する望みをもつてゐたが、私は全たく反對の意見であつた。いま尙ほ戰爭を避けうると思ふのは、陛下の氣持を知らず、またこれまでの經過を正當に判斷しない所からくる誤謬である。私は平常から、事態を紛糾させる中心人物はプレヴェではないかといふ疑ひをもつてゐた。ところで彼が暗殺された後、その手にあつた文書調査の任に當つたドゥルノヴォの語るところによると極東に關する書類（或るものは原本で或るものは謄本）は一切彼れの手元に管理されてあつたさうである。

プレヴェの手にあつた極東問題に關する文書は、一切勅令によつてアバザ將軍に引繼がれたさうである。この男はベゾブラゾフの手下でまた親戚關係にあたるといふ。この人物については敢へて記述する必要もあるまいと思ふ。

第二十章　日露開戰！

栗野公使と私の會話

私がペテルブルグへ歸つて間もない頃のことであつた。或る日、日本公使栗野の訪問をうけた。彼れはなかなか聰明な、この戰爭を避けることをもつて使臣たるものゝ光榮ある使命だと考へてゐる立派な人物であつた。彼れはよくロシアを理解してゐた。そして日本人として能ふかぎりの熱誠をもつてロシアを愛好してゐた。彼れがその時語つた所を摘錄すれば次ぎのやうになる。

『兩國の交渉はどうも意の如くに進行もない。日本が回答期を誤まるやうなことのないに反して、ロシアはきはめて緩漫で、簡單な回答にも數週間、甚だしい場合には數ヶ月間を要することがある。この交渉ぶりから見ればロシアの眞意は開戰を欲するのではないかを疑はしめる。

『ラムスドルフ伯にいへば、彼れはアレクセエフに責任を轉嫁して即答を避けるし、ローゼン男やアレクセエフに交渉すれば皇帝（ツアー）の旅行中の故をもつて確答を避けてゐる。

『この間にもしロシアが戰爭の準備をするやうなことがなければ、日本も意を安んじてゐられるがロシアが盛んに戰爭を準備してゐることは、各方面で傳へられてゐる所である。日本の輿論はロシ

アの態度を遺憾とすることに一致してゐる。その憤慨は日々に激調を帶びて來て、政府もこれを制するに苦しんでゐる。

『そもそも極東統監とは何であるか？　極東の地はロシアの領土でもなければ、その保護領でもない。どこにロシア皇帝の派遣した統監をおく理由があるのであらう？　日本が完全な獨立國であることはロシアが獨立國であるのと少しも異なるところはない。およそ各獨立國間の交渉はそれぞれ同樣の機關をもつてその衝に當らせるのが現代の國際的習慣であり、また儀禮である。ところが獨りロシアが日本との交渉に、この名實ともに曖昧な官吏をして問題に容喙させるのは實に國際儀禮を無視した所爲でなくて何であらう』

栗野公使の言葉は實に道理であつた。もし私がこれに相當の回答をせねばならぬ地位におかれたならば、恐らく辯解に苦しんだであらう。幸か不幸か、その時の私は政權から離れてゐて、これに對して回答をあたへるべき義務も權利もなかつた。栗野公使もまた私の答辯を要求したわけでないのは判つてゐた。であるから私は彼れに、速かに外務大臣ラムスドルフ伯に交渉することを勸めた。すると栗野公使は言つた。

『近頃ラムスドルフ伯は、なにか取次番のやうな役割をやつてゐて、またそれに甘んじてゐるやうである』

と苦笑した。

その年の暮に陛下はペテルブルグの冬宮に居を移した。一月の初めには例年のとほり宮中の夜會が始まつて、世は平穩無事の春となつた。或る日の夜會で私は栗野公使に出會つた。すると公使は私を別室に招いて次の意味のことを依賴した。

『ロシアの當局は相かはらず緩漫で困る。最近の日本の提案に對しても、回答期日をすぎて一週間あまりになるのに、未だに何の答へもない。日本の輿論はいよいよ極度に沸騰して今は政府も抑へ切れなくなつた。それ故、こゝ數日のうちにロシアが決答を與へないならば、平和の解決は到底のぞみがたい情勢である。私はあなたを親友としてお賴みする。どうかラムスドルフ伯を說いて機を失せず回答をするやうに盡力して貰ひたい』

アレクセエフの無思慮

栗野公使は前年（一九〇三年）の七月に朝鮮・滿洲問題を整理するための、一の協定案を私とラムスドルフ伯に提示したことがある。その案は極めて穩當なものであつた。ロシアがこれを承認すれば日露間の紛議は平和に解決しうべきものであつた。そこで私は會議の席で極力その承認を主張したのであつた。しかし私の主張は遂に功を奏さないで、案はアレクセエフのところへ回附されて、そのまゝ

握り潰されてしまつた。實はアレクセエフはこの案を見て、日本の誠意を見透ほす眼識はなかつたのである。そしてもしロシアが悠々迫らざる態度を示して威壓すれば、日本は尙ほこの上にも讓歩するであらうと、彼れ相當の野心を起したのであらう。これは交渉を複雜にした原因ではないかと思ふ。その時の栗野公使の話は決して虛喝ではなく實情を吐露したものに相違ないと考へたので、たとへ今日の私は政界を離れた身であつても、これを棄てておくべきでないと考へた。早速ラムスドルフ伯に逢つて栗野公使の言葉を傳へ、尙ほ自分からも懇々勸告する所があつた。しかし、伯は相かはらずの伯であつた。遂に斷乎たる決意を表示することもなく、『どうも、自分には如何ともすることが出來ない。實際この交渉は自分が擔任してゐるのでないから』といふのみであつた。

これはたしか一月中旬のことであつたと記憶する。

ロシア政府は遂に相當の時機に回答を與へなかつた。

一月二十六日の夜、日本の軍艦は旅順附近でわが艦隊を襲擊して軍艦數隻を擊沈した。そして一月二十七日、遂に宣戰の布告が發せられた。

冬宮に於ける祈禱式

その翌日、冬宮で盛大な祈禱式が行はれた。が、式場は何となく陰慘の氣につゝまれて、人々の意氣は甚だあがらなかつた。陛下が式場を出て便殿にゆく途中、ボグダノヴィチ將軍が一聲高く「ウラー」を叫んだが、これに唱和した者は數人に過ぎなかつた。

その日午後私は、陛下が滯露中の外國皇族を訪問のため、皇后と馬車に同乘して、私の家の前を通つたのを見た。その時の陛下は意氣揚々として、この戰爭がロシアのために不幸だなどとは考へてゐないやうに見うけられた。

おそろしい時がやつて來た。ロシアに災禍をもたらした戰爭は始まつた。慘敗の果ては革命となり、さらに無政府狀態にまで進んだ。その禍根はどこにある？　これはみんな警察的貴族政治、詳しくいへば警察・宮廷寄生虫の政治の橫行した結果である。

神は將來我々に如何なる運命をあたへるであらうか？　我々は、今後ながく多難の道を辿らねばならぬのであらう？　氣の毒なのはわれ等の皇帝である。思へば心氣沮喪して光明を見いだすことが出來ない。哀憐の情に堪えないのは皇帝である。彼れは何を父祖に享けて、何を子孫に傳へるであらう？　思へば彼れは善良な人であつて、決して暗愚ではない。しかし一つの缺點は非常に意志の薄弱なことである。この缺點こそ彼れの治世に現はれた一切の秕政の根源であつたさうして、彼れが『神か、我か』といふ現代に比類のない專制獨裁君主であつただけに、その缺點もまた特につよく顯はれたのであつた。

官憲の指導によつて盛んに示威行列が行はれ、人心の作興に力めたが、それはあまり市民の心を惹きつけなかつた。この戰爭がいかに不人氣であつたかはこれを見ても明らかであつた。さうだ、國民はこの戰爭に同情をもたなかつたばかりか、多くはこれを咒詛してゐた。かく國民がこぞつて嫌忌した戰爭が成功しなかつたのは當然である。

クロパトキンのプレヴェ詰責

クロパトキン將軍が陸軍大臣を罷めて、まだ滿洲軍司令官に任命されなかつた時代のことである。或る日、彼れはプレヴェに向つて、今日の戰爭に同意して政治的冒險團に加擔したのは大臣中彼れ一人であることを指摘して詰責した。これに對してプレヴェは次のやうに答へたさうである。

『クロパトキン君！　君はロシアの內情をよく理解しないからそんなことを言ふのだ。いま國民の意中に潛在してゐる革命氣分を抑壓するには、どうしても、一寸でもいゝから戰爭に勝つて爲政者の威信を示す必要があるのだ』

實に驚ろくべき言葉である。これが當代一流の政治家の見識なのである。したがつて陛下も、むろん周圍の者の論議に動かされて、日本などは多少の努力を要するとしても結局はたやすく粉碎することが出來、これに要した軍費を賠償させることが出來ると簡單に考へてゐたのであらう。

開戰直後に發せられた色々の公文書類のうちにはしば〳〵『かれ等日本の「猿共」が……』といふ言葉が用ひられた。すると、國帑を貪ぼり食ふことに依つて生命をつなぐ例の「愛國的」新聞紙などが盛んにこれを唱和するやうになつた。

總司令官アレクセエフ

極東統監アレクセエフは出征軍の總司令官に任命された。彼れにして尙ほ總司令官が勤まるとしたら、それは私にでも出來ることだと言ひたくなる。

彼れはいまだ曾て陸軍を指揮したこともなく、その本職の海軍部內でさへ、實際の勤務よりは寧ろ交際と頓才とで立身した人物であることは衆知のことである。

話は三十餘年の昔にもどる。當時、若年のアレクセイ・アレクサンドロヴィチ太公が或る戀愛事件で父アレクサンドル二世帝の勘氣にふれたことがあつた。そこで、父皇帝は愛子の熱を冷ます意味で、太公を世界一周の練習艦隊に乘船させた。その時アレクセエフも靑年士官として同艦隊に勤務してゐた。

艦隊がフランスのマルセイユ港に碇泊中、太公は數名の僚友と共に上陸し、花柳の巷に足をいれたが、亂醉の極、ロシア人特有の不節制を發揮したので、遂に警察署へ召喚される始末となつた。その

時、アレクセエフは自から進んで警察署に出頭して言つた。

『亂醉をしたのは自分であるが、自分の姓アレクセエフと太公の御名のアレクセイが似てゐるために太公に累を及ぼすことになつたのは恐懼の次第である。何卒事情を吟味して自分に相當の處罰を加へられたい』

高貴の客を處分することに困惑を感じてゐた警察署長は喜こんでこの殊勝な青年士官の申し出でを容れ、輕い罰金を課して結末をつけてしまつた。これ以來、太公は非常にアレクセエフを親愛したが後年アレクサンドル三世帝の治世となり太公が海軍總司令官の職に就くと共に、アレクセエフは太公の庇護で異常な出世をすることゝなつた。關東州占領と共にその長官に彼を推薦したのも太公であつた。その後、事情の推移につれて彼が極東統監となり、さらに數十萬の大軍である極東出征軍の總司令官にならうとは、何人も夢想しなかつたところである。

一九〇三年、私が極東視察に赴いたとき、てうど旅順でアレクセエフが閲兵式を行ふところへ行きあはせた。私も國境守備隊の名譽隊長たる資格で軍服を着用する身分であるから、その式に列することになつた。それにはアレクセエフが騎馬で閲兵するであらうから、自分も騎馬で出場する用意をした。すると意外にもアレクセエフは馬に乘つて來なかつた。あとで聞くと、彼は馬に乘るどころか、非常に馬を怖がると言ふことであつた。それから彼れの軍隊にたいする態度についても色々な笑話を聞かされた。このアレクセエフが數十萬（後には百萬近くまで增大した）の大軍の總司令官になるとはどう考へても眞面目なことゝは思はれなかつた。

軍司令官クロパトキン

國民の輿論もアレクセエフの總司令官任命には極度に不安の意を表した。そこで、遂に任命後間もなく（二月八日）陸軍大臣クロパトキンが出征軍司令官に任命されることになつた。

クロパトキン將軍が出征軍司令官に任命されたのは例によつて陛下の御發意に由つたのではない。國民が彼れの戰鬪將軍としての材幹に信賴してその任命を要求した結果であつた。それは、彼れが軍司令官に任命されたにかゝはらず、アレクセエフが依然として總司令官の名をそのまゝ留保されたのを見ても判ることである。

そのために折角の適任者の起用も結局において、不合理なものとなつてしまつた。何故ならば、それ以來出征軍は二人の指揮者を持つことになつたからである。一方では同時に極東統監であるアレクセエフが總司令官として勝手な命令を發し、他方では前陸軍大臣であつたクロパトキンが軍司令官として必要と認める命令を發することになつたからである。こんな配合が統一と秩序を第一義とする軍事の上にいかに惡影響を及ぼすかは何人にも明白であり、戰時において特にさうである。この任命が

軍隊内に無意義な混亂を惹起した他に何の効果も齎らさなかつたのは當然である。

クロパトキン將軍の出發は實に盛觀を極めたものであつた。宴會また宴會、送る者は阿諛と讃美と期待の辭をならべ、送られる者は意氣軒昂として眼中すでに敵なきの慨を示し、すでに敵を粉碎した戰勝將軍の凱旋にも似てゐた。もし彼れが靜かに出發して、まづ敵を屠り、凱旋の時にはじめてこの盛觀を極めたなら、それは一層賢明な行爲であつたらうが、その反對であつたのは遺憾であつた。

クロパトキンと私の會談

出發の前夜、クロパトキン將軍は私を訪問した。その時、彼れと私の間に話し合つたことの概略を摘記して見よう。彼は私に言つた。

『君は極東の事情に精通する點において我々同僚の間で第一人者であり、また支那や日本の現狀を識る者は君を措いて他に求められない。だから彼の地における策戰の一般計畫について、必らず有益な考へがあるに違ひない。いま自分が出征するに當つてその一端を洩らして貰ひたい』

私はまづ彼れがその所見を語るやうにと求めた。すると彼は次のやうに語つた。

『我々はこの戰爭には何らの準備もしてゐなかつた。したがつて充分に準備をした敵と對抗するに足る兵力を集めるには今後數ヶ月を要するのは事實である。私の計畫としては、まづ我が兵力を必要の程度まで增加することに努力する。それの成るまではハルビンを目標として後退するが、日本軍の進行を手間取らせるために途々數回の交戰をするのは勿論である。旅順はしばらく獨自の防禦にまかす。それでも旅順は今後數ヶ月を維持しうることを確信する。歐露その他から輸送して來る兵はハルビンに近い一定の地に集結してこれを訓練する。さうして後退軍がその地點に達したとき、兩者をして大軍を編成し、同時に攻勢に移つて日本軍を粉碎するの策戰に出る他はないと思ふ』

私はこれに對して答へた。

『敵に充分の準備があり、味方はこれを缺いてゐる。敵は交戰地帶に近く一切の便利をもつてゐるが、味方は戰鬪力及軍資の補充を數千里の遠き本國に俟つ不便がある。この場合に採るべき一般方略はいま君の言つた他にあらうとは思はれない。私は全然君の策戰に同意である』

彼れは『それで私も安心した』――と言つて椅子を起つた。いよいよ別れを告げるに臨んで彼れは言葉をあらためて言つた。

『だが、ウイッテ君。君がいま我が國で比肩する者のない智才の人であることは自他ともに許すところである。であるから、假りにもし君が僕のやうな任命を受けたとすれば、必然に取るであらう秘策があるに相違ない。私はそれを敎へて欲しいのだ』

私は言つた。

『なる程、君は感心だ。いかにも僕は自分ならば必らず斯うしようと思ふ考へを有つてゐる。しかし、言つたところで、君は恐らくそれを實行しないであらう』

すると彼れは一歩私の方に進みよつて、熱心に言つた。

『それだ、それを是非聞かして貰ひたい』

私は『君は極東へどんな人達をつれて行くのか』――と問ふた。彼れは『數人の副官と幕僚數人である』――と答へた。私はなほ押し返へして『それはいづれも充分に信頼するに足る人達か』――と問ふた。彼等は『勿論』と答へた。――そこで私は次ぎのやうに言つた。

『いま總司令官アレクセエフは奉天にゐる。君は、むろん奉天へ直行するであらう。そこで僕がもし君の位置にゐるならば、僕は直ちに部下の士官數人を總司令官のところへ派遣して、總司令官を捕縛させる。今日軍隊内に行き渡つてゐる君の威信をもつてすれば、君のこの行爲に對して反抗の氣勢を揚げるやうな者は一人もある筈がない。ところで捕縛したアレクセエフには嚴重な監視をつけ、君の乘つて行つた列車に乘せてそのまゝ歐露へ送還してしまふ。同時に陛下に電報して「陛下が私に命ぜられた重大任務を完全に遂行するには、私は此地に到着して直ちに總司令官を捕縛しこれをペテルブルグへ送還するの必要を痛感いたしました。何故なれば、この第一要件を行はざれば、戰勝は思ひも寄らないからであります。陛下がもし私の專斷を罰せられるならば、私を銃殺する命を下されよ。然らざれば國家のために、しばらく私を許されんことを請ふ。謹んで命を待つ」と上奏するのだ』

その時クロパトキンは笑ひ出して手を振りながら『ウイッテ君！　君はまた例によつて冗談を言ふ』と言ふのである。私はやゝ嚴然として言つた。

『クロパトキン君！　僕は決して冗談を言ふのではない。考へて見たまへ。君が軍司令官として戰地へ着けばその時から二重命令が發せられることになるのは明瞭ではないか。これこそ將來わが軍を失敗に導びく禍根であると僕は確信するのである』

クロパトキンは『それは、君のいふ通りだ』――と言ひながら辭し去つた。

彼れはその翌日征途に上つた。彼れはすでに日本征伐をした勇士として、從來例のない盛んな見送りをうけた。

總司令官と軍司令官の衝突

戰地に到着したクロパトキンは直ちに、私に話したやうな、合理的な豫定計畫を遂行すべきであつた。ところが彼れはそれに着手しなかつたのみか、まづ第一に奉天に落ちつくこともしないで、例の官僚的な妥協態度をとつた。そして自分の計畫とアレクセエフの意見とを混合した、不徹底な策動を

始めた。元來アレクセエフといふ男は、これまでも私が時にふれて言つたやうに、何の主義も定見もあるのではない。たゞたゞ權勢におもねることを人間の能事と心得てゐる徒輩である。彼れは極東統監であつてもまた對日本軍總司令官であつても、何ら自分の意見をもつ譯ではない。ひたすら陛下の意に迎合するのみである。ところが陛下は、この時代には恰かもベゾブラゾフ一派の冒險團に幻惑されて、『日本人は猿である。そんなものは一擊の下に退治しうる』――といふ妄想を懷いてゐたのである。したがつて、これに迎合するに專念なアレクセエフの意見を顧慮するクロパトキンが遂に何事をも爲しえないのは察するに難くないのである。

アレクセエフが總司令官としてその本營を奉天においた以上、クロパトキンが自分の本營をそこに置くのを欲しないで、他處に置いたことは諒とすべきである。しかし彼れがさらに南方に進んで根據を定めたのは明らかに失敗であつた。彼れはアレクセエフよりも北方に在つてアレクセエフを監視すべきであつた。アレクセエフはクロパトキンの消極的退却政策に同意しないで、積極的に進出してまづ第一に旅順を援助することを主張した。

要するにクロパトキンはアレクセエフを輕蔑し、アレクセエフはクロパトキンを憎惡し、兩者たがひに自分に都合のよい樣に〝テルブルグへ電報を打つてゐたのである。それでもクロパトキンは成るべくアレクセエフと爭ふことを避けてゐた。そのために彼れの行動はいつも中途半端であることを免れなかつた。アレクセエフはまた何事でもまづ勅裁を請ふて（または勅裁に藉口して）、行動するのを例とした。後日クロパトキンの語る所によれば『戰爭の前半時代における失敗は主としてペテルブルグからの電命の結果である。これを證明する色々の文書は自分の手許に整理保存してある』と言つた。いづれそれが發表される機會もあるであらうが。

陛下も心中では進擊的策戰を喜んだのであらう。

例によつていつも二途に迷ふてゐた。今日は甲の說に、明日は乙の說に左袒されるのであつた。また多くの場合に甲乙の兩方を欺むくやうな態度をとつた。これは陛下の惡い癖であつて結局は自分で自分を欺むく結果になる場合が多つた。私は戰役の前半にアレクセエフが召還されてクロパトキンが總司令官に任命された事情に關してはあまり多くを知らない。しかし最初からこの期間を通じて、陛下に表裏曖昧の態度がなく、兩司令官の間に軋轢の行動がなかつたならば、前半における我が軍の戰績は決してあの樣な不良なものではなかつたであらう。したがつて後半に至つては更に好成績を現はしえたであらうことを疑はない。

ドラゴミロフ將軍の皮肉

日本との戰爭について我が國の人々がいかに樂觀してゐたかは、次ぎの一例を見ても明らかである。

一九〇四年一月二十七日に宣戰の詔勅が發せられたとき、前陸軍大臣ワンノフスキーと現陸軍大臣クロパトキンの二人が相會して、この戰爭の成行きについて商議した。その際兩國の戰鬪力の比率についてクロパトキンは日本兵一人半に對してロシア兵一人を配するのを適當とした。ところがワンノフスキーは日本兵二人に對してロシア兵一人を配すれば充分だとして互ひに論爭したさうである。これが彼我の軍事狀態に最も精通してゐるべき筈の新舊兩陸軍大臣の意見であつたのである。

戰爭が始まつて以來、陛下はその年中（一九〇四年）四方に行幸して寧日がなかつた。それはむろん極東に送られる軍隊を見送り、その勞を犒らふためであつた。さうして、その際、兩陛下から各軍隊に聖像が下賜されて、將卒の安全と好運を祈るのが例であつた。老將軍ドラゴミロフが彼れ一流の諧謔を弄して『我々が聖像や聖者の像で日本軍を打つのに、彼れ等は砲彈や爆烈彈でわが軍に應酬するのである。我々の武器は聖像で、彼れ等の武器は銃砲彈だ』――と言つたのはこの時分のことである。

奉天大會戰まで

一九〇四年中の戰爭の經過は大體左の如きものであつた。

三月三十一日　わが戰鬪艦「ペトロパウロフスク」が擊沈されて、マカロフ提督以下乘組員の大部分が戰死した。マカロフ提督は我が極東艦隊の司令長官であつたから、「ペトロパウロフスク」の擊沈と、その後わが艦隊に起つた戰艦の損傷とで、極東艦隊は殆んど戰鬪力を失つてしまつた。

四月十七日・十八日　我が軍は九連城の戰ひに敗れた。

四月二十八日　日本軍は貔子窩に上陸した。これが旅順陷落の導因であつた。

五月二十八日　旅順港附近で海戰があつた。我々はまた戰艦數隻を失つた。

八月十七日―二十三日　我々は遼陽附近の會戰に敗れて奉天方面に退却し始めた。我が軍が奉天へ退却した時、總司令官クロパトキンは最早やこの上に一歩も退却せぬと公言した。

十二月二十二日　旅順が陷落した。

それ以後の我軍の敗頽は一九〇五年に入つてからのことであるが、最後に奉天の大會戰に敗れて遂にハルビン方面へ後退を餘儀なくされたのである。

第二十一章　對獨通商條約問題

ドイツとロシアの關係

私が藏相を辭すると共に陛下は、對獨通商條約の復活を私に依賴した。それは十年前、私が藏相として締約したもので、一九〇四年が期限になつてゐた。私はすでに豫かじめ意見の交換と、外交的準備に着手してゐた。この問題はロシアとドイツ並びにウイルヘルム二世にたいする關係に重大な影響がある。だから、私はかなり詳しく說明するであらう。

私が藏相の椅子についてゐた時は、わが對外通商關係は、こんな狀態にあつた。一八九二年、アレクサンドル三世帝は、嚴然たる保護關稅率を制定した。この關稅率は、藏相ウィシニグラドスキー議長のもとに決定されたもので、當時私は局長として會議に加はつた。ビスマークもやはりドイツ帝國議會を通して保護關稅率を制定した。單に保護關稅率のみならず、戰鬪的な關稅率まで制定した。つまり、ドイツの協商國に對しては一律平等で、然らざる國に對しては、全く禁制的な關稅を制定したのである。當時ロシアはドイツと通商條約を結んでゐなかつた。これらの條約は互ひに最惠國待遇をもつて協定されたものである。それは主として、皇室が親戚だといふことに基づく傳統的親善によるものであつた。が、當時はすでに、ロシアの對獨關係は本質的に變つてゐた。

第一に――アレクサンドル三世帝はデンマークの皇女と結婚してゐた。ホォヘンツォルレン家とデンマーク皇室との仲は、プロシャのシュレスウイヒ奪取以來極めて紛糾してゐた。皇后マリア・フェオドロウナは、この奪取が、自分の祖國に齎らした悲しみをはつきりと覺えてゐる。

第二に――ビスマークが誠實な仲介者として現はれたベルリン會議が、ロシアの國民的感情を侮辱した。私は、當時の外交を左右してゐた秘密のバネ仕掛けを知らない。が、民衆の手に入つた記錄によつて察するに、ビスマークは、當時ロシアが期待したほどの友情を示さなかつたらしい。

ビスマークは「誠實な仲介者」であつたかは知れぬ。だが彼れは、プロシャ王がドイツ皇帝になれたのは、一にロシアのお蔭であるといふことを忘れてゐた。一八六六年の普墺戰爭にしろ、一八七〇年の普佛戰爭にしろ、ロシアの一存で結果はどうにもなつたのである。しかしロシアは嚴正中立を守つた。まつたくプロシャにとつて有りがたい中立であつたのである。むろんそれはロシアがセヴストーポリ戰爭におけるフランスの役割と、十九世紀前半におけるオースタリーの夫れとを忘れなかつたからである。が、主な理由は、わが皇室とホォヘンツォルレン家とが近い親戚だからである。――かくて、露獨の關係は幾分冷却した。ビスマークの頭でそれを溫めるのはむろん易々たる仕事であつたが彼れはアレクサンドル三世の人物を知らなかつた。他面、ロシアを擾亂におとしいれたあの三月一日

事件と革命の勃發は、そこから起因してゐる。彼れは、若い新皇帝を幾分呑んでかゝつた。もしビスマークが、アレクサンドル三世の鐵のやうな意志と性格、そしてあの何者にもびくともしない度胸を知つてゐたら、恐らく彼れはあんな眞似はしなかつたらう。

關稅戰爭

そんな譯で、傳統的な友誼は次第に冷却した。つひにビスマークは三國同盟を結んだ。ロシアは次第にフランス共和國に接近して、つひに露佛二國同盟が現出するといふ狀態であつた。

そんな狀態の時に、ドイツがロシアに對して通商條約を締結したい、然らずんば最高稅率案を實施する、と申し込んできた。交渉は開始された。油の乘らぬ會議であつた。この時、私は藏相になつた。ロシアの保護關稅率は國內工業の發展を目的としてゐたし、ドイツのは——あらゆる農產物を騰貴させて、農村經濟を保護しようといふ目的であつた。ドイツはこの方針によつて、農村經濟を確立する算段であつた。農民と軍人階級を滿足させる事を主要目的としたかういふ經濟上の主義原則は經濟政策の平和的改革となつて現はれた。それは經濟理論と全く矛盾したものであつた。保護貿易と自由貿易との優劣は、實際上からも理論上からも一世紀間も論爭が續けられてゐる。無數の書物が發行されてゐる。保護はたゞ工業生產品のみで、原料品には關係がなかつた。原料品、殊に日常食糧品に關稅を課するといふ考へは、これが十八世紀の前半であつたら單に異端視されたばかりでなく、狂人沙汰とされたであらう。ところが、現にさういふ政治家が現はれたのである。彼れはこの民衆に缺くべからざる食糧品に保護關稅を課した。

やがてドイツについで、イタリー、フランス、その他二三の國がそれをやり出した。

それが正しい原理であるかどうか、その點について經濟史は、まだ最後の言葉をあたへてゐない。

私には、經濟史は結局この原理を不合理と認めるであらうと思へる。が、經濟學は單なる數學ではない。その原理は絕對ではなく、形勢によつて變動するものである。いまやヨーロッパ一等國の生活にまで、高い關稅がかゝつてゐる。が、その案にはもう一つの反面がある。——それは疑ひもなく、社會主義の發展を助成してゐるのである。

私がドイツと交渉した當時は、この關稅はロシアの商品を驅逐するため、戰鬪的な關稅を賦課してゐた。つまり、ロシアの輸出品に對しては他の列强、殊に原料輸出においてロシアの競爭者たるアメリカの商品よりも、遙かにひどい關稅がかけられてゐた。アメリカにしてもドイツとは通商條約を結んではゐないのである。かういふ行動は、私を、讓步どころか經濟戰爭に驅り立てた。

私は藏相の椅子につくや否や、かうした局面の轉廻を豫想して、あらゆる場合における戰鬪的關稅を、參議院にはかつておいたのである。參議院ではまさかそんな事はあるまいと思つて、一とまづ私

の提議に協賛を與へた。私は、萬止むを得ざる場合のほかかゝる手段には出まいと、參議院に誓つておいた。この稅率は、勅令によるほかは適用出來ないことになつてゐる。そして參議院は『外相はどんなことがあつてもそれを拒むに違ひない』――と考へてゐた。

ドイツがロシアに對して最高稅率案を適用した時は、陛下は私の報告によつて、ドイツ商品に對するわが最高稅法適用の勅令に署名した。ドイツはそれに對し、小面倒な新手段で應酬した。私の報告によつて陛下はまたそれに對し、參議院に內密で最高稅率の引き上げに署名した。對獨通商關係は事實上不可能になつてしまつた。この我々のやり方は、ドイツ政府をすつかり手古ずらしてしまつた。

當時ビスマークはすでに退職して、カプリウィがその後任になつてゐた。

ロシア政府は、ドイツ同樣にまごついた。多くの者は、いまにも戰爭が始まるかと思つた。私は恰度その時、陛下のゐたペテルゴフへ出かけたのを覺えてゐる。私が姿を現はすと、群集はさつと私に道をひらいて、大聲で私を批評し合つた。聽いてゐると、まるで私が、無理にもロシアを戰爭へ引つぱり込まずには措かない青年だ、といふやうなことを言ひあつてゐた。各大臣のうちで、たゞ陸相ワンノフスキーだけが、私の側に立つた。陛下は泰然としてゐた。私はそのお蔭で、すつかり氣分が落ちついたのを感じた。私は陛下は私を置きざりにはしないだらう、私を大臣として最後まで支持されるだらう、さうあつてこそ、始めて專政國家で仕事がやつてゆけるのだ、と確信した。

もしニコライ二世が、あの十月十七日事件のあとですぐさま私をいぢめたり、私の背後で因循で慘酷な、氣狂ひじみた勝手な手段を弄したりしなかつたら、恐らく、十月十七日事件は、あんな結果には終らなかつたであらう。

私が思ひ切つた手段に出たので、その後のビスマークは明らかに私に特別の注意を向けはじめた。そして、幾たびか知人に向つて、私のことを賞めちぎつた。

經濟戰爭が爆發して、双方――殊にドイツがさういふ行動の失敗を感じはじめると、交渉は急にまじめな性質を帶びてきた。そしてドイツは輿論にしたがつて、以前には聞くのも厭がつた讓步を肯んじた。ウイルヘルム帝に極めて信任の厚いカプリウィは議會の協賛を經て、ロシアに提起した讓步的通商條約を通過させた。農民と軍人階級は極度に反對したが、省みなかつた。間もなく條約はベルリンで、カプリウィとロシア大使シュワロフ伯とによつて調印された。

戰ひは終つた。そしてウイルヘルム帝はカプリウィに伯爵を授けた。が、農民と軍人階級は、彼れを激烈に攻擊した。そこで彼は辭職した。

私はアレクサンドル三世帝から感謝された。この感謝は、私にとつては、あのポーツマス條約後にニコライ二世帝がくれた伯爵よりも、どんな褒美よりも、有り難かつた。

獨帝の軍服道樂

その際、私はアレクサンドル三世帝とこんな話をした。

ウイルヘルム二世は軍服道樂である。彼れはロシア提督の軍服を非常に欲しがつてゐた。ベルリンから私のところへ、一着賴んでよこしたのである。アレクサンドル帝が私に條約締結の禮をいつたあとで、こんどは私が陛下に一つのお願ひがあると言つた。まづ私は、ウイルヘルム帝が議會で、この條約の締結に特別の斡旋をするであらうことを述べてから、ロシア提督の軍服が欲しいといふウイルヘルム二世帝の切なる願ひを語つた。私は言つた。

『陛下、このウイルヘルム帝の懇望をかなへて戴けますまいか』

ドイツ皇帝にたいしてあまり快からぬ陛下は、その時微笑して、私にかう答へた。

『ドイツ皇帝のこんどの遣り方は全く正しい。自分はいつなりとも君の望みを聽くであらう。いつでもいゝから言つて來給へ』

しかしその機會をえないうちに、アレクサンドル三世帝は間もなく死んだのである。私はその後ニコライ二世帝にその話をした。彼れはこの前の會見の際、ドイツ皇帝に提督服をおくつた。

ウイルヘルム帝の軍服道樂の話をした序でに、もう一つこれと似た話をしよう。私が大臣委員會議の議長だつた頃、ウイルヘルム帝は、ロシアの侍從長の制服がほしいと言ひだした。私は當時勘氣にふれてゐたので、陛下にそれが言ひだせなかつた。話はうまく纏まらなかつた。或る時、ミハイル・ニコラエヴィチ太公が外國から歸つて私にかう言つた。

『ウイルヘルム帝は私をまるで皇族中の長老でもあるかのやうに扱はれた。私がホォヘンツォルレン家とロマノフ家の親善關係の傳統を何でも知つてゐるものと思つてゐる。そして、わが皇帝に傳言――といふより寧ろ次のやうな、兩家に傳はる不文律を說明することを私に賴んだ。それは、一方の皇帝が何か自分に位階をつけると、他方の皇帝の承認なしにその位階がそのまゝ相手の國に適用する、といふのであつた。たとへばドイツの皇帝が、ドイツの元帥服を着用すれば、彼はそのまゝロシアの元帥たる權利を持つ、といふのであつた』

太公は皇帝にこの事實をつたへたが、私はその後この問題がどうなつたかあまり興味を持たなくなつた。

專制君主について

第一回對獨通商條約は、その後他の諸國との條約締結の基礎となつた。それは一に、アレクサンドル三世帝の鐵石のやうな意志のお蔭で成功したのである。それにつけても、私はこの英邁な皇帝につ